

厚生労働省

平成 21 年度障害者保健福祉推進事業（障害者自立支援調査研究プロジェクト）採択

「障がいを持つ音楽家および作品の評価向上・普及促進事業
—ICT を利用した支援のあり方の研究を通して」

特定非営利活動法人日本バリアフリー協会

目 次

はじめに	
特定非営利活動法人日本バリアフリー協会 代表理事 貝谷 嘉洋	・・・ 3
研究事業の概要	
事業の目的	・・・ 4
事業の実施概要	・・・ 4
事業の具体的内容	・・・ 4
研究事業の実施報告	
事業 1 「障がいをもつ音楽家のさらなる発掘・研究」	
1-1.障がいをもつ音楽家発掘の概要	・・・ 6
1-1-1.ゴールドコンサートとは	・・・ 7
1-1-2.ゴールドコンサートにおける障がいサポート	・・・ 9
特定非営利活動法人日本バリアフリー協会 寺谷 あかね	
1-1-3.障がいを持つ音楽家の発掘における取り組み	・・・ 11
特定非営利活動法人日本バリアフリー協会 土屋 直子	
1-2.研究の概要	・・・ 14
1-2-1.音楽家へのアンケート調査の方法	・・・ 15
1-2-1-1.アンケート調査票	・・・ 16
1-2-1-2.アンケート調査における聴取意見の分析結果	・・・ 19
1-2-2.音楽家および家族への面接調査の方法	・・・ 29
1-2-2-1.面接調査票	・・・ 30
1-2-2-2.音楽家への面接調査	・・・ 33
1-2-2-3.音楽家の家族への面接調査	・・・ 53
1-2-2-4.面接調査における聴取意見の分析結果	・・・ 58
事業 2 「作品のデータベース化・インターネット上での公開、一般との交流サイト設置」	
2-1.事業の概要	・・・ 61
2-2.作品のデータベース化・インターネット公開における取り組み	・・・ 62
2-3.アクセシビリティにおける取り組み	・・・ 63
第 6 回ゴールドコンサート実行委員 山本 真也	
事業 3 「コンテスト当日のインターネット生放送、一般の評価を分析」	
3-1.事業の概要	・・・ 67
3-2.インターネット生放送における取り組み	・・・ 68
第 6 回ゴールドコンサート実行委員 山本 真也	
3-3.インターネット生放送におけるアクセス分析	・・・ 69
3-4.コンテストの観客へのアンケート調査の方法	・・・ 71
3-4-1.アンケート調査票	・・・ 72

3-4-2.アンケート調査における聴取意見の分析結果	・・・73
事業4「音楽家の支援についての教育・啓発用DVD制作」	
4-1.事業の概要	・・・79
4-2.音楽家支援についての取り組み	・・・80
4-2-1.ICT活用がひろげる障がいがある人の世界	・・・80
早稲田大学 人間学学術院 教授 畠山 卓朗	
4-2-2.ゴールドコンサートを通じた見た障害者ミュージシャン	・・・82
音楽ジャーナリスト 工藤 由美	
4-2-3.	・・・84
音楽評論家 吉岡 正晴	
4-3.支援者へのアンケート調査の方法	・・・85
4-3-1.アンケート票	・・・86
4-3-2.アンケート調査における聴取意見の分析結果	・・・88
研究結果の活用	
問題解決への取り組み	・・・96
特定非営利活動法人日本バリアフリー協会 代表理事 貝谷 嘉洋	

はじめに

特定非営利活動法人日本バリアフリー協会

代表理事 貝谷 嘉洋

(本事業主任研究者)

我が国の障がい者施策においてノーマライゼーション社会の実現を目指すことが語られて久しい。ノーマライゼーション社会とは、障がい者も地域で同年代の人と同じような生活を営むことができる社会である。

現在の我が国の状況は、先進諸国の中では最もノーマライゼーション社会の実現が遅れていると言わざるを得ない。

それは、一般の教育機関や職場などへの就学・就職が極めて制限されているからである。

このような状況において、私どもは、障がい者の音楽コンテスト(ゴールドコンサート)を2003年度より毎年開催してきた。それにより、障がいに対する一般の人々の見方、障がい者に対するイメージをポジティブなものに変えるよう図り、今後の就学・就職時の受け入れを促進し、ひいてはノーマライゼーション社会の実現に寄与することを目指してきた。

ゴールドコンサートにおいては

「障がいをもっているとは思えないような音楽性」

「普通のコンサートよりも見ごたえがあった」

というような観客から好評を多数いただいていた。また、障がい者の出場者からは

「音楽活動が広がるきっかけになった」

「コンテストで賞をとるために一生懸命努力できた」

というようなポジティブな意見をいただいていた。

このような中、障がいをもつ音楽家が脚光を浴びるようになった。記憶に新しいのは、ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールで優勝した視覚障がいをもつ辻井伸行さんである。また、昨年第2回ゴールドコンサートの出場者、視覚障がいをもつ立道聡子さんが大手レコード会社からメジャー・デビューした。

障がい者の音楽活動は、一般の人々の障がいに対する見方を変えるのみではなく、障がいをもつ音楽家自身の自立・社会進出を促進する可能性が非常に高いことを強く感じた。

そこで、次の段階として本事業において、障がい者の音楽活動の特性を分析し、音楽活動を行うためにどのような障壁がありニーズがあるのかを導きだし、我が国のノーマライゼーション社会の発展に寄与したい。

研究事業の概要

事業の目的

2003年以降5回にわたり、障がい者が出場する全国規模の音楽コンテストを開催した。この企画・運営を通して、多くの障がいをもつ音楽家を発掘し、その作品を一般に紹介することによって、音楽家および作品に対して、一般聴衆から評価を得るに至った。

今後、より広範囲で音楽家を発掘し、音楽家および作品の評価を向上させる必要性を充足するため、障がいに対する支援、音楽活動に対する支援についてのニーズを調査する。

音楽コンテストの実施を通して、音楽家への支援に関する方法論を研究することにより、音楽家の自立・社会進出の促進に資することを目的とする。

事業の実施概要

重度筋ジストロフィーの法人代表が、障がいをもつ音楽家の個性と才能に感銘を受け、仲間に声をかけて音楽家を発掘し、コンテストを開催することによって、作品を一般聴衆に紹介し、ある程度の評価を得るに至った。

そこで、次の段階としてより広く発掘し評価を向上させる必要性が出てきた。

- ① データベースの作成
- ② 専用ホームページにおける公開
- ③ コンテストのインターネット生放送
- ④ 教育用DVDの制作・配布

を通して、障がい当事者の代表らを中心に、これまでのネットワークを活かした企業、教育関係者、音楽業界の方の協力のもと、調査・研究をする。そして、研究成果を障がいを持つ当事者および家族、教育関係者などに向けて公表することにより、同音楽家の自立・社会進出の促進に資する。

事業の具体的内容

1. 障がいをもつ音楽家のさらなる発掘・研究

- ・ 文献、インターネットを閲覧し、障がいをもつ音楽家を検索した。
- ・ 本年のコンテストにおいて、マスメディアへの働きかけおよび郵便物の送付を通じて、テープ音源を募集した。

- ・ コンテスト6回分の応募作品（386件）をデータベース化した。
- ・ コンテスト6回分の応募者386組のうち、転居などにより連絡が取れない者、重複して応募している者を除き、292組について、必要な支援に関するアンケート調査をした。
そのうち、95組から回答を得た。
- ・ アンケートの回答者（95組）のうち、13組15名に対し、調査員が訪問しナラティブの手法を使った調査を行った。
内訳：障がいを持つ音楽家／13名
障がいを持つ音楽家の家族／2名
- ・ そのデータベース、調査結果を利用して、属性、分布、特性、支援のあり方について、専門委員会による研究をした。専門委員：全5名

2. 作品のデータベース化・インターネット上での公開、一般との交流サイト設置

- ・ 障がいをもつ音楽家を支援するポータルサイトを設置した。全6回コンテストへの応募者（292件）のうち、本人の承諾を得たものを掲載した。
- ・ プロフィール、写真、音源、コンサート情報、活動報告、ブログなどを、障がい者本人が書き込めるシステムとした。
- ・ ナレッジデータベース、リンク集を作成することより、障がいをもつ音楽家の活動のために必要な情報を提供した。
- ・ 音源および映像の再生に配慮した、ウェブアクセシビリティ化を図った。
運営委員会：全5名 システム構築業者：3社

3. コンテスト当日のインターネット生放送、一般の評価を分析

- ・ アクセシビリティに配慮した字幕および手話入り映像（精細・高音質）を撮影し、インターネット上で生放送をした。
- ・ 全国の特別支援学校の校長会の協力を得て、児童・生徒（10万名）に告知した。
- ・ 映像作品のアクセシビリティのあり方について、1の専門委員会による研究会を行った。
- ・ コンテストの観客1,015名に対して、会場で演奏された音楽作品の音楽性、技術に関するアンケート調査票を配布した。そのうち、544名から回答を得た。
- ・ 過去5回に実施したコンテストのアンケート調査の再分析も合わせ、1の専門家委員会が分析を行った。

4. 音楽家の支援についての教育・啓発用DVD制作

- ・ 本事業も含め、当法人が行ってきた支援活動の中で解決したこと、今後の課題などについて約1時間に編集した。映像制作：1社
- ・ 全国の特別支援学校の校長会の協力を得て、児童・生徒（10万名）に視聴してもらった。
- ・ コンテストの協力者（ボランティア参加者：250名）に、支援者の立場から捉える音楽家の支援に関するアンケートを配布した。そのうち、69名から回答を得た。
- ・ 音楽家への支援のあり方について、分析を行った。

研究事業の実施報告

事業1「障がいをもつ音楽家のさらなる発掘・研究」

1-1. 障がいをもつ音楽家発掘の概要

障がいをもつ音楽家をチャレンジド（障がい者）・ミュージシャンと呼び、高い音楽性および技術力を審査基準としたコンテスト「ゴールドコンサート」を、年1回開催している。

参加者を集める方法として、

- ① ラジオ、インターネット、紙面などのメディアを使った告知
- ② 他団体主催の音楽イベント、番組などにおける出演者に対する声かけを行っている。

発掘とは、

- ① 方法①において、特別支援学校、福祉施設などに向けて、チラシやポスターなどの送付によって、ゴールドコンサートに関するお知らせと応募の呼びかけを行う。
- ② 方法②において、音楽イベントに出向き、直接音楽家に声かけを行う。または、音楽家が出演するイベント、番組の主催者・運営者を通して、音楽家に声かけを行う。

を意味する。

募集活動の対象として、

- ① 一般の音楽家（作品を発表したことがない、もしくは発表経験が少ない音楽家）
 - ② 音楽を専門とする音楽家（すでに、作品の発表経験を多く持つ音楽家）
- を想定している。

目的は、

- ① 一般の音楽家に対し、優れているが、現在埋もれている才能を見出す。
- ② 音楽を専門とする音楽家に対し、音楽家としての飛躍のきっかけを提供する。

である。

発掘の成果として、活動によって応募を促し、ゴールドコンサート出演に至った音楽家の中から、メジャーデビューする者が出た。

1-1-1. ゴールドコンサートとは

第6回ゴールドコンサートについて

||| 日時

2009年10月12日（月・祝）

||| 場所

東京国際フォーラム ホールC 最大席 1,502席

||| 趣旨

チャレンジド（障がい者）ミュージシャンのコンテストであるゴールドコンサートは障がい当事者が企画・運営を行うことにより、障がい者の自立と社会進出を促進する。また、このコンサートに行政、企業、学校、地域の方々が広報、協賛、ボランティア、観覧など様々な形で参加することにより一般社会への理解を深める。

||| 概要

全国のチャレンジド・ミュージシャンを対象に音楽作品を募集し、その応募作品を専門の審査員が音楽性を基準として一次審査を実施（応募作品数 52 件）。一次審査を通過した 10 組と昨年から引き続き国際化推進を図るため韓国から 1 組の計 11 組が出場。当日その 11 組からグランプリ、準グランプリ、審査員特別賞を決定。また親子の絆をテーマとした今回は特別出場として発達障がいの OUT OF TUNE が参加した。また 5 周年記念ゴールドコンサート（2008 年）グランプリ受賞大石亜矢子と特別ゲストとの共演も行う。

審査員長	湯川 れい子（音楽評論家、作詞家）
審査員	音楽業界より 6 名、社会福祉業界より 2 名、出版業界より 1 名
特別ゲスト	今井 絵理子（elly）
出場者	11 組（視覚 6 組、肢体 2 組、発達 2 組、内部 1 組）
司会	鮎貝 健、長崎 圭子
ご挨拶	野田 聖子（衆議院議員）、中田 有紀（フリーアナウンサー）
ビデオメッセージ	三倉 茉奈、三倉 佳奈
来場者数	1,015 名（児童・生徒招待 272、車いす席 36 を含む）
出場関係者	50 名（出場者 39 名 介助関係者 11 名）
スタッフ	約 250 名（ボランティア含む）

||| ゴールドコンサート主催者

貝谷嘉洋。当法人の創始者。筋ジストロフィーのため電動車いすに乗り全面介助が必要。カリフォルニア大学大学院留学中に、手先だけで運転できるジョイスティック車でアメリカ一周、その後本邦初の新規免許取得。小学館刊「介護漫才」をはじめ著書多数。現職は当法人の代表理事のほか、NHK 厚生文化事業団障害福祉賞の専門委員。ゴールドコンサートを始め全国でイベント開催、講演をおこなっている。

||| ゴールドコンサートをはじめたきっかけ

貝谷嘉洋が、デンマークのグリーンコンサートを見学した。

これは障がい当事者団体が毎年開催する 20 万人規模の野外音楽祭で、障がい者の自立について理解を深める目的で行われている。「お涙ちょうだいの」な要素はなく、企業やボランティア、観客が自然体で参加している。

貝谷はグリーンコンサートに大きな感銘を受け、その日本版を立ち上げることにした。

||| ゴールドコンサートの生い立ち

障がい者(チャレンジド)・ミュージシャンのコンテストとして、全国から様々な障がいをもつ 14 組がグランプリを競い、千代田区の小さな区民ホールで 2003 年に産声を上げた。第 3 回からは、スポンサーが飛躍的に拡大し、東京国際フォーラムで毎年開催されるようになり、字幕・手話による情報保障、インターネット生放送、子供たちの無料招待、国際化と意欲的に企画を充実させてきた。

2008 年に 5 周年を迎えたが、その頃にはミュージシャンのレベルも上がり、大手レコード会社からメジャーデビューを果たすなど、社会的な評価も高くなってきた。また、審査員、ゲストには多くの著名の方が加わってくださり認知度も上がっている。

2009 年 3 月 31 日日刊スポーツ

GC2 出場の立道聡子さん

メジャーデビューの記事掲載



デンマークグリーンコンサート



1-1-2. ゴールドコンサートにおける障がいサポート

1. 手話通訳

聴覚に障がいがある方のために、ステージ上での音声を手話で同時通訳してくれます。毎回「聴覚障害児と共に歩む会 トライアングル」の方にご協力をいただいています。また、今回からは会場のスクリーン及び、インターネット生放送にも手話通訳の画面が写るようにしました。(※1) とても評判が良かったので今後も続けて行きたいと思っています。



(後略)

2. パソコン文字通訳

聴覚に障がいのある方やまた手話が分からない方のために、ステージ上で発せられた音声と歌詞を、スクリーンにて文字として映し出してくれます。毎回「★PC字幕 [F l e x]」の方にご協力いただいています。当日はもちろん、事前に分かる部分の打ち込み準備や、演奏と合わせて歌詞を映し出す為、全ての楽曲を聴いて合わせていただきました。

※ 今回は、特別ゲストに、聴覚に障がいがある息子さんをもつ今井絵理子さんに来ていただいたので、聴覚障がいの方も多くご来場くださいました。歌詞のある楽曲についてはスクリーンに映し出されますが、演奏のみの場合は何も聞こえない状態が続きます。体感音響システム(※2)があれば今以上に楽しむことが出来るかも、という声もありました。聴覚に障がいを持つ方にもコンサートを楽しんでいただくために、今後、体感音響システムの準備が出来たらいいと思います。



※ 音を振動によって体で感じる事が出来る装置

3. 点字チラシ・プログラム

視覚に障がいを持つ方のために、開催チラシとプログラムの点字版を準備しました。この点字版は「日本テレソフト」さんにご協力いただいています。実は、現時点では報告書の準備がありません。出場者にも視覚障がいの方が多く、報告書にもコメントをいただいていますので、今後、点字版が準備できたらと思います。

4. 車いす席

会場の最前列から4列目までの座席を取り外し、36席の車いす席(介添え者席含む)を準備しました。車いす席には、それぞれの枠に車いすで入るか、介添え者の為のいすを置くことが出来ます。それにより、車いすの方がご友人と一緒に観覧できるようにしました。

なお、会場内のすべての座席において、必要な方には介添え者1名様座席が無料となっています。

【参考資料】

第7回ゴールドコンサートにおける、応募者募集告知

第7回 **ゴールドコンサート**

開催決定

日程 2010年10月3日(日)

会場 東京国際フォーラムホールC

募集要項、応募用紙をご希望の方は2月中旬より、
協会ホームページ(<http://www.npojba.org/>)よりダウンロード頂くか、
郵送希望の方は封筒に「募集要項希望」と明記のうえ、
80円切手を貼付した返信用封筒を同封し事務局まで郵送願います。
なお、ご不明な点は下記までお気軽にお問い合わせください。

NPO法人日本バリアフリー協会

〒102-0093 東京都千代田区平河町1-7-16-801

info@npjba.org

<http://www.npojba.org>

1-1-3. 障がいをもつ音楽家の発掘における取り組み

土屋 直子（特定非営利活動法人日本バリアフリー協会）

ゴールドコンサートにおける障がいをもつ音楽家発掘の取り組みとして、

- ① マスメディア発表による、募集告知（対象：障がいをもつ音楽家全体）
- ② 音楽教育を行っている学校への、募集要項送付（対象：障がいをもつ子ども）
- ③ ゴールドコンサート実行委員が文献、インターネット検索を行った音楽家への、応募への勧誘（対象：障がいをもつ音楽家のうち、音楽活動に対する意識が高い者）
- ④ 口コミ効果をねらった、インターネット上の書き込み（対象：不特定多数）を行った。

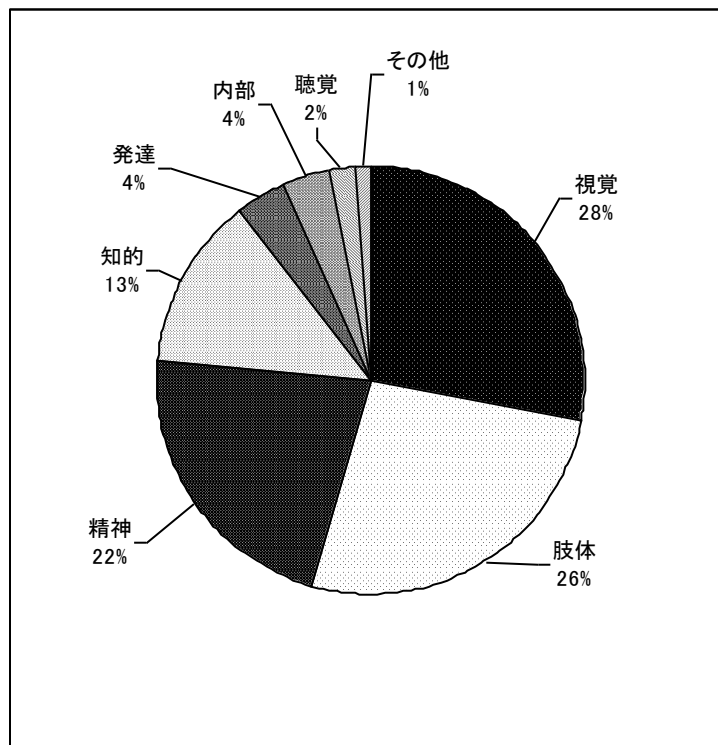
具体的には、

- ① メディアへの募集告知依頼
NHK 各地方放送局、その他民放各地放送局
雑誌社、新聞社
各団体会報誌
- ② 学校・施設への募集要項の設置
特別支援学校、特別支援学級設置校、盲学校
福祉施設、児童擁護施設
音楽大学、楽器店
- ③ 個人への応募案内
過去応募者・出場者
障がいをもつ音楽家
- ④ その他告知
当法人ホームページによる告知、当法人メルマガによる告知
関係者ホームページ・ブログによる告知、関係者メルマガによる告知
SNS への書き込み
SEO 対策（インターネット検索に対応した活動）
関係者からの口コミ

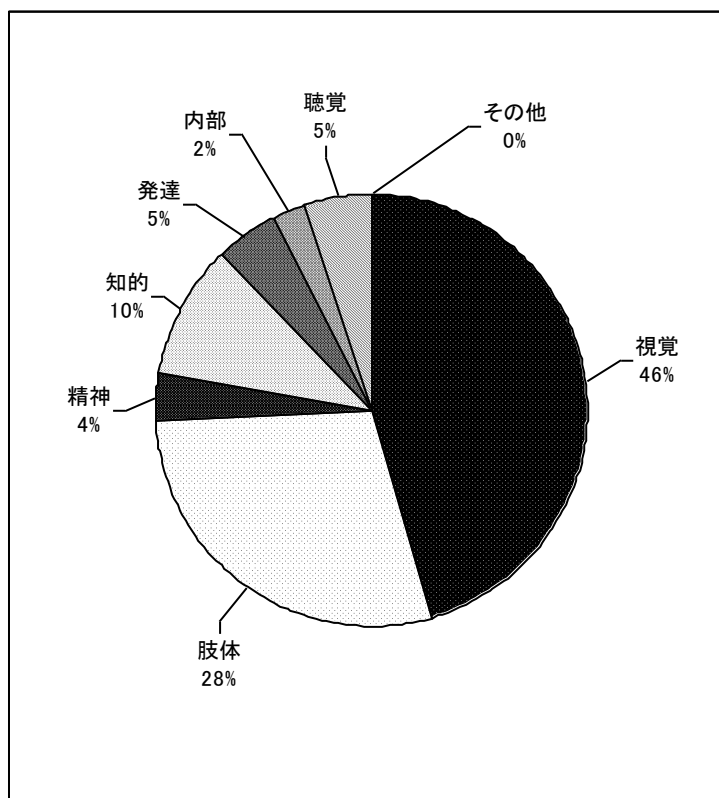
今回の取り組みにおける効果として、ゴールドコンサートへの応募者うち、過去にゴールドコンサートに応募したことのある者のリピーターが大半を占めた。

今後の取り組みとして、新規の応募者発掘のための方法を再考する必要がある。

応募者障がい別構成比 (n=386)



本戦出場 (一次審査通過) 障がい別構成比 (n=81)



障がいをもつ音楽家発掘に関する活動実施状況

障がい者の発掘のため、関係者ならびに行政、福祉団体、学校関係等下記日程においてちらしの配布や情報収集を行った。

日付	従事者	行き先
2009.6.7 (日)	貝谷、寺谷、佐藤、土屋、大石	宮城県仙台市
2009.10.25 (日)～26 (月)	貝谷、村上、福島	京都府京都市
2009.11.15 (日)～16 (月)	貝谷、寺谷	群馬県館林市
2009.11.24 (火)～25 (水)	寺谷	北海道函館市、北斗市、二世郡
2009.12.17 (木)～18 (金)	土屋	長野県長野市、上田市
2009.12.25 (金)	貝谷、土屋	愛知県名古屋市
2010.2.5 (金)～8 (月)	貝谷、布村、山本	宮城県宮崎市 熊本県熊本市
2010.2.28 (日)～3.2(火)	貝谷	岩手県盛岡市 青森県青森市 宮城県仙台市

1-2. 研究の概要

以下の計画をもって、研究を行った。

事業名	障がいをもつ音楽家および作品の評価向上・普及促進事業 —ICT を利用した支援のあり方の研究を通して
研究テーマ	障がいを持つ音楽家の音楽活動に対する、ICT を利用した支援
言葉の定義	<p>1 音楽活動 音楽家が、聴衆に対して作品を発表すること。</p> <p>2 ICT Information and Communication Technology (情報通信技術)。 ネットワーク通信による情報・知識の共有を念頭に置く。</p> <p>3 支援 ① 音楽家の自主的な音楽活動に対すること。(活動の宣伝など) ② 音楽活動に付随すること。(作曲・演奏に対する支援など)</p> <p>4 作品 ① 音楽家が作曲または作詞、または両方を手がける楽曲。 ② 音楽家以外が作り、音楽家が演奏する楽曲。</p> <p>5 音楽家 ゴールドコンサートに応募または出場した、障がいを持つ人物。</p>
目的	この研究では、ゴールドコンサートにおいて音楽家および支援者および聴衆が、それぞれの立場においてどのような支援を必要としているかを考察することにより、作品が普及するために、または作品の評価が向上するために、どのような支援が有効かについて検討、選択するための基礎研究となることを目的とする。
背景	情報技術の分野で、操作性など、誰にとっても便利な道具になりつつある。
対象	ゴールドコンサート (全6回) に応募した音楽家
研究の概要	<p>アンケート調査を行い、回答を集計する。</p> <ul style="list-style-type: none"> アンケートの回答者に報告することによって、支援を考えるきっかけにする。 事業における専門委員による研究会のための資料を作成することによって、支援を検討する材料にする。 <p>アンケートに協力した音楽家のうち、およそ10名にインタビュー調査を行う。</p>
仮定	音楽家において、「障がいをもつ」ことを前提とすれば、ICTによる支援が、彼らの活動範囲の広がりという観点で、有効である。彼ら自身が必要とする支援の内容は、面接調査によって明らかにする。
参考	社会福祉および芸術支援に関する情報全般。

1-2-1. 音楽家および家族へのアンケート調査の方法

以下の計画をもって、研究を行った。

調査方法	調査対象者によるアンケート票記入（選択式、記述式含む） ただし、本人による記入が困難な場合は、家族などノートテイカーによる代筆可
調査対象者	悉皆 第 1～6 回ゴールドコンサートへの応募者全員のうち、転居などにより連絡が取れない者、重複して応募している者を除いた 292 組。
有効回答数	95 組
集計方法	選択式：質問事項ごとの単純集計 記述式：ゴールドコンサートへの要望を除く部分を、列挙
分析方法	選択式：質問事項ごとの有効回答数における、選択項目の割合（%表記） 記述式：発言内容の趣旨、または類似のキーワードによるカテゴライズ

なお「第 9 回とっておきの音楽祭」に参加し、障がいをもつ音楽家のアンケート・面談をするにあたっての下調べ及び障がいをもつ音楽家の発掘を行った。

日時：2009 年 6 月 7 日（日）
従事者：貝谷・寺谷・佐藤・土屋

とっておきの音楽祭とは？

今回で 9 回目を迎える、とっておきの音楽祭は 2001 年仙台市ではじまった障がいがある人もない人も一緒に音楽を楽しみ音楽の力で心のバリアフリーを目指す街をあげての音楽祭。

1-2-1-1. アンケート調査票

III 原票

当てはまる項目の□に、v をつけてください。

1. ゴールドコンサートに出場したことは、ありますか？

ある ない

2. ご自身で、現在音楽活動をしていますか？

している していない →4へ

3. 現在音楽活動をしている方に、お伺いします。どのような活動をしていますか？

ライブ・コンサート出場 自主制作CD・DVDの制作

自分のサイトにて発表

その他サイトにて発表

(サイト名：)

テレビ・ラジオなどのメディア出演

その他 ()

4. 現在音楽活動をしていない方に、お伺いします。今後、音楽活動をしたいと思いませんか？

したい したくない →6へ どちらともいえない →6へ

5. 現在音楽活動をしていない方のうち、今後音楽活動をしたい方に、お伺いします。

どのような活動をしたいと思いませんか？(複数可)

ライブ・コンサート出場 自主制作CD・DVDの制作

自分のサイトにて発表

その他サイトにて発表(サイト：)

テレビ・ラジオなどのメディア出演

その他 ()

6. 音楽活動をする上で、必要な支援はありますか？

必要な支援がある 必要な支援はない →8へ どちらともいえない →8へ

7. 音楽活動をする上で必要な支援がある方に、お伺いします。どのような支援が必要ですか？

(複数可)

ライブの開催 自主制作CD・DVDの制作 レコード会社(インディーズ)の紹介

レコード会社(メジャー)の紹介

会報誌「リブレ」による宣伝

当法人サイトにて紹介

その他サイトにて紹介(サイト：)

テレビ・ラジオなどのメディアの紹介 作詞・作編曲・演奏のサポート

- CD・DVD制作の技術的サポート
ライブおよびCD制作などのボランティアの付き添い バンドメンバーの紹介
その他 ()

8. プロの音楽家を、目指していますか? ※ここでは、音楽でお金を稼ぐことを意味します。

- 目指している 目指していない →11へ どちらともいえない →11へ

9. プロの音楽家を目指している方に、お伺いします。何を目指していますか?

- 作詞家 作曲・編曲家 演奏家 声楽家 その他(職業:)

10. プロの音楽家を目指している方に、お伺いします。

どのようなかたちで、プロになりたいですか? の欄に、優先順位をつけてください。

- ライブ活動 自主制作CD・DVDの制作 インディーズデビュー メジャーデビュー
インターネット販売

11. ゴールドコンサートへのご応募をきっかけに、変化はありましたか?

- 変化があった 変化はなかった →14へ どちらともいえない →14へ

12. 音楽に関して変化があった方に、お伺いします。どのような変化がありましたか? (複数可)

- ライブ活動をはじめた 自主制作CD・DVDの制作をはじめた インディーズデビューした
メジャーデビューした インターネット販売をはじめた
テレビ・ラジオなどのメディアに出演した その他のメディアに載った(内容:)
バンドを組んだ その他の音楽活動をはじめた(内容:)
音楽活動への意欲が増した
音楽活動をやめた 音楽活動への意欲が減った その他の後ろ向きな気持ちをもった

13. 音楽以外に関して変化があった方に、お伺いします。

どのような変化がありましたか? (複数可)

- 就業した 進学した その他の活動をはじめた(内容:)
就業への意欲が増した 進学への意欲が増した その他の前向きな気持ちをもった
周囲との交流が増えた 外出の回数が増えた 趣味をはじめた
これまでしていた活動をやめた 活動への意欲が減った
その他の後ろ向きな気持ちをもった
その他 ()

14. 来年以降も、ゴールドコンサートに応募したいと思いますか?

- 応募したい 応募したくない 予定次第で応募したい

15. ゴールドコンサートに応募して、どのような感想を持ちましたか?

ご自由にお聞かせください。

16. あなたが思っていることや考えていることを、ご自由にお聞かせください。

17. あなたについてお聞かせください。

性 別 / 男性 女性

年 齢 / 20歳以下 21～30歳 31～40歳 41～50歳 51～60歳 60歳以上

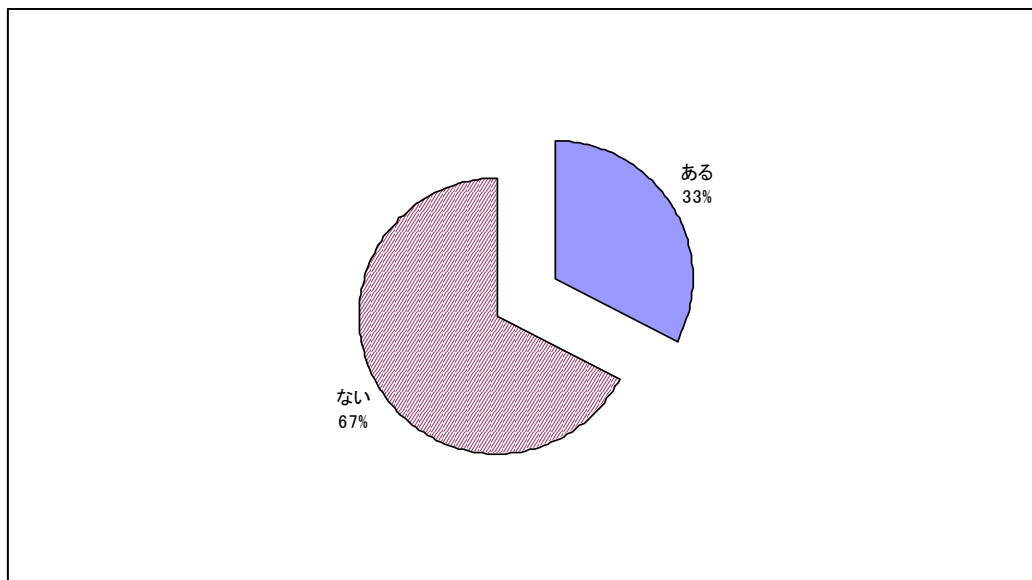
職 業 / 社会人 無職 学生 その他 ()

障がい / 視覚 聴覚 肢体 精神 知的 発達 その他 ()

1-2-1-2. アンケート調査における聴取意見の分析結果

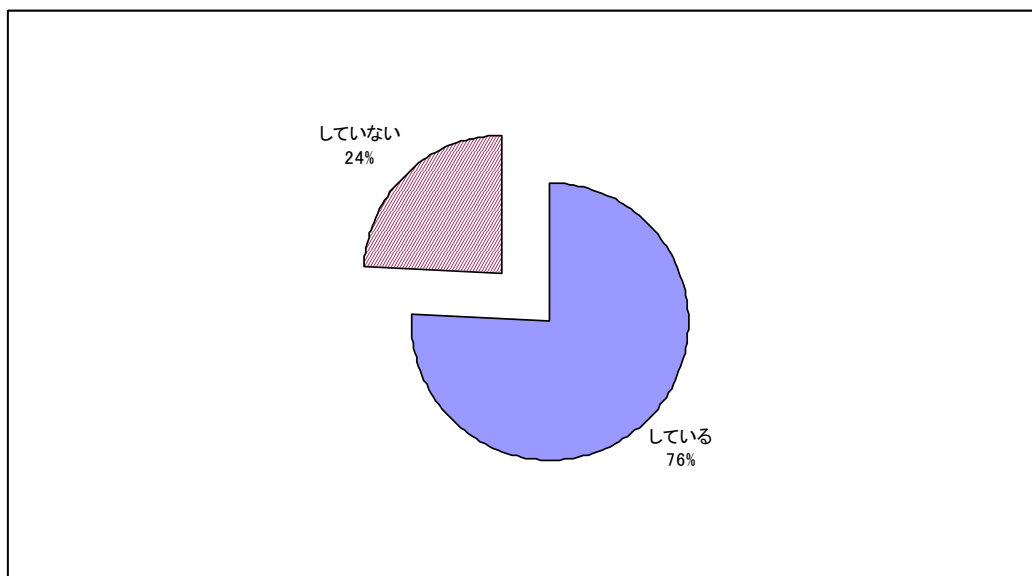
III 応募者アンケート分析 (n=95)

1. ゴールドコンサートに出場したことは、ありますか？ (n=95)



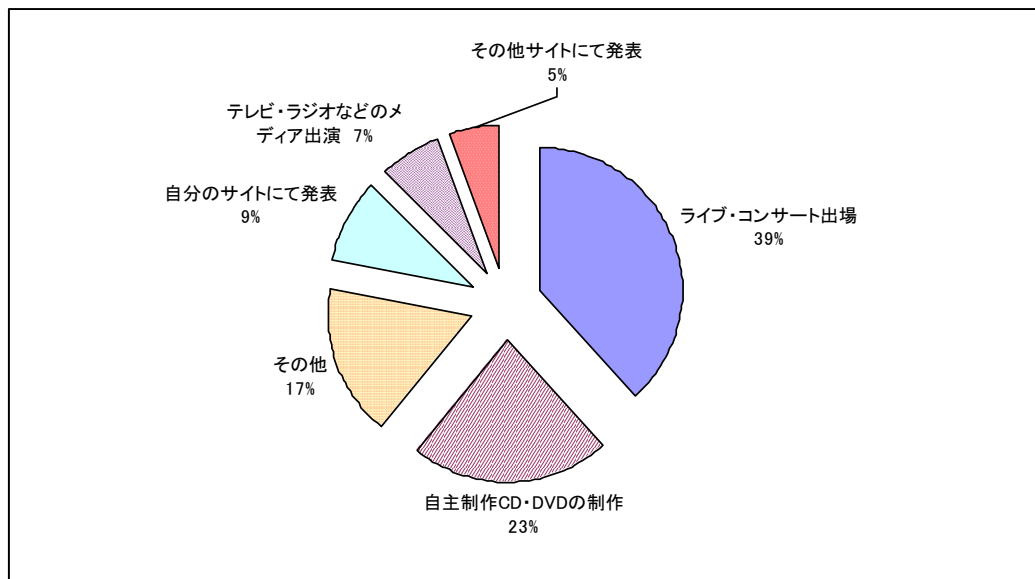
全応募者（400組、重複含む）における出場者（82組、重複含む）の割合は、20%である。これより13ポイント上回っていることから、出場することが、自身の意見を述べたりすることに対する積極性につながっているのではないだろうか。

2. ご自身で、現在音楽活動をしていますか？ (n=95)



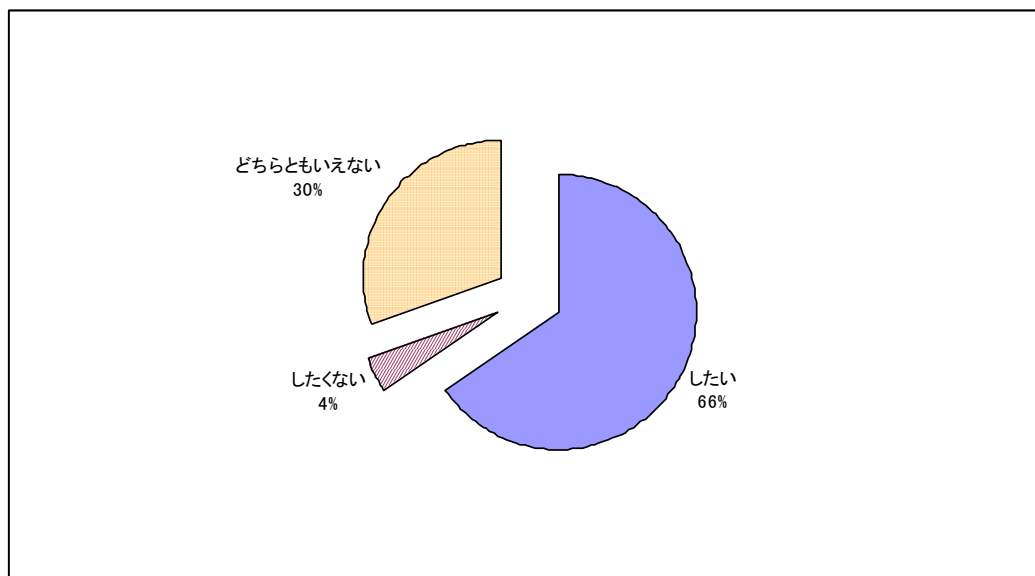
ゴールドコンサート応募に限らず、音楽活動をしている者が多かった。次質問の回答でその他が多かったことから、音楽活動＝演奏活動に限定されていないことが、理由ではないだろうか。

3. 現在音楽活動をしている方に、お伺いします。どのような活動をしていますか？複数可 (n=128)



その他の内容として、講演と音楽を組み合わせている者、音楽教室に所属、もしくは自ら開校するなどの方法によって、後進の教育に携わっている者が多かった。

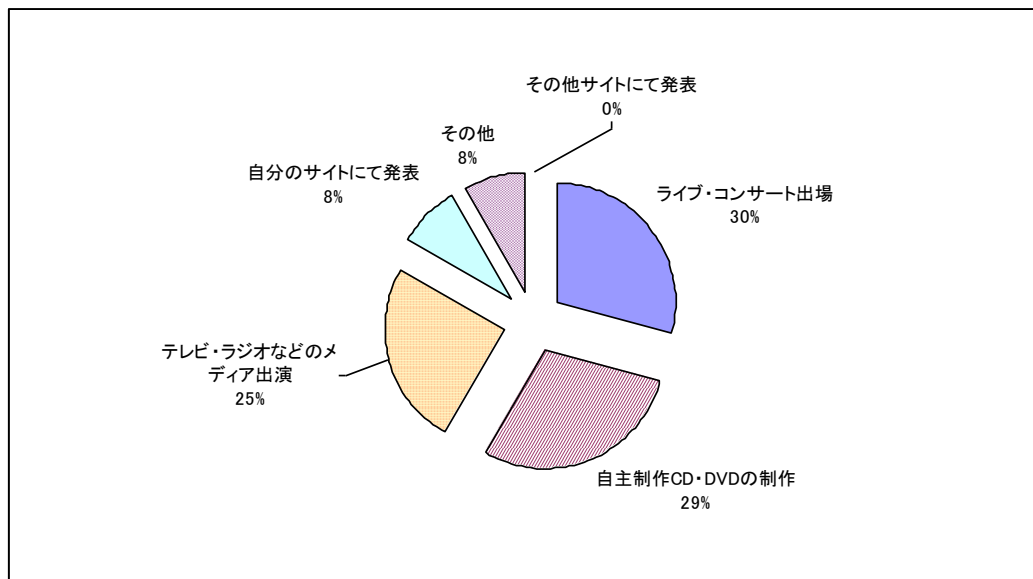
4. 現在音楽活動をしていない方に、お伺いします。今後、音楽活動をしたいと思いませんか (n=23)



注：質問 1 に「現在音楽活動をしていない」と答えた者 24%のうち、「今後、音楽活動をしたと思う」と答えた者が、66%だった。「どちらともいえない」者の中で、

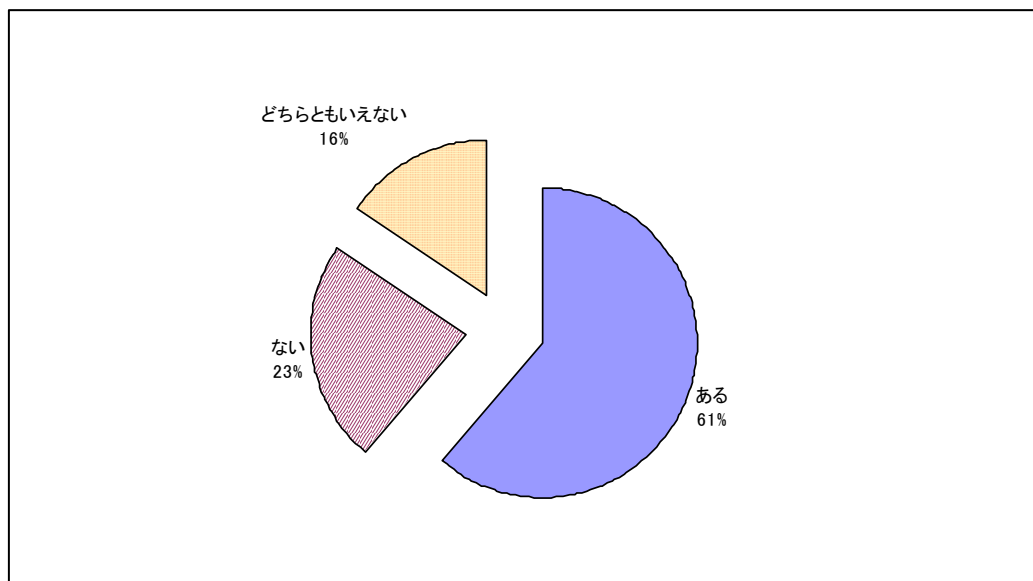
- ・ 機会があれば（やりたい）
 - ・ （次質問の選択肢を挙げ）他の活動は含まれないのか
- などのコメントの加筆が多く見られたことから、将来の音楽活動に対して意欲のある者は 66% 以上であると推測できる。

5. 現在音楽活動をしていない方のうち、今後音楽活動をしたい方に、お伺いします。どのような活動をしたいと思いますか？（複数可）（n=24）



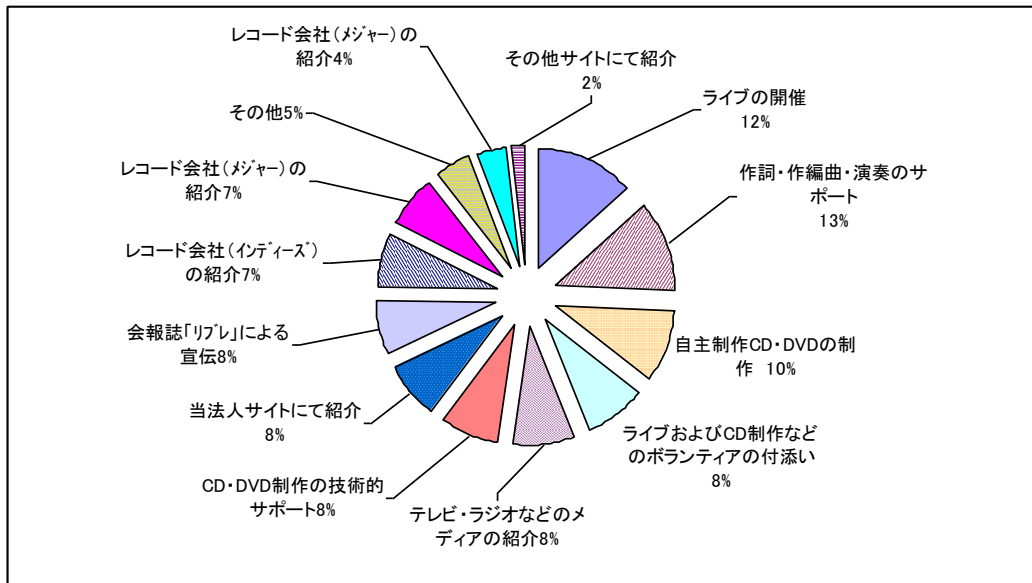
従来型の音楽活動（ライブ、CD・DVD、マスメディア）、ICTを利用した音楽活動（インターネット発表など）のカテゴリ分けをした場合、従来型を望む者が多かった。

6. 音楽活動をする上で、必要な支援はありますか？（n=90）



注：質問2の「現在音楽活動をしている者・していない者」、質問4の「今後音楽活動をした
い者・したくない者」全員に対し、質問した。

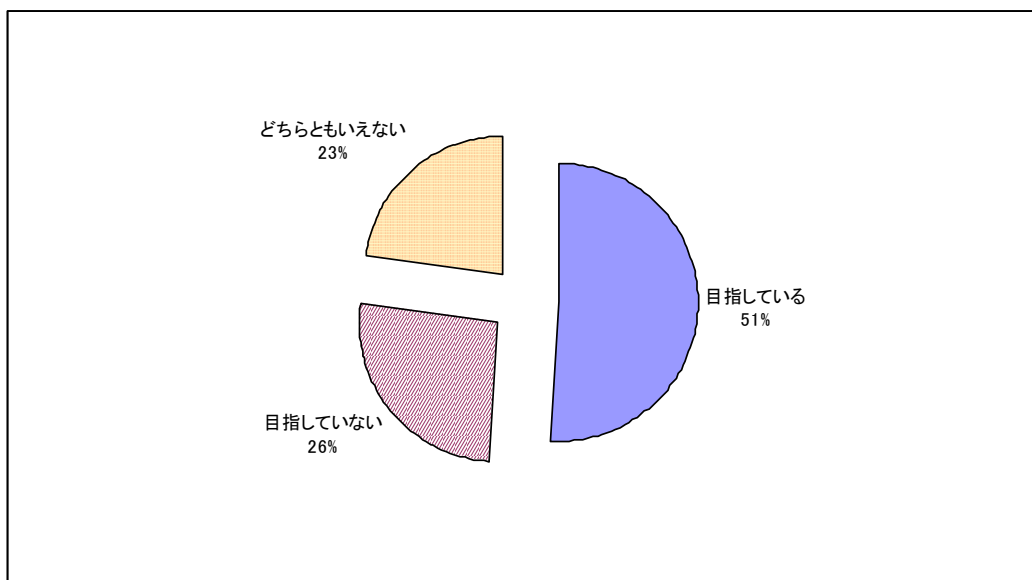
7. 音楽活動をする上で必要な支援がある方に、お伺いします。どのような支援が必要ですか？
(複数可) (n=239)



全項目において、ほぼ同割合の分布となった。

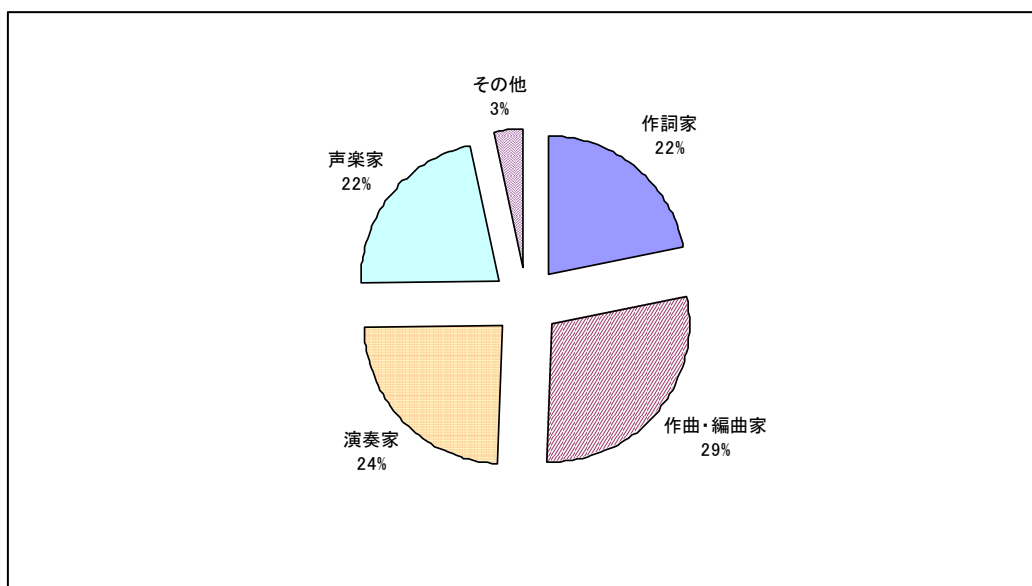
ただし、インターネット、電波、紙媒体を含め、既存メディアを選択する者が多かった。このことから、質問4における音楽活動への意欲も考慮した結果、「音楽活動をしたいが、発表する方法を知らない」音楽家が多いのではないだろうか。

8. プロの音楽家を、目指していますか？ (n=92) ※ここでは、音楽でお金を稼ぐことを意味します。



音楽で収入を得たい者は、51%だった。質問2と比較すると、現在音楽活動をしている者の中で、音楽活動で収入を得たい者は25ポイント少ない。自己表現のひとつであると捉えられているのではないだろうか。

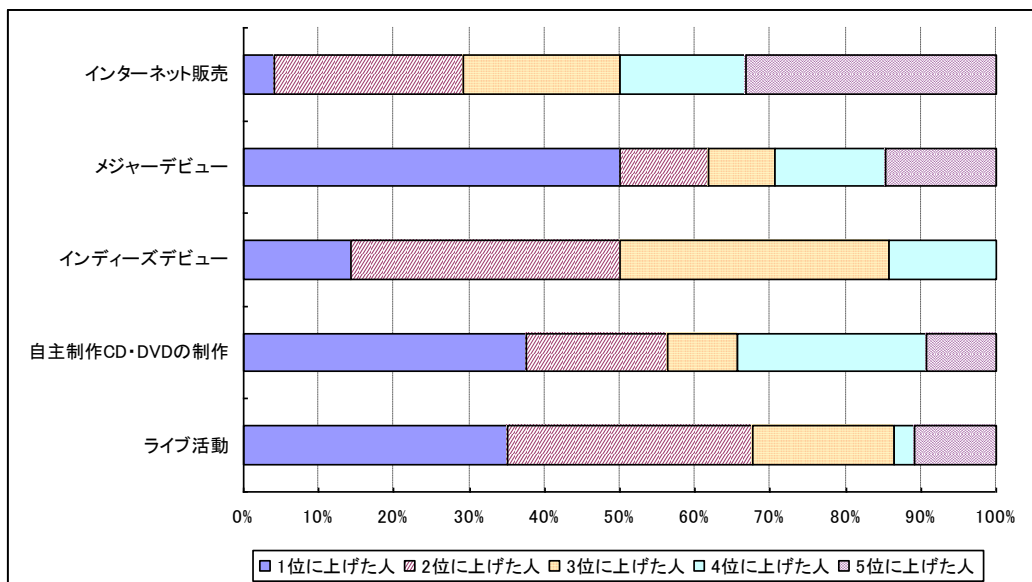
9. プロの音楽家を目指している方に、お伺いします。何を目指していますか？ (n=87)



選択肢を用意した各項目では、ほぼ同割合の分布となった。

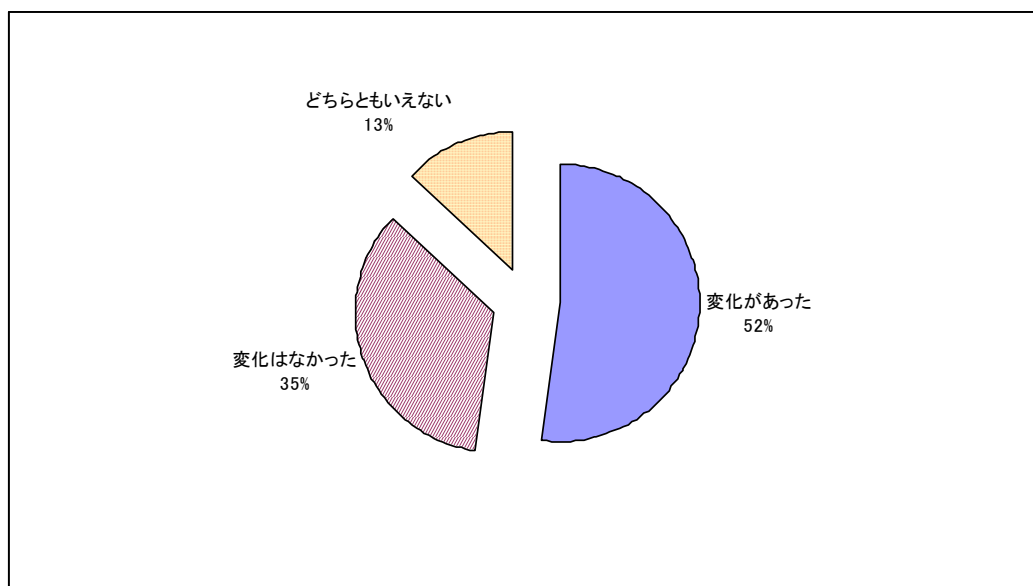
声楽家は、歌手、ヴォーカリストを含む。その他として、音楽講師などが多かった。

10. プロの音楽家を目指している方に、お伺いします。どのようなかたちで、プロになりたいですか？順位を付けてください。 (n=95)



5つの選択肢のうち、上位にカテゴライズされる1~3位に選ばれた“かたち”の割合を見ると、質問3における「現在音楽活動をしている者の、活動内容」と同様に、従来型の音楽活動を望む者が多かった。

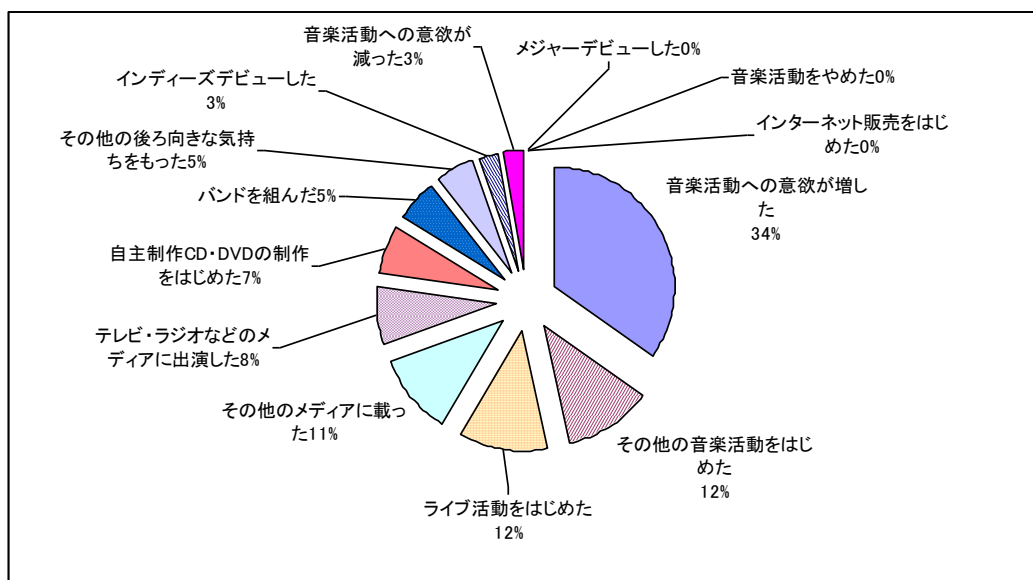
11. ゴールドコンサートへのご応募をきっかけに、変化はありましたか？ (n=92)



注：ゴールドコンサートへの出場、不出場に関わらず、自分の音楽を他人に聞かせる自己選択をとった者が、その選択をきっかけとして、自身の変化に対する意欲を持ち、行動したかを調査した。

「変化があった」と答えた者のうち、次質問において全員が 2 項目以上の複数選択をしたことから、この自己選択が、彼ら自身に何らかの結果をもたらしたと推察できる。

12. 音楽に関して変化があった方に、お伺いします。どのような変化がありましたか？ (複数可) (n=75)



前向きな項目を、

意欲向上：「音楽活動の意欲が増した」

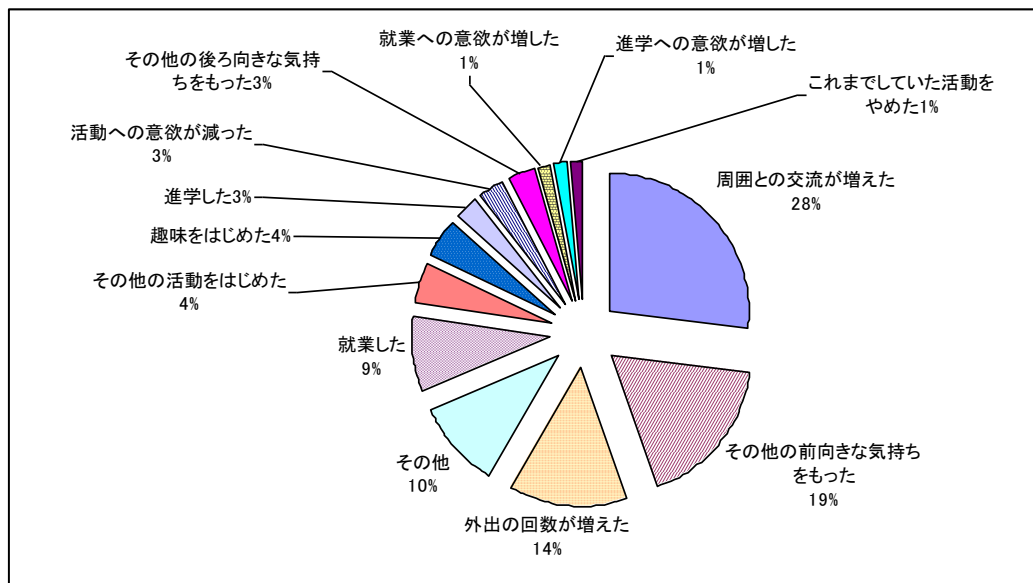
能動的行動：「その他の音楽活動をはじめた」「ライブ活動をはじめた」「自主制作 CD・DVD の制作をはじめた」「バンドを組んだ」

受動的行動：「その他のメディアに載った」「テレビ・ラジオなどのメディアに出演した」「インディーズデビューした」に分類した。（メディア出演は、制作側の意図が優先されると推察し、受動的とした）

意欲向上：34%、能動的行動：36%、受動的行動：22%だった。後ろ向きな結果が8%だった。

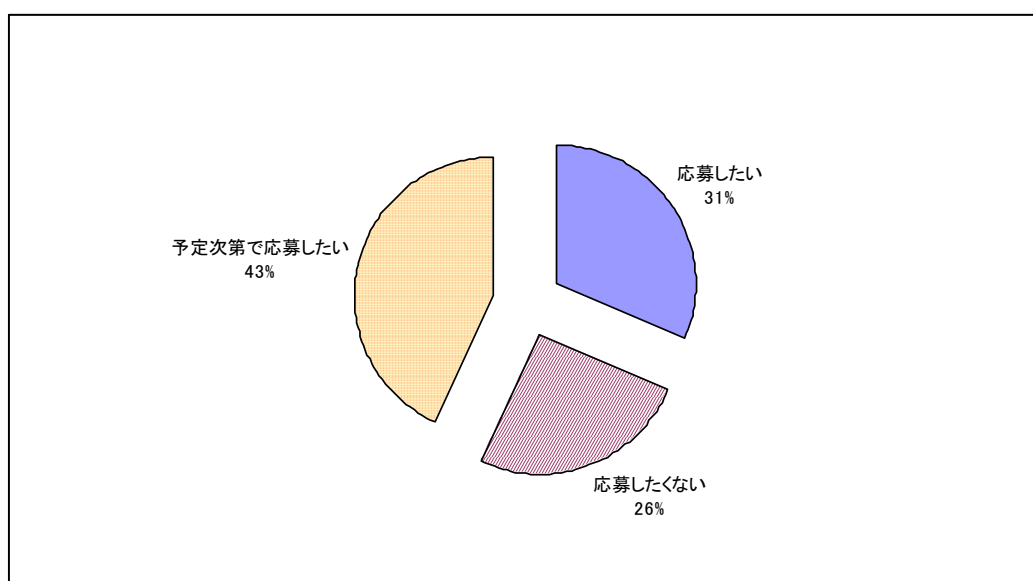
13. 音楽以外に関して変化があった方に、お伺いします。

どのような変化がありましたか？（複数可）（n=67）



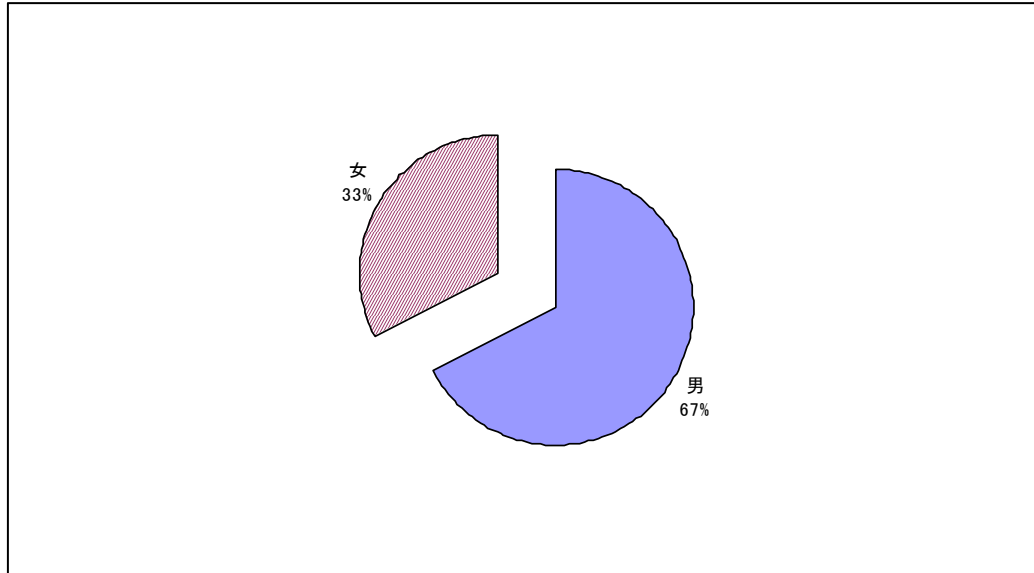
自身の変化に対する意欲を持ち、行動した者が多かった。「周囲との交流」「外出」を“人との出会い”とカテゴライズすれば、人との出会いを実現した者がもっとも多かった。その他と答えた者のほぼ全ての内容が無記入であった。「近隣のバリアフリーのボランティアをした」（1名）「家族の介護をした」（1名）との内容が見られた。総合的に考慮し、前向きな結果がほとんどを占めた。後ろ向きな結果は8%だった。

14. 来年以降も、ゴールドコンサートに応募したいと思いませんか？（n=86）



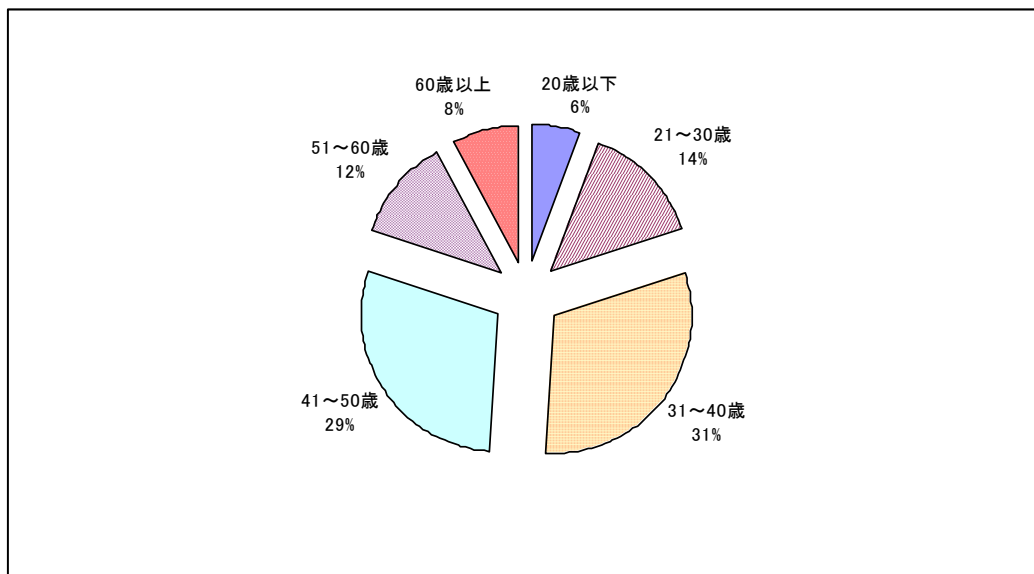
応募に対して意欲をもつ者（「応募したい」「予定次第で応募したい」）は、質問 12、質問 13 において前向きな変化があった者であった。

15. 回答者の性別（n=89）



男性：66%、女性：33%だった。

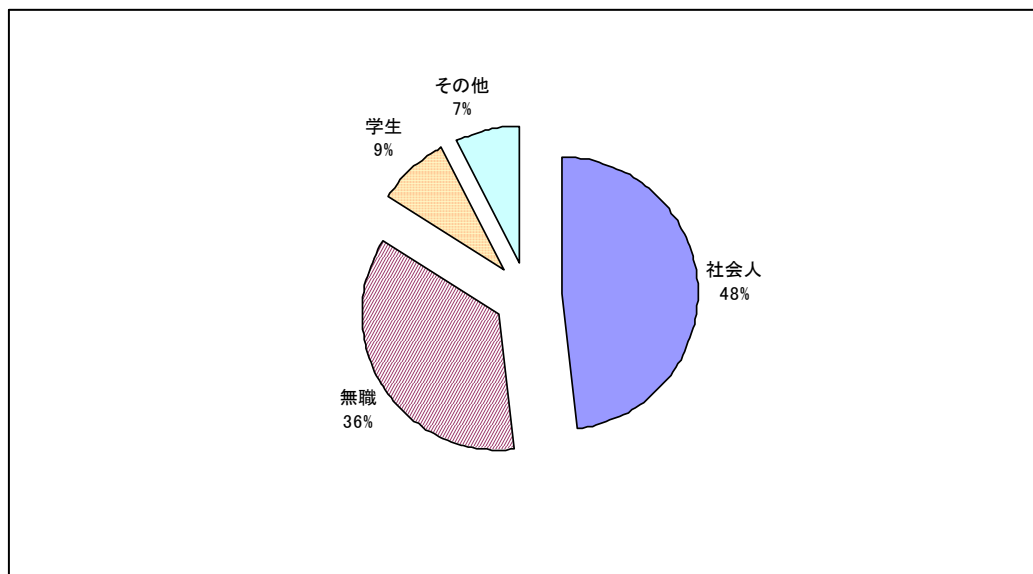
16. 回答者の年齢（n=90）



マスメディアの年齢におけるカテゴライズを適用すれば、

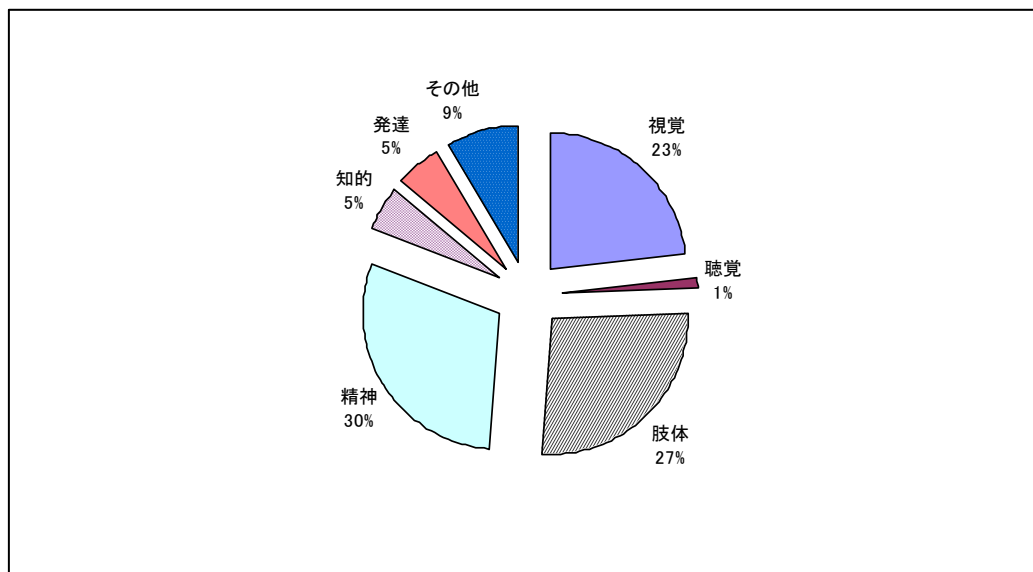
- ・ 1・2層（M、F含む）：45%
 - ・ 3層（M、F含む）：49%
- だった。

17. 回答者の職業 (n=81)



社会人のうち、内容が回答された者が10名。音楽関係が3名、主婦が4名だった。

18. 回答者の障がい種別 (n=94)



選択肢に内部が存在しなかったため、内部障がいをもつ者が、その他を選択した。また、その他には、障がいをもつ音楽家の家族、PTSDが含まれる。

19. 自由記述（抜粋）

1. ゴールドコンサート応援型

- ・ ゴールドコンサートに出場、または賞を取ることが、「その先の音楽活動にプラスになる」と世の中の人に知ってもらえれば、もっと出場者が増えたりレベルアップにつながると思う。本を含め、どうやって世の中の人に「自分を知ってもらえるか」その点で、少しサポートしてほしいと感じる。

2. ゴールドコンサート満足型

- ・ ステージから観客の皆さんに直接、メッセージが伝えられ、その答えがすぐ返ってくる喜びは、大変嬉しいものであった。

3. ゴールドコンサート要望型

- ・ ひとつのバンドごとに、審査員の記名ありで評価されたいと思う。
- ・ 私は、社会復帰の道として音楽でいずれ生計を立てたいとがんばっております。ゴールドコンサートなど、障がい者であっても、今のメジャーの音楽の人々と混ざって活動をしたいと常に願っているし、生計を立てられる手助けをしていただけたらと、強く思っております。
- ・ 音楽について何の知識もなく、楽器演奏も作詞・作曲・編曲など何もできませんが、本当に歌うことが大好きです。音楽についていろいろサポートしてくれる場、歌わせてくれる場を設けて支援してほしいです。新たな自分を伸ばし、発見したいです。

4. 自己変革型

- ・ 幼少から歌うことが好きだったが、何もしてこなかった。なかなか日常生活で精一杯で、ヴォイストレーニングやバンド活動をすることができなかった。これから、少しずつ関わっていき、将来音楽の仕事をしたと思っている。
- ・ 演奏活動を継続して行うことで、病弱だったのが見違えるようになり、強くなり、心も体も大きく成長しています。皆様に感謝！
- ・ 言葉だけより歌や音楽で伝えられることがあると思っています。音楽的には未熟ではあるけれど、歌うこと、演奏することで、自分自身にも、また聞いてくださる人にも障がいへの理解や誤解が少しでも減ってくれば・・・と思います。はっきりと技術差やプロ志向への疑問はありますが、障がい者が表現や発表できる場はひとつでも多いのが良いと思います。
- ・ 応募はしたが、選考に落ちましたので、特に大きな変化や影響はありませんが、地元メディアに多く取り上げられるようになり、ラジオ番組を担当したりと、メディアへの参加を考えるきっかけになりました。
- ・ ラジオ・テレビ・新聞とメディアに参加していくことで、人間関係の輪が広まり新しい世界が見えてきました。今後もインディーズからのCDデビューを個人として行ったり、バンドとしてはすでにレーベルよりCDは頂いているので、さらにがんばりたいと思います。

1-2-2. 音楽家および家族への面接調査の方法

以下の計画をもって、研究を行った。

調査方法	調査担当者による調査対象者の聞き取り
調査対象者	抽出 アンケート調査の回答者のうち、音楽活動に意欲的な者、もしくはゴールドコンサートへの出場者。知的障がいをもっているため、本人からの聞き取りが困難な場合は、二親等以内の家族。
面接調査数	音楽家：13名（うち、4名についてはグループ単位） 音楽家の家族：2名
分析方法	発言内容の趣旨、または類似のキーワードによるカテゴライズ グラウンデッド・セオリー・アプローチを試みる。

1-2-2-1. 面接調査票

III 面接調査に関する承諾書

この度は調査にご協力してくださいまして、まことにありがとうございます。調査をするにあたり、下記についてご確認頂けますと幸いです。

なお、調査内容につきましては、本研究のために利用する以外の目的では同意を得ている場合を除き、一切利用致しません。

記

テーマ： 障がいを持つ音楽家の音楽活動に対する、ICT を利用した支援

目的： 障がいを持つ音楽家の作品を普及させたり、作品の評価を向上させるために、どのような支援がどうあるべきかを提案するために、「彼らがどのような支援を必要としているか」について、聞き取り調査をする。

調査内容： 基本的な事項、自己実現の中身、現在の音楽活動の実態およびニーズ（介助、支援、精神的サポートなど）。なお、調査内容については録音します。

調査場所： 調査協力者の自宅（自宅が不都合の場合、職場または自宅近隣地）

調査時間： 1 時間から 1 時間半

枠組み： 厚生労働省主管の障害者保健福祉推進事業における、研究活動
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoken/other/jiritsu03.html>

調査主体： 貝谷 嘉洋（NPO 法人日本バリアフリー協会 代表理事）

その他：
・ 在宅調査でお話いただいた事実に研究者が分析を加え、報告書を作成します。
・ 氏名・住所・連絡などの個人情報には触れませんが、属性（障がいの種類、居住の地方名、演奏楽器など）を記載しますので、個人が特定される可能性がございます。

プライバシー保護：

調査内容につきましては、1 台のみのパソコンにパスワードを設定して保存し、記憶媒体に 1 回のみバックアップをとります。居住地につきましては、公表する際に都道府県名（または政令指定都市）のみの表示を致します。

以上を含め、プライバシー保護には十分に注意を払います。

以上

以上を確認し、調査に協力することを了承致します。

平成 年 月 日

お名前 _____ (印)

III 面接調査に関する質問ガイド

平成 年 月 日

1. 聞き取り調査について

インタビューの場所	
インタビューの時間	月 日 () : ~ : (時間 分)
調査担当者	
天候	

2. 基本的な質問事項

氏名		性別	生年月日	年齢
		男 ・ 女	年 月 日	歳
住所	〒			
音楽教育	音楽に関する専門教育を 受けた ・ 受けていない 学校名 :			
最終学歴	中卒・高卒・大卒・院修 (修・博) 学校名 :			
職業	社会人 (仕事名 :) ・ 無職 ・ 学生 ※注 : 主婦は、社会人			

障がい	視覚・聴覚・肢体・精神・知的・発達・その他
障がいの状況	
介助	あり (内容 :) ・ なし
生活形態	一人暮らし・家族と同居・友人と同居・その他 ()
同居家族	あり (家族 :) ・ なし

現在の音楽活動について

CDは発売していますか?	メジャー ・ インディーズ ・ 自主制作 CD
ライブの頻度を教えてください。	10回/月・1回程度/週・1回程度/月・数回程度/年
※有償・無償は問いません。	メモ
その他	ご自由に

3. 質問事項ガイド（順不同で結構です）

【過去】

- ・ 音楽活動を始めた時期
- ・ 音楽活動を始めたきっかけ
- ・ その頃起きた人生のできごと（就学・就職・結婚・出産など）
- ・ 音楽を人に聞かせるようになった時期
- ・ 音楽を人に聞かせるようになったきっかけ
- ・ その頃起きた人生のできごと（就学・就職・結婚・出産など）
- ・ 音楽活動で、障がいによってニーズが生まれたこと
- ・ 生まれたニーズを自分で満たすための取組み
- ・ 生まれたニーズを満たすために必要だった支援など
- ・ 音楽活動をする上で、障がいに対する社会的な見方のために、不利を感じることはありましたか？

【現在】

- ・ 現在、どのような音楽活動をしていますか？
- ・ （音楽活動をやめた方に）音楽活動をやめた理由を、教えてください。
- ・ 音楽活動は、していますか？
- ・ ひと月の頻度は？
- ・ 音楽活動で、障がいによってニーズが生まれたこと
- ・ 生まれたニーズを自分で満たすための取組み
- ・ 生まれたニーズを満たすために必要な支援など
- ・ 音楽活動をする上で、障がいに対する社会的な見方のために、不利を感じることはありますか？

【未来】

- ・ 将来、どのようになりたいですか？
- ・ それを実現するために、足りない、不満と感じていることは何ですか？
- ・ それを実現するために、どのような支援があると良いと思いますか？
- ・ ニーズを満たすために、そのようなサービスが存在すればよいと思いますか？

インタビュー調査にてお話しいただいた内容で、公表したくないことはありますか？

1-2-2-2. 音楽家への面接調査

チャレンジド（障がい者）・ミュージシャンが望む音楽支援

ケース 1、2 視覚障がいを持つグループからの聞き取り調査の分析

1. インタビューの状況

インタビューの日時	2009年10月25日17:00~19:00(2時間00分)
調査担当者	貝谷 嘉洋、村上 律子
天候	曇り

2. 調査対象者の基本的事項（ケース 1）

対象者	50歳代男性、京都府在住
職業	社会人
障がい	視覚（ほぼ全盲）
介助	ガイドのみ

調査対象者の基本的事項（ケース 2）

対象者	40歳代男性、京都府在住
職業	社会人
障がい	視覚（ほぼ全盲）
介助	ガイドのみ

3. 現在の音楽活動について

- ・ CD（メジャー、インディーズ、自主制作）は、発売していない。
- ・ ライブの頻度は、不明。
- ・ 1回/週 程度で、練習をしている。
- ・ 演奏楽器は、両者ともギター。
- ・ ゴールドコンサートの出場者である。

4. 過去の経緯および現在の活動

- ・ 盲学校高等部で当時ギター人口が多く、在学中に教わった。(2)
- ・ 東京方面での音楽活動は考えていない。実際に、横浜に知り合いのライブハウスがあるが、日程的に難しい。(1)
- ・ 新曲を作るのに時間がかかる。某コンサートへの応募曲も、気持ち的には未完成であった。ケース 2 の妻の提案で、とりあえず応募した。(1)

- ・ 仕事が忙しく、体力的なこともあり思うように曲作りができていない。(1)

1. 自己実現、将来の夢

- ・ 月に何度もライブをするような動きができれば、もっと何かが出てくるのではないかと考えている。ただ、マネジメントが必要であり難しい。(2)
- ・ ライブ活動など都合がつけば演奏したいが、新しい曲を増やすのも大変。(1)
- ・ (満足のいく曲作りができないので) 来年は、ゴールドコンサートへの応募を見合わせようかと思っている。(1)

2. ICT を利用した支援についての考察

当ケースでは、ICT による支援は望まれていないようである。彼らの意見として、音楽活動＝ライブ、コンサートでの演奏である。聴衆と直接的につながりたい、アピールしたいという気持ちが強かった。特に彼らは、フォークソングに影響を受けた年代であることから、路上ライブやコンサート会場での大掛かりな音楽イベントへの憧れがあるのではないだろうか。

彼らから、C-MUSIC プロジェクト¹について以前から知っていたが、コンサートと当プロジェクトがどのようにつながっているのか知りたい、との意見が聞かれた。最初のアプローチとして、ICT に関する各年代に合わせた周知方法を構築する必要がある。

以上

ケース 3、4、視覚障がいを持つグループからの聞き取り調査の分析

1. インタビューの状況

インタビューの日時	2009年11月16日/14:00~16:00 (2時間00分)
調査担当者	貝谷 嘉洋、寺谷 あかね
天候	くもり

2. 調査対象者の基本的事項 (ケース 3)

対象者	30歳代男性、群馬県在住
職業	社会人
障がい	視覚 (ほぼ全盲)
介助	ガイドのみ

調査対象者の基本的事項 (ケース 4)

対象者	10歳代女性、群馬県在住
職業	学生
障がい	視覚 (ほぼ全盲)

¹ 当法人が主催、運営しているインターネット上での音楽紹介サイト。http://www.npojba.org/cmusic/musician

3. 現在の音楽活動について

- ・ CD（自主制作）を、発売している。
- ・ ライブの頻度は、年に 10 回程度（ギャランティあり）。
- ・ 演奏楽器は、ケース 3：アコースティックギター、作詞・作曲、ヴォーカル
ケース 4：Q コード（ギター型シンセサイザー）、ヴォーカル
- ・ ゴールドコンサートの出場者である。

4. 過去の経緯及び現在の活動

- ・ 音楽活動は学生の頃から。いろいろなところに出向いて活動するようになったのは社会人になってから。(3)
- ・ 自宅でレコーディングをしている。(4)
- ・ 作詞・作曲するとき、難しい言葉にしないようにしている。子供に聴かせてわかってもらえるような。メロディーもキャッチーなものにしている。(3)
- ・ ライブ活動は、全てロコミ。そのほうが確実に呼んでもらえると思う。きちんと聴いた人から伝えてもらうほうが良い広がりがある。(4)
- ・ 福祉教育の一環として呼ばれることが多いので、普通学校に行くことが多い。(3)
- ・ 現在は MIDI ソフトを使っており、メモ帳にコードネームや音階を書き、曲を作成して、ソフト本体を使って演奏させることをしている。(4)
- ・ 自分で作った曲を携帯電話に入れて、アラーム音や着信音にしている。(4)
- ・ (筆者注：3さんと) いろいろな年代の人のところへ歌いに行くことで、聴くほうも歌うほうも、曲のレパートリーが増えた。(4)
- ・ (筆者注：ライブ活動で) 通常のホールだとステージに立つとセンターの位置がわからないので、お客さんの声が聞こえる位置でセンターを判断している。(4)

5. 自己実現、将来の夢

- ・ 技術的な面では、プロを目指している。(3)
- ・ 音楽で生計を立てていこうとすると弊害がある。今は商業音楽の時代。やるとしても、細々やっていきたい。レコード会社に入るとしても、選びたいと思う。(3)
- ・ 活動の場はもっとあるといい。自分の歌はだいたいメッセージソングなので、中高生に聴いてもらいたい。ボランティアでも構わない。ギャラにこだわらない。(3)
- ・ 最近アコーディオンの音色が好きで、やってみたいと思っている。(4)
- ・ 3さんのように作曲・レコーディングをして配布したい。作詞より作曲がいい。(4)
- ・ 将来は音楽関係の仕事をしたい。歌えるし、曲も作れるような。ネットラジオのパーソナリティとして音楽の番組を作れたら、とも思う。メジャーデビューもしたいというものもあるし、番組を作れるとしたら、マイナーからメジャーまで幅広い音楽を採りあげるようにしたい。(4)

- ・ しかし、先がどうなるかわからないこともあり、按摩マッサージの資格をとろうかと考えている。(4)
- ・ ミュージシャンと会う機会が(筆者注:GC以外に)あれば嬉しい。(4)
- ・ 自分も楽しめて、聴いてくれる人も楽しめるような音楽ができればいい。(4)
- ・ (筆者注:ライブ活動で)盲学校のような、ステージ上に点字ブロックがあったり、フロアのタコ糸やビニールテープの線で、床より浮き出立たせたりしてあると良いと思う。(4)

6. そのために必要な支援、ニーズ

- ・ ちまたの音楽教室などで、初めて見る楽譜で演奏する試験がある。そのとき、視覚障がい者は不利である。配慮をしてくれれば全国的にも同じような評価をされる。そうなれば音楽活動にも良いのでは。(3)
- ・ 録音機材にピープ音や音声ガイドを付けるなどしてもらえると嬉しい。(3)
- ・ 会場まで送迎をお願いすることが多い。公共の交通機関が、網の目のようになったらよいと思う。田舎は、電車やバスなど公共交通機関が少ない。(3)
- ・ 自宅でレコーディングする際、マイクのレベルのバランスなど操作するのに使いやすい機材があればいいと思う。(4)
- ・ (具体的キャリア名を挙げて)着メロ作成アプリみたいなのができるといい。(4)
- ・ テレビやラジオやネット放送はいいが、入れてほしいのは状況についての解説。(4)

7. ICT を利用した支援についての考察

当ケースに望まれる ICT による支援は、両者に共通して、

- ・ 実力をアピールするための手段(試験など)における、音声読み上げ
 - ・ ユニバーサルデザインに対応した、音楽制作の機材
 - ・ 発表場所への移動の際の、案内板などにおける音声読み上げ
 - ・ テレビやラジオやネット放送における、状況についての解説(音声)
- である。

4さんは普段、聴覚に負担のない生活を心がけている。なぜなら、「疲れるから」(本人談)である。これらの発言から推測することは、彼らにとって聴覚は重要な情報源であるため、ウェブアクセシビリティのようなツールをイメージすると良いのではないだろうか。

以上

ケース 5、視覚障がいを持つミュージシャンからの聞き取り調査の分析

1. インタビューの状況

インタビューの時間	2009年11月16日/16:00~17:30(1時間30分)
調査担当者	宮腰 恵理子、土屋 直子
天候	晴れ

2. 調査対象者の基本的事項

対象者	20歳代男性、静岡県在住
職業	社会人(音楽家)
障がい	視覚 (ほぼ全盲)
介助	ガイドのみ

3. 現在の音楽活動について

- ・ CD (メジャー、インディーズ、自主制作) は、発売していない。
- ・ ライブの頻度は、月に1回程度。
- ・ 演奏楽器は、和太鼓。
- ・ ゴールドコンサートの出場者である。

4. 過去の経緯及び現在の活動

- ・ ライブ・コンサートに出場している。(1回/月程度)
- ・ 自主制作 CD・DVD 制作に、取り組んでいる。(初めて)
- ・ テレビ・ラジオなどのメディア出演をしている。(頻度不明)
- ・ 海外への演奏旅行を行った。(初めて、3日間)

1. 自己実現、将来の夢

- ・ 現在プロの音楽家として活動している。将来の夢は「世界で通用する音楽家」。
- ・ 今後、優先順位：1.ライブ活動、2.メジャーデビュー、3. 自主制作 CD・DVD 制作を望む。
- ・ 海外に留学したい。現在、奨学金を申請している。

2. そのために必要な支援、ニーズ

- ・ 思い当たるところでは、特にない。
- ・ 現在、音楽支援として「楽器の運搬」のサポートを受けている。障がい者だからといって、不利に感じたことはない。＝必要な支援はない。
- ・ 障がい者だからといって、音楽活動に不利を感じたことはない。
- ・ (具体的なエピソードを挙げて) ミュージシャン同士の出会い、音楽のセッションによって、ミュージシャンとしても人間としても成長すると思う。
- ・ (具体的なエピソードを挙げて) 海外の演奏旅行で、人との出会いやミュージシャンが育つ街という環境が大切だと知った。＝だから、留学しようと思った。
- ・ 海外体験をする際など、普通は、困らないように気をつけるが、本当は困る方が良いと思う。その困ったことを解決したり、誰かからヘルプを受けたりした方が、次の活動や自分の成長につながるのではないだろうか。

3. ICT を利用した支援についての考察

メジャーデビューへむけてのレコード会社紹介を前提にするならば、ICT を利用した支援と

して、プロモーションを視野に入れた、

- ・インターネットラジオ・テレビによる音楽番組開設
- ・または既存のサイトへの紹介
- ・彼が自分でそれを行うための、技術的サポート
- ・インターネットを利用した、音楽活動のパブリシティ

などがイメージできる。しかし、広範囲に行きわたるメディアへの出演については、本人から懸念も聞かれている。3「現在の活動（一部過去の経緯含む）」に記載したテレビ出演に際して、自分たちが視聴者に伝えたいこと、取材クルーが取材したいこと、製作スタッフが放映したいことなどの食い違いがあったことを述べた。不満ではないながらも、メディア出演の難しさを実感したと述べた。

したがって、以上4点を実行するのであれば、その際は、

- ① 音楽番組であれば、彼の伝えたいことに忠実にする
 - ② パブリシティであれば、事実のみのお知らせにする
- などの配慮が必要なのではないだろうか。

ケース 6、肢体障がいを持つミュージシャンからの聞き取り調査の分析

1. インタビューの状況

インタビューの時間	2010年2月6日／10：00～11：30（1時間30分）
調査担当者	貝谷 嘉洋、布村 沙那子
天候	晴れ

2. 調査対象者の基本的事項

対象者	40歳代男性、宮崎県在住
職業	社会人
障がい	肢体
介助	あり（内容：生活全般）

3. 現在の音楽活動について

- ・ CD（自主制作）を、発売している。
- ・ ライブの頻度は、年に2～3回程度。
- ・ 演奏楽器は、パソコン（DTM）。
- ・ ゴールドコンサート（以下、GC）の出演者である。

4. 過去の経緯および現在の活動

- ・ 音楽活動と併行して小説を執筆し、著書が2冊ある。
- ・ 音楽活動を併行して絵を描き、個展の開催経験がある。
- ・ ライブのほとんどは、招待。

- ・トラック運転手に向けて、ストリートライブをした。
- ・25歳で、初めて音楽を発表した。大分の病院の夏祭りで披露した。病院内に音楽をするための部屋が準備されていたので、その部屋で音楽活動をやっていた。
- ・27歳で、初めてライブハウスを貸切り、演奏した。
- ・35歳まで音楽活動を中心にやっていた。
- ・現在は、小説を執筆しながら、曲ができたときに、コンテストに出している。

5. 自己実現、将来の夢

- ・自分の中の比重として、執筆が8割、音楽が2割。
- ・なぜ、執筆に比重を置きたいかという、音楽は一人でできないが、文学は一人でできるから。
- ・音楽活動として、セカンドCDを出したい。
- ・音楽は、気持ちの高揚、感動を表現するためのひとつの手段。曲ができれば人に聞いてもらいたいと思うが、「何が何でも音楽で」ということではない。
- ・今後音楽活動をするのであれば、プロデューサーがやりたい。歌う人は、上手な人であれば、健常者でも障がい者でも良い。

6. そのために必要な支援、ニーズ

- ・（障がい理由で）生演奏ができないから、編曲するとき不利だと思う。
- ・（障がい理由で）自分に声量がないから、ヴォーカルとして不利だと思う。（だけど、音響の技術によって、不利を解消して、上手に聴かせてくれる）
- ・移動手段にかかる金銭的問題が、音楽活動するのに不利だと思う。安い福祉タクシーがほしい。
- ・福祉サービスは、利用者（筆者注：被介助者）が介助者を育てるのだと思う。
- ・音楽活動をするときに、「障がいがあるから、かわいそう」と思われるようでは、ダメだと思う。クオリティが大切。
- ・自分が録音した曲（メロディーを歌って、テープに録る方法をとっている）をパソコンに取り込んで、CD制作やHP制作をやってくれる人がほしい。
- ・現在、曲を自分で作っているが、時間がかかる。（1曲に1週間）
- ・パソコンへの取り込みなどの支援をしてくれる人をSNSで募集しているが、バンドマンが集まらない。
- ・英語の歌詞を書くのが難しいので、英語の歌詞を書いてくれる人がほしい。
- ・バンドメンバー（ヴォーカル、ギター、ベース）がほしい。キーボード、作詞、作曲、編曲はパソコンを使って自分でできる。
- ・施設に住んでいると、時間などの制約があり音楽活動に不利なので、一人暮らしをしたいと思い、準備をしている。
- ・一人暮らしのために、行政からの支援（24時間ヘルパーサービスなど）がほしい。

7. ICTを利用した支援についての考察

当ケースにおいては、5「そのために必要な支援、ニーズ」の通り、パソコンを使用した支援が望まれている。しかし、パソコンにとどまらず、ICT の範疇で、様々な支援機器の提供（譲渡や貸出など）にも可能性がある。具体的には、

- ・生活全般を介助する機器（たとえば、自分で操作できる介助機器）
- ・身体動作を支援する機器（たとえば、物の持ち上げ動作を支援するハードウェア）
- ・音楽活動を支援する機器（たとえば、ギターを演奏するハードウェア）

などである。

これらが実現すれば、メンバーが見つからないことが原因で音楽活動を減らすことがない。また、音楽活動をするために、時間的制約のない一人暮らしをすることが可能となるのではないだろうか。

以上

ケース 7、その他障がいを持つミュージシャンからの聞き取り調査の分析

1. インタビューの状況

インタビューの時間	2010年2月7日／11：00～12：20（1時間20分）
調査担当者	貝谷 嘉洋、布村 沙那子
天候	晴れ

2. 調査対象者の基本的事項

対象者	30歳代男性、熊本県在住
職業	社会人（自営業）
障がい	その他（IDDM）
介助	必要なし

3. 現在の音楽活動について

- ・ CD（インディーズ）を、発売している。
- ・ ライブの頻度は、月に1回程度。
- ・ 演奏楽器は、作編曲、三味線。
- ・ ゴールドコンサート（以下、GC）の出場者である。

4. 過去の経緯および現在の活動

- ・ ピアノは小2～小5までやっていた。
- ・ ファミコンサウンドの耳コピーが得意で、中1とのかきに学校で披露した。男子の鍵盤弾きが、めずらしかった。
- ・ 中1のとき、人の伴奏をしていた。
- ・ コンクールで弾くのが、イヤだったが、男子が弾くとかっこいいのもあり、中学では、サークルみたいな形で、作曲をしていた。

- ・ 高 1 で、当時音楽プロデューサーだった著名人にあこがれて、ヤマハのシンセサイザー EOS B700 を買ってもらった。シンセサイザーでの音楽制作を通して、MIDI に関する知識を身につけた。ここで身につけた MIDI の知識が、今の音楽活動に役立っている。
- ・ 周りにはだいたいギターをやっていた。
- ・ 20 歳で、ビジュアル系をやっていた。違うと感じて、ポップに転向した。
- ・ 2 年前、メジャーレーベルのオーディションに受かり、インディーズデビューした。テレビ出演などもしていたが、辞めた。
- ・ 自営（編曲、インディーズレーベル運営）で生計を立てるべく、努力している。
- ・ インターネットにおける最新のコミュニケーションサイトで、仕事を得ている。（面接調査当時、4 件／月程度）
- ・ CD は、ライブで手売りしている。
- ・ ライブの様子を、インターネットで生放送している。
- ・ その他、音楽関連で、ブライダル・プランナーの仕事をしている。
- ・ 自分たちの音楽活動のスタンスとして、体がキツかったり、精神的にキツかったりするのを支える。

5. 自己実現、将来の夢

- ・ ダウンロードは顔が見えず、長く続かない。ライブなど、顔が見えるものは続く。
- ・ 音楽活動に、インターネットを使う方法として、具体的なアイデアを持っている。
- ・ インターネットは、セルフプロデュースをしたり、人脈をつかむために、良い方法だと思う。
- ・ 県内で、コンテンツビジネスをやりたい。たとえば写真家 1 人、デザイン 1 人など、業者ではない人たちと組んで、プロデューサー的な仕事をしたい。
- ・ インターネットで調べて、片っ端から気になる人にアプローチしている。
- ・ 将来的には、同じ病気の人をサポートしたい。その人と、コラボレートしたりしたい。現在、仕事として 60 歳代の人をサポートをした。具体的には、その人の鼻歌を録音し、曲に仕上げた。今では振り付けまで付いた。（筆者注：振り付けした人は、不明。）そういう活動がしたいと思う。
- ・ ゴールドコンサートの出演者に、コラボレートしたい音楽家がいる。
- ・ 熊本を第 2 の大阪みたいにしたい。「東京で活動しなくてもいい」と思う。今は、スカイプやインターネットを使って仕事ができるので、地方でも不自由を感じない。
- ・ 障がい、病気などに対する知識の啓蒙をしたい。そのことによって、同じ病気をもっている人たちへの周囲の理解を得たい。

6. そのために必要な支援、ニーズ

- ・ 昨年、障がいを持っていることをカミングアウトした。自分として、障がいを受け入れた瞬間。
- ・ 音楽活動に対しては、あまりニーズを感じないが、病気に対する周知が必要。
- ・ 演奏中に発作が起きたりするので、そういうことに対する周囲の理解が必要。

- ・ 自営業の前は会社勤めをしていたが、自己治療に対して「目に付かないように」と言われたことがあり、不便を感じた。

7. ICT を利用した支援についての考察

当ケースにおいては、インターネットの役割は、「顔が見えるもの（本人談）」を補完するものである。ICT に関する知識は、面接調査を実施したチャレンジド（障がい者）・ミュージシャンの中でもっとも深く、音楽活動における利用も、幅広い。具体的には 4「自己実現、将来の夢」の通り、セルフプロデュースをしたり、人脈をつかむためのものであり、実際に、インターネット上にて仕事を得ている。音楽活動だけでなく、音楽制作にもパソコンを利用していることから、当ケースにおける ICT の重要性は、非常に高いと推察できる。

音楽ビジネスに関するアイデアの中においても、地元を軸を置いた上で、宣伝などによって広く知ってもらおうという趣旨であった。

可能性のある支援として、

- ① 当法人サイトにおける紹介（アンケートにおける質問 No.7）
- ② その他サイトへの紹介（アンケートにおける質問 No.7）

が、挙げられる。

「スカイプやインターネットを使って仕事ができる」という彼自身の発言の通り、当ケースにおける ICT とは、障がいによる不利をカバーするというよりも、地理的な不利をカバーするものである。したがって、この視点を持って支援をすることが、適切と考えられる。

以上

ケース 8、肢体障がいを持つミュージシャンからの聞き取り調査の分析

1. インタビューの状況

インタビューの時間	2010年2月5日／17:00～18:20（1時間20分）
調査担当者	貝谷 嘉洋、布村 沙那子
天候	晴れ

2. 調査対象者の基本的事項

対象者	20歳代女性、宮崎県在住
職業	社会人
障がい	肢体
介助	なし（内容：手動の車椅子を、自分で動かしている）

3. 現在の音楽活動について

- ・ CD（自主制作）を、発売している。
- ・ ライブの頻度は、月に 2～3 回程度。
- ・ 演奏楽器は、ヴォーカル。

- ・ ゴールドコンサート（以下、GC）の出場者である。

4. 過去の経緯および現在の活動

- ・ 20歳の頃、お芝居で女優になりたかった。
- ・ 周囲の協力もあり演劇を始め、車椅子でも可能なトイレ等に配慮された場所で、練習をしていた。
- ・ 女優のオーディションで、「車いすの場合、何かあると困る、責任が取れない」と言われた。障がい判断されたことに、納得がいかない気持ちを持った。
- ・ その後、“障がい者”のキーワード検索（インターネット）をしていたら、ゴールドコンサートがヒットした。
- ・ ゴールドコンサート応募をきっかけに、音楽を始めた。動機は、「ゴールドコンサートに出たら、お芝居の仕事が来るかも知れない」という気持ち。
- ・ ゴールドコンサート出場をきっかけに、県内での需要が多くなり、県内だけのテレビ番組に出演するなど、活動の幅が広がっている。
- ・ 月に2〜3回ショットバーで歌い、DJ活動をしている。
- ・ 日常生活や音楽活動について、新聞のコラムを書いている。
- ・ ラジオでパーソナリティをしている。
- ・ 音楽活動で得る収入は、2〜3万円／月。
- ・ 日本作曲家協会から、奨励賞を受賞した。
- ・ 主な収入源として、テレアポの仕事をしている。（発声の練習になるので）
- ・ インターネット上での活動として、SNSにてゴールドコンサートの出場者とやり取りをしている。
- ・ 趣味で、トールペイントをしている。

5. 自己実現、将来の夢

- ・ 韓国でストリートライブをしてみたい。
- ・ 現在ソロでやっているのでも、他のバンドとセッションやコラボレートしてみたい。
- ・ 東京でも活動したいが、地元密着のメリットとして、自分に対する需要がある。（筆者注：本音は、東京に出てきて活動したい）
- ・ 県内ではコアなファンが多いので、もっと広い範囲で活動したい。
- ・ 観客から「障がい者が歌っている」という意識で見られ、「人を癒しているつもりでも、自分は癒されない」と言われたことがあった。その体験を乗り越えて、障がいをもつことと音楽活動をすることに対する意識が変わった。
- ・ 今後の音楽活動として、お涙ちょうだいは嫌だが、障がいを武器にしていきたい。
- ・ 音楽では、観客が感動して涙を流す曲を作りたい。
- ・ 全国ネットの年末の音楽番組に出るために、インディーズで2万枚売りたい。
- ・ ホームページを作成し、インターネット上の活動をしたい。

6. そのために必要な支援、ニーズ

- ・ 営業やマネージャーがほしくないわけではないが、そういうことを自分でやることで、コミュニケーションが広がり、活動の幅が広がっていく。
- ・ (筆者注：現在手が回らない) ホームページ制作を手伝ってくれる人が、ほしい。

7. ICT を利用した支援についての考察

当ケースにおける ICT を利用した支援とは、インターネットの技術的支援である。6「考察」において述べた通り、地理的拡大のために、インターネットの利用を望んでいるが、時間的な問題を抱える。

技術的支援の範疇で考察すれば、ホームページの制作者の紹介にとどまらない方法に、可能性がある。ホームページによって実現したい目的が限定されていないため、具体的に、以下の方法で代替することが可能である。

- ① 作品の紹介が目的であれば、既存のサイトにおける無料ダウンロード
- ② 自身の宣伝が目的であれば、インターネット上のパブリシティ
- ③ 作品の販売が目的であれば、ディストリビューターの紹介
- ④ インターネット上の芸能活動などが目的であれば、既存の動画サイトにおけるアップロード

などのために、技術的に支援することが可能である。

当ケースに対して具体的な支援を提案するために、「ホームページを作って、何をしたいか」について再調査の必要があるのではないだろうか。

以上

ケース 9、精神障がいを持つミュージシャンからの聞き取り調査の分析

1. インタビューの状況

インタビューの時間	2009年12月25日／16：30～18：00（1時間30分）
調査担当者	貝谷 嘉洋、土屋 直子
天候	晴れ

2. 調査対象者の基本的事項

対象者	50歳代男性、愛知県在住
職業	社会人
障がい	精神
介助	なし

3. 現在の音楽活動について

- ・ CD（メジャー、インディーズ、自主制作）は、発売していない。
- ・ ライブの頻度は、月に1回程度。（ギャランティあり、なしの場合あり）
- ・ 精神保健福祉の普及啓蒙活動でギターを演奏。（頻度不明）

- ・ 演奏楽器は、ギター、ヴォーカル。
- ・ ゴールドコンサートの出場者である。

4. 過去の経緯及び現在の活動

- ・ ギターを始めたのは高校 2 年生。フォーク歌手にあこがれて。
- ・ 人前で演奏するようになったのは、3 年くらい前から。きっかけは、職業訓練終了の打上で演奏したこと。
- ・ その同時期、NPO 法人設立（平成 16 年頃）を機に、人前で演奏する頻度が増えた。
- ・ 普段の音楽活動はカバー（フォークソング）が多い。
- ・ 人に聞いてもらう機会があればと思い、GC 以外のコンクールに応募したこともある。
- ・ カフェで演奏する。
- ・ 精神保健福祉士養成の講座で講演してほしいと頼まれることが多く、そのときにギターを演奏したりする。
- ・ 現在はあまりやっていないが、2 年くらい前に「ひとりのコンサート」（一人のためだけに演奏・歌う）をやっていた。

5. 自己実現、将来の夢

- ・ プロになろうという、強い気持ちはない。
- ・ 音楽は、自分を前に出していきたいというよりも、音楽を人前で演奏することによって、精神障がい者に対する偏見を取り払ったりしていきたい。
- ・ 精神障がいを持っている人でも、こういうのをやっているんだよっていうのを（筆者注：世の中一般に）普及したり、啓発をしたい。
- ・ 少しずつオリジナルを増やしているが、音楽にメッセージ性を込めたいと思う。新曲は、つらい時期を乗り越えて、先へ行こうという前向きなものに仕上がった。
- ・ 映像配信サイトで、映像を配信したい。自分ではやり方が分からないので、まだ手をつけていないが、自分の音楽や音楽活動を広く知ってもらうこと、精神障がい者に関する知識・認識の普及・啓蒙に良いツールではないかと思う。

6. そのために必要な支援、ニーズ

- ・ 精神障がい者に関する知識・認識の普及・啓蒙活動をしたいので、自分の演奏活動を広報・宣伝してほしい。
- ・ インターネットで他のミュージシャンの音楽活動を見ることがあるが、途中で途切れたりしているのを何とかした方が良いと思う。見る側のインターネット環境を上げれば解決するが、配信する側もたくさんの人にスムーズに見てもらいたい配慮が必要だと思う。
- ・ 自分だけではなくて、精神障がい者に関する知識を持ってほしい。＝そのために音楽活動をしている。
- ・ 障がいを持ちながら音楽をやっていることに不利を感じたことはないので、世間に対する不満はない。
- ・ 国の制度レベルに対する要望はある。精神障がい者の場合、たとえば障がい者年金で生活

が安定すれば、精神が安定する。病気（筆者注：精神障がい）を良くしようとするならば、異性との出会いや結婚を目指せるような自立をしないとイケない。

7. ICT を利用した支援についての考察

ICT を利用した支援についても、具体的な要望が聞かれた。彼にとっての ICT とは、インターネット上の音楽活動である。この観点から、

- ・映像を発表するための、技術的サポート
- ・映像を見るための、配信環境改善

が望まれている。

両者ともに、広義でのインターネット・アクセシビリティである。ユーザーとしてインターネットを日常的に使用していることから、有効な情報源と捉えている。彼のみへの支援ではなく、一般的に適用可能な支援ではないだろうか。

以上

ケース 10、肢体・内部障がいを持つミュージシャンからの聞き取り調査の分析

1. インタビューの状況

インタビューの時間	2010 年 1 月 15 日 / 16 : 00 ~ 17 : 40 (1 時間 40 分)
調査担当者	宮腰 恵理子、布村 沙那子
天候	晴れ

2. 調査対象者の基本的事項

対象者	30 歳代女性、東京都在住
職業	社会人
障がい	肢体、内部
介助	なし

3. 現在の音楽活動について

- ・ CD（自主制作）を、発売している。
- ・ ライブの頻度は、月に 1 回程度。（ギャランティあり）
- ・ 演奏楽器は、ピアノ、ヴォーカル。
- ・ ゴールドコンサートの出場者である。

4. 過去の経緯および現在の活動

- ・ 肢体障がいのリハビリのためにと母の薦めに従い、3 歳から 10 歳までバイオリンを学んだ。10~11 歳頃、手術（筆者注：部位不明）をきっかけに、遠ざかった。
- ・ 10~11 歳頃から、歌を習い始めた。内部障がいへのリハビリに良い、というきっかけだったが、歌に対する興味はもともとあった。それ以来、続けている。

- ・ 大学院とダブルスクールで音楽の専門学校に通学し、ヴォイストレーニングを学んだ。歌以外にも音楽理論などの専門知識を身に付けた。
- ・ 専門学校通学とは別に、バンド活動（筆者注：バンド A）をやっていた。
- ・ 専門学校卒業後、バンド（筆者注：バンド B）にヴォーカルとして入った。
- ・ その後、女性ピアニストとデュオ（筆者注：バンド C）をはじめた。
- ・ GC 出場の翌年より、ソロ（ピアノ弾き語り）活動をしている。
- ・ 主な音楽活動は、ライブ出演。バンド A 時代より付き合いがあり、障がいについての理解があるオーナーの元で、演奏活動をしている。
- ・ その他、自宅でヴォイストレーニング教室を開いている。同時に、英会話に対して興味があり、英語と歌を組み合わせた教育活動をしている。具体的には、子ども用の英単語の歌を作詞作曲し、子どもたちに英会話を教えている。
- ・ ヴォイストレーニングの教材作りに、携帯電話のヴォイス・レコーダーをはじめとする録音機材を用いる。具体的な手順として、①短いフレーズを携帯電話に、②ちゃんとしたものを簡単な録音機材に、録音している。
- ・ GC 関連で実現した海外の演奏活動により、インディーズレーベルの関係者と出会い、自主制作の形で CD（アルバム）を発売した。

5. 自己実現、将来の夢

- ・ GC の出場をきっかけに、自分やりたい音楽が見つかった。今、そこに向かって前進している。「これまでは、人前に入るのをためらってしまっていた。それは、障がいを持っていることを見られることを、これまで何となく気にしていたからだ」ということを認めることができた。
- ・ 以前は、プロになることに対する強い熱望があった。今は、プロ、メジャーになることよりも、障がいを持っていることを言い訳にせず聞いてくれる観客の前で歌うことが、自分の音楽のスタンスとして強い。
- ・ 堂々と気負わずにステージに立てるか、という自己課題を乗り越えていきたい。
- ・ GC の出場者仲間と声掛けをし合い、機会があれば、先方がやっている講演＋演奏に参加する予定である。
- ・ 音楽活動のスタンスとして、理想の人がいる。仕事をして、音楽活動をして、CD を出して、有名になって、という形がいい。
- ・ 有名になることの目的は、メッセージを聞いてもらいやすい立場になりたいから。盲であろうとなかろうと、すばらしい音楽性の洋楽ミュージシャン。人種差別に対して、存在自体がメッセージの洋楽ミュージシャン。たとえば、自分と同じような障がいを持つ人たちへの理解を求めたりするために、発言力のある立場になりたい。
- ・ デュオのホームページを持ち、無料で音楽を配信している。無名のミュージシャンでは、お金がかかるとなると、足が遠のいてしまう。まずは、聞いてもらって気に入ってもらうことを目指す。今回、CD を発売したが、気に入ってもらってはじめてお金を払ってもらえるのだと思う。

6. そのために必要な支援、ニーズ

- ・（調査員が提案した内容に対し）マネジメントをやってくれる人がいたらいい。（自分は、自分を売り込んだりするのが苦手なので）ピラを配ったり、新規の演奏場所を開拓したり、そういう事務的なことをやってくれる人がいたらいい。現実として、お支払いができないので募集しようとしたことはなく、自分でがんばっている。
- ・音楽活動に関しては、自分自身の問題なので、その他具体的に、人にやってもらいたい支援は思いつかない。
- ・人の心、建物などの設備をはじめとして、社会がバリアフリーになることを願う。このメッセージを伝えるために、有名になるべく、自分で努力している。

7. ICT を利用した支援についての考察

当ケースにおいては、本人の描く道筋として「まずは知ってもらうこと。無名のうちは、無料で聞いてもらい、気に入ってくれた人に CD なりライブなり、お金を出してもらおう」というスタンスである。これによって、自分のホームページを持ち、オリジナル曲のダウンロード（無料）なども行っている。したがって、ミュージシャンとして広く知ってもらうことを第一の目標とするならば、

- ・インターネットラジオや音楽・映像配信など、視聴者の耳に届く環境を作る。
- ・この観点から、C-MUSIC プロジェクト²の、より広範囲な PR もひとつの手段である。

以上が企画できる。

その他、7「考察」で述べた音楽制作の技術的サポートや人との出会いにおいて ICT を利用する方法もあるのではないだろうか。

以上

ケース 11、視覚障がいを持つミュージシャンからの聞き取り調査の分析

1. インタビューの状況

インタビューの時間	2010年2月28日/10:30~12:00（1時間30分）
調査担当者	貝谷 嘉洋
天候	曇り

2. 調査対象者の基本的事項

対象者	20歳代男性、岩手県在住
最終学歴	県立盲学校
職業	社会人（仕事名：実習教諭）
障がい	弱視
介助	なし

² 当法人が主催、運営しているインターネット上での音楽紹介サイト。<http://www.npojba.org/cmusic/musician>

3. 現在の音楽活動について

- ・ ライブの頻度は、月に1~2回程度。
- ・ 演奏楽器は、DJ。
- ・ ゴールドコンサートの出場者である。
- ・ 今は仕事の都合で、音楽活動は趣味。
- ・ 地元の一輪車チームの音楽（一輪車に乗りながら演技をするスポーツ）の編集。

4. 過去の経緯及び現在の活動

- ・ スポーツが好きだったが、目が悪くなっていったので中学では挑戦する気力がなかった。
- ・ 高校2年に上がるとき、将来何が出来るのかと考え始めたときに親から盲学校について聞かされ見学に行った。
- ・ 盲学校では同じ状況の人が多く、そんな中でもスポーツや職業など色々なことにチャレンジしていく人を見て気持ちが解けていった。
- ・ 盲学校では鍼灸マッサージの資格をとれば将来社会に出て行けると思い転入した。
- ・ 華やかなものへの憧れと人が手を出さないものに手を出したがりたい性格で、学校の音楽の授業では琴やフルートなどのようなものだったが、後輩がラップのヴォーカルをしており、その子の繋がりですDJをやるきっかけとなった。
- ・ インターネットの動画や教則ビデオにて独学で腕を磨く。音だけでわからない部分については妻に手の動きの情報を教えてもらった。（しかしレベルが上がるほど動きが複雑になり、伝えることが難しくなってきた）
- ・ 最初は視覚障がいにはハンディになった。DJは暗いところでやることが多く、自分は暗いところは全然見えないため、感覚でやってしまうため、家とライブ会場では手の伸ばす感覚（高さや微妙な位置）が違ってくる。
- ・ 以前はプロとして食べていけたらと思い精力的に活動をしていた。
- ・ 鍼灸・マッサージの免許をとり現在は母校で働いている。

5. 自己実現、将来の夢

- ・ 同じ障がい者からみて、自分の姿を見せることによって「自分たちも出来るかも」と思えるような存在になりたい。（どんな職業でも）

6. 必要な支援、ニーズ

- ・ 視覚障がい者の仕事の選択肢がもっとあればいいと思う。視覚障がい者の職業イコール鍼灸・按摩というイメージがあり、鍼灸として社会にでて働くにも人相手の仕事なのでそれなりの能力が求められる為、そこで躓いてしまうと他に何もなくなってしまふ。
- ・ 学校での支援物については十分に揃っていると思われるが、本人が訴えてこなければ特になにもしない状況。障がい者のための教育がもっと行われてもいいと思う。
- ・ どんな職業でもサポートを1人つけるだけで可能性は十分ひろがっている。その人に必要な環境を揃えてほしい。
- ・ 移動についてはおもに妻が車を運転しサポート。自分のように視覚障がい者をバックアップしてくれる人がいたらもっと可能性はひろがっていくと思う。

以上

ケース 12、肢体障がいを持つミュージシャンからの聞き取り調査の分析

1. インタビューの状況

インタビューの時間	2010年2月28日(日) / 17:30~18:30 (1時間)
調査担当者	貝谷 嘉洋
天候	曇り

2. 調査対象者の基本的事項

対象者	40歳代男性、青森県在住
最終学歴	県立盲学校
職業	社会人(仕事名:ミュージシャン)
障がい	全盲
介助	ガイドのみ

3. 現在の音楽活動について

- ・ 年間100本のライブ・講演
- ・ 講演は主に学校関係で総合学習や道徳の時間など。先生方のネットワークで広がっている。
- ・ 自主制作CD(シングル2枚、アルバム4枚)

4. 過去の経緯及び現在の活動

- ・ 音楽を始めたのは中学の時。どちらかというとスポーツに目が向いていたが友人がギターを始めていて一緒にバンドをやりはじめたのがきっかけ。
- ・ 盲学校の文化祭や他校との交流にて演奏。コンテストにも積極的に応募し、プロを目指していた。そのころから自分のメッセージを歌にしたいと思いコンテストに出るためにオリジナルを作りはじめた。
- ・ ただ食べていくためには、まずは鍼灸マッサージの資格をとるしかないと思っていたが、夢はシンガーソングライター。
- ・ 元は鍼灸マッサージで病院に勤めていた。盲学校卒業後、盲学校という目が不自由な人たちだけの環境からいきなり社会人として働く中で、音楽をやる余裕は1年ぐらい生まれなかったが、徐々に月1のライブ活動などはじめられるようになった。数年前に病院を辞めて治療院を開業しようと思った矢先に、音楽の依頼がきはじめ、とりあえず3年ぐらいやってみようと思った。第2回ゴールドコンサートに出場、歌唱賞を受賞。そこから音楽活動が広がった。その年は年間120本の依頼がきた。
- ・ 現在もスポーツは好きで盲人野球(グラウンドソフトボール)を続けている。

5. 自己実現、将来の夢

- ・ メジャーデビューできたらという気持ちは今でもあるけれど、10代のころに思い描いていたシンガーソングライターになっている。但し活動が県内含め東北にとどまっているので、もっと全国にひろめたいという思いはある。

- ・ 以前は盲目の～と言われて嫌な時期もあったが、そういったことで聴きにきてくれている人がいることや仕事の依頼が入ることも事実、それは武器になっている。

6. 必要な支援、ニーズ

- ・ 仕事のヘルパー（移動、専門用語などそれなりの音楽知識を持った人）
- ・ 今後音楽を商売にしていく人に対して、メーカーは配慮のある楽器・機材を作ってほしい。（シンセサイザーなどの電子関係は録音する機材はタッチパネルのものが多く使いづらい。画面、マニュアルが読めない。）
- ・ ライブ会場でのコミュニケーションの部分。自分からも声をかけるようにしているが、「担当の誰々～」というふうに自分から言ってくれるとお願いしやすい。
- ・ ウェブアクセシビリティについては特に問題はないが、ログインの画像認証が視覚障がい者は読めない。リンクが画像中心だとどこに何があるのかがわからない。

以上

ケース 13、肢体障がいを持つミュージシャンからの聞き取り調査の分析

1. インタビューの状況

インタビューの時間	2010年3月1日（月）/11：45～12：45（30分）
調査担当者	貝谷 嘉洋
天候	曇り

2. 調査対象者の基本的事項

対象者	40歳代男性、青森県在住
最終学歴	県立盲学校
職業	社会人（仕事名：盲学校助教諭）
障がい	弱視
介助	なし

3. 現在の音楽活動について

- ・ 2ヶ月に1回。イベントに呼ばれたときにやる。
- ・ 自主制作CD(サポート)
- ・ アマチュアの人のレコーディングを家でやったり自主制作を作ってあげたりしている。
- ・ イベントの音響

4. 過去の経緯および現在の活動

- ・ 中学1年の時先輩のバンドをみてカッコイイなと思いギターをはじめた。
- ・ 生まれつき目が悪いので青森の盲学校に行っておりマッサージ師になろうと思っていたが、音楽が好きで東京に行ってみたいと思った。
- ・ カバー・コピーをやっていたが技術が未熟でカバーしきれず、そのころからオリジナルを

作りはじめた。

- ・ 自分たちの生徒にゴールドコンサートの曲を歌わせている。(卒業シーズンなので)
- ・ 群馬の出場者(学生)は自発的にゴールドコンサートに出場していて、ああいった姿を自分の学校の生徒に見せたいと思う。

5. 自己実現、将来の夢

- ・ 自分は障がい者という気持ちはない。小さいころに他の小学校の頃に他の学校の子にバカにされたりしたけれど負けず嫌いだった。いつも絶対負けないぞと思っていた。若いときは眼鏡がイヤでライブでも外し見えない中で演奏した。この眼鏡をかけるということはその時点で自分を受容したことになる。
- ・ しばらくは教員で。教員免許をとるために勉強をしている。
- ・ 教育の現場を押さえて、いずれは医療の現場に戻りたいと思う。
- ・ 家族でゴールドコンサートに出場すること。

6. 必要な支援、ニーズ

- ・ 特になし。
- ・ 車を運転できないので機材の運搬ができないが、妻が運転でサポートしてくれている。
- ・ 機材などの取扱説明書が見づらいが拡大版を使用したり、ルーペを使用することによって、なんとか見ることができている。
- ・ まわりがサポートしてくれているのでそんなに困ったことはない。

以上

1-2-2-3. 音楽家の家族への面接調査

チャレンジド（障がい者）・ミュージシャンの家族が望む音楽支援

ケース 14 知的障がいを持つミュージシャンの家族からの聞き取り調査の分析

1. インタビューの状況

インタビューの場所	日本バリアフリー協会事務所
インタビューの時間	2009年12月27日／14：00～15：00（1時間00分）
調査担当者	貝谷 嘉洋
天候	晴れ

2. 調査対象者の基本的事項

30歳代男性、東京都在住のプロフルート奏者。オーケストラに所属し、首席奏者として活躍中。個人活動として、音楽事務所に所属。全国のホールにてソロコンサートを行う。日本国内の私立音楽大学およびフランスの国立音楽院にて音楽の専門教育を受けた。自身の音楽活動に加えて、家族で音楽グループを結成し、宮城県内を中心にライブ活動をしている。本人から見た属性は、兄。

障がいを持つ本人について

対象者	20歳代女性、宮城県在住
職業	社会人（仕事名：作業所通所）
障がい	知的
介助	外出時の付き添いのみ

3. 本人の現在の音楽活動について

- ・ CD（インディーズ）を、発売している。
- ・ ライブの頻度は、月に1回程度。
- ・ 演奏楽器は、リコーダー。
- ・ ゴールドコンサートの出場者である。

4. 過去の経緯および現在の活動

- ・ 両親が楽器演奏をやっていたので、小さな頃から音楽に親しんでいた。身近に様々があったが、本人に合った楽器がリコーダーだったので、演奏するようになった。
- ・ 現在は、家族で音楽グループを結成し、宮城県内を中心にライブ活動をしている。
- ・ 本人の音楽性、人間性などが評価され、雑誌に特集されるなどの活動もしている。

- ・ ライブの演奏を聞いたプロから高評価を得るものの、障がいを持つということで、先方が彼女を「音楽家としてどのように育てていったら良いか、わからない」という戸惑いの声が聞かれる。

5. (兄、両親、本人が願う) 将来の姿

- ・ (兄として、プロとして) 妹を、東京で活躍させたい。なぜなら、現在、地元で暖かい方たちに守られて好きな音楽をできているが、時々都合よく利用されてしまったりする。大人に(筆者注: 商売として)利用されずに、妹の音楽を純粹に観客に届けるためには、ライン(筆者注: ミュージシャンとしての立場としての境界線)よりも上に行かなければいけない。そのための一手段として、東京進出があり、プロとのコラボレーションなどで、妹のメッセージを広く届けたい。
- ・ (兄談: 両親としては) 娘の現在の音楽活動は、望ましい姿であると思っているようである。なぜなら、地元で暖かい方たちに守られて好きな音楽をできているからである。また、家族で好きな音楽をできているからである。これ以上に望むことはなく、現在のスタンスで続けていきたいと思っているようである。
- ・ (兄談: 本人としては) 好きな音楽を続け、作業所でケーキを焼いていられる現状に満足しているようである。なぜなら、兄から「音楽が忙しいから、作業所の仕事を辞めたら?」と言われても、作業所での仕事がなくなると寂しいからと、続けているからである。音楽も仕事も好きで、両方を続けられている状態が良く、現在のスタンスで続けていきたいと思っているようである。

6. (兄、両親、本人が望む) そのために必要な支援、ニーズ

- ・ (兄として、プロとして) 自分が、妹の音楽活動をプロモートしていきたい。プロモートする中でプロとの出会いをたくさん作り、単なる共演ではなく、メッセージ性のあるコラボレーションを考えている。具体的には、たとえば戦地慰問などで、妹の純粹さだからこそ伝えられるようなメッセージを発信したい。
- ・ ゴールドコンサートに出演してみて、障がいを持つ方々で、音楽性の高い音楽活動をしている方がたくさんいることが分かった。ゴールドコンサートとのコラボレーションや、障がいを持つミュージシャンの方々と一緒に音楽イベントをやってみたいと思っている。
- ・ (兄談: 両親としては) このまま、地元で暖かい方たちに守られて好きな音楽をしていきたいようである。家族で音楽を楽しんでいきたいようである。
- ・ (兄談: 本人としては) 音楽をするだけで幸せのようである。

7. ICT を利用した支援についての考察

当ケースにおいては、マスメディアによる広範囲の演奏活動や宣伝・広報、支援などが望まれている。具体的な方法として、彼女の純粹さを武器にした平和や福祉分野における音楽活動に、可能性を見出している。最終目標は、国際的な活動である。

調査の中で、将来の音楽活動のための詳細な計画、現在のそのための取り組みを聞くことができた。3.「本人の現在の活動」から推察すれば、彼女の音楽が聴衆に何らかの印象、影響

与えることから、彼女の存在や音楽にはメッセージ性があると推察できる。

6. 「そのために必要な支援、ニーズ」の通り、平和や福祉分におけるセッション、他のミュージシャンとのコラボレーションが望まれている。したがって、彼女らの希望に沿った上でICTを利用した支援としてできることは、

- ① インターネット上で、外国語のミラーリングを含む、広範囲の宣伝・広報を行う。
- ② インターネット上のコミュニティを作り、セッション、他のミュージシャンとのコラボレーションの前段階である、出会いの機会を作る。
- ③ インターネットラジオ・テレビによる音楽番組を開設する。
- ④ または既存のサイトへ紹介をする。

などが考えられる。

以上

ケース 15 知的障がいを持つミュージシャンの家族からの聞き取り調査の分析

1. インタビューの状況

インタビューの時間	2010年1月20日/14:00~17:00 (3時間00分)
調査担当者	土屋 直子
天候	晴れ

2. 調査対象者の基本的事項 (同席の母代弁)

対象者	20歳代男性、東京都在住
職業	無職
障がい	知的
介助	生活全般

3. 現在の音楽活動について (同席の母代弁)

- ・ CD (メジャー・インディーズ・自主制作) は、発売していない。
- ・ ライブの頻度は、月に1回程度。
- ・ 演奏楽器は、打楽器 (サバール)。
- ・ ゴールドコンサート (以下、GC) の出場者である。

4. 過去の経緯及び現在の活動 (同席の母代弁)

- ・ 歩き始めた3歳の頃から、音を聴いてよく反応を示していた。
- ・ 幼児期から母がよく音楽のコンサート (おもにクラシック) に連れていっていたが音楽に集中して聴いていた。
- ・ 小学校6年のときにアフリカの太鼓 (サバール) のワークショップに参加し打楽器の魅力にはまる。
- ・ プロのクラシックコンサートに聴きに行った時、プロの演奏を聴いた後、「自分のピアノ

はだめだー！」と言った。＝他の音楽と自分の音楽を客観的に聴き分けられているというエピソードである。

- ・家で楽器を演奏したり、ライブに通っているうちに、他のミュージシャンとの交流が生まれ、セッションを行うようになった。
- ・ライブでもあまりに圧倒されるとはじめのうちはセッションを拒む(萎縮)することもあり、力の差を感じるという気持ちを持っている。
- ・本人が楽しんでいるだけで十分だと思ったが、周囲の人から「外に発信すべき、もったいない！」と言われ、2002年高校1年のとき自主コンサートを開催した。
- ・それ以来、毎年コンサートを開催している。

5. 自己実現、将来の夢(同席の母代弁)

- ・ダウン症のチビッコたちにむけて輝く星であってほしい。
駅前の路上パフォーマンスで小さな赤ちゃんを隠すように抱いたお母さんが、彼の音楽にじっと耳を傾けており、あとで話を聞いてみるとその小さな赤ちゃんは生後6ヶ月のダウン症とのこと。母自身もわが子がダウン症であることを受け入れるのに3年かかり、生き生きとしたダウン症の人に勇気づけられたことも多くあった。
- ・小さなライブハウスで、自由に演奏できる居場所を作りたい。公のものだと、主催者の意思が強くなったり、自由がきかなくなってしまうため。

6. そのために必要な支援、ニーズ(同席の母代弁)

- ・音楽活動をする上で、障がいに対する社会的な見方のために、不利を感じることは、音楽に対しては、特にない。彼を好きで音楽でも共感してくれる人が、周りでサポートしてくれている。
- ・言葉のコミュニケーションが難しいために差別を受けたりし、残念に思う。彼とサポートメンバーによるイベントで、彼にだけギャラが支払われず、主催者より「参加したことをキャリアとしてください」と言われたことがあった。
- ・自主企画のコンサートを開催したり、演奏活動をしたりするための資金が必要だ。現在、自分たちで助成金を受けているが、一回だけのお金ではなく、何度も続けるための資金がほしい。
- ・ライブの告知などの宣伝活動をしてほしい。
- ・GC(ゴールドコンサート)で、視覚障がいと知的障がいと同じ基準で競うのは、知的障がいを持つミュージシャンにとって不利だと思う。特別出場枠を作ったり部門を分けたりするのは望まないが、音源による事前審査ではなくて、舞台上のパフォーマンスも含めて審査を受けたい。
- ・ビデオ審査によって、演奏している姿、頑張っている姿も評価してほしい。
- ・知的障がいを持つミュージシャンが作曲をするのは難しいので、GCにカバー枠も作ってほしい。

7. ICTを利用した支援についての考察

当ケースにおいては、マスメディアなどによって広く音楽を知ってもらえるような、拡大戦略は望まれていない。特に、視聴のターゲットとしてダウン症の子どもたちおよび家族に絞られていることから、直接・対面のコミュニティが築ける音楽活動が良いのではないだろうか。

調査の中で、障がいを持つ子どもがいる母親としての悩み、それを乗り越えたいきさつを聞くことができた。小さな勇気（母親談）を持って、自分自身の不安・心配を乗り越えてきた子育ての歴史など、心理学的な物語である。人間的なふれあいを求めていると推察できる。

4「自己実現、将来の夢」で、自由に演奏できる居場所を作りたいと述べられていることも、地理的な場所における直接のふれあいが求められていることを裏付ける。

したがって、彼らの希望に沿った上で ICT を利用した支援としてできることは、

- ① インターネット上のライブ、コンサートの広報・宣伝をする。＝広報
- ② ファンドを作り、インターネット上で募集する。＝金銭的支援
- ③ インターネット上でコミュニティを主宰し、演奏会を主催する。＝場所などが考えられる。

ただし、以上は、ミュージシャン本人、マネージャーとしての立場からではなく、障がいを持つ子を育てる母親としての意見に基づいている。音楽ビジネス、マネジメントの観点から望まれる将来の姿、必要な支援とニーズについて、再調査の必要があるのではないだろうか。

以上

1-2-2-4. 面接調査における聴取意見の分析結果

1. 基本的事項のまとめ

#	年齢	居住地	性別	職業	障がい	CD 発売	ライブ	その他の活動
1	50 歳代	京都府	男性	社会人	視覚	なし	1 回/週	なし
2	40 歳代	京都府	男性	社会人	視覚	なし	1 回/週	なし
3	30 歳代	群馬県	男性	社会人	視覚	あり	10 回/年	CD 配布
4	10 歳代	群馬県	女性	学生	視覚	あり	10 回/年	不明
5	20 歳代	静岡県	男性	社会人	視覚	あり	1 回/月	テレビ出演他
6	50 歳代	愛知県	男性	社会人	精神	なし	1 回/月	講演会
7	30 歳代	東京都	女性	社会人	肢体、内部	あり	1 回/月	教室運営、HP 配信
8	40 歳代	宮崎県	男性	社会人	肢体	あり	2、3 回/年	小説執筆、絵画作描
9	30 歳代	熊本県	男性	社会人	その他	あり	1 回/月	レーベル運営、ブライダル・プランナー
10	20 歳代	宮崎県	女性	社会人	肢体	あり	2、3 回/月	ラジオ・パーソナリティ、テレビ出演、新聞コラム執筆
11	20 歳代	岩手県	男性	社会人	視覚	あり	1,2 回/月	音楽編集
12	40 歳代	青森県	男性	社会人	視覚	あり	100 回/年	講演
13	40 歳代	青森県	男性	社会人	視覚	あり	1 回/2 ヶ月	レコーディングサポート、音響
14	30 歳代	宮城県	男性	社会人	知的	あり	1,2 回/月	作業所
15	60 歳代	東京都	女性	社会人	知的	あり	1,2 回/月	不明

※ ケース 14,15 の回答者は親族

2. 自己実現・将来の夢と、そのために必要な支援・ニーズ（抜粋）

#	自己実現・将来の夢	そのために必要な支援・ニーズ
1	ライブの回数を増やしたい。 新曲を作るための時間がほしい。	日帰りできる距離で、発表の場がほしい。 障がいによって、ニーズを感じたことはない。
2	ライブの回数を増やしたい。 新曲を作るための時間がほしい。	日帰りできる距離で、発表の場がほしい。 障がいによって、ニーズを感じたことはない。
3	技術的な実力をつけたい。 自分が納得できる音楽を続けていきたい。	録音機材に、ビープ音や音声ガイドがほしい。 公共交通機関が、充実してほしい。
4	メンバー（No.3）のように、技術を磨きたい。 ラジオ・デビュー、ラジオ・パーソナリティをやりたい。	使いやすい機材がほしい。 マスメディアに、状況解説がほしい。
5	現在、プロの音楽家として活動中。	思い当たるところでは、特にない。

	海外への展開を望む。	困難は、自ら解決している。
6	プロになろうという強い気持ちはない。 精神障がいに関する知識の普及・啓蒙をしたい。	音楽活動で、障がいによるニーズを感じない。 自分の演奏活動を広報・宣伝してほしい。
7	自己課題を乗り越えていきたい。 メッセージを聞いてもらうため、有名になりたい。	マネージャー（営業、事務）がほしい。 有名になるべく、努力している。
8	小説 8 割、音楽 2 割でやっていきたい。 音楽活動では、プロデュースをやりたい。	CD 制作、HP 制作をする人がほしい。 バンドメンバーがほしい。
9	ライブを続けていきたい。 インターネットで、宣伝や人脈作りをしたい。	病気に対する周知がほしい。 発作や自己治療に対する周知がほしい。
10	東京や海外で活動してみたい。 障がいを武器にして、活動を広げたい。	マネージャーがほしいが、自分でやりたい。 HP 制作をする人がほしい。
11	自分の姿を見せることにより同じように 障がいを持つ人を勇気づけたい。	視覚障がい者の仕事の選択肢が鍼灸以外にも ほしい。
12	全国に活動を広げたい。	仕事のサポートが欲しい。
13	教員を経て医療現場へ。 家族でゴールドコンサート出場。	特になし。

3. 考察、ICT を利用した支援についての考察（抜粋）

#	考察	ICT を利用した支援についての考察
1	二束のワジで、音楽をのんびり続けたい。 音楽制作、演奏以外を支援してほしい。	ICT による支援は、望まれていない。 ICT に関する周知方法を構築する必要がある。
2	二束のワジで、音楽をのんびり続けたい。 音楽制作、演奏以外を支援してほしい。	ICT による支援は、望まれていない。 ICT に関する周知方法を構築する必要がある。
3	音楽制作に関して、支援を希望する。 発表の機会については、要望はない。	ユニバーサルデザインに対応した機材 発表場所への移動手段の、音声読み上げなど
4	音楽制作に関して、支援を希望する。 発表の機会については、要望はない。	ユニバーサルデザインに対応した機材 発表場所への移動手段の、音声読み上げなど
5	生まれたニーズは、自らで解決している。	インターネットによるプロモーション
6	精神障がいに関する知識の普及・啓蒙支援	映像発表のための技術的サポート、配信環境改善
7	人的支援（ホッパーやポーター）	音楽・映像配信（人に知ってもらう環境）
8	人的支援（障がいによって生じたニーズ を解決してくれるメンバー）	人的支援を代替できる ICT 技術機器
9	音楽活動に関する支援は、ない。 障がいに対する周知がほしい。	インターネット上の宣伝
10	地理的な広がりを希望している。	技術的支援（HP 制作、その他代替手段）

4. 面接調査における聴取意見のまとめ

以上 15 ケースの聴取意見を比較すると、年齢、居住地に関わらず、

- ① 障がいによって音楽活動にニーズを感じない者のうち、音楽活動を中心に行っている（専業、もしくはそれに順ずる）か否かで、必要な支援・ニーズが異なる。
- ・ 音楽活動が専業である者は、課題を自身で解決しており、必要な支援はない。(5)
 - ・ 音楽活動が中心であるが、併行して別の仕事を持つ者は、思いつく限りの課題は自身で解決しているが、さらに活動を広げるための支援（マネジメント、病気に対する周知、HP制作）を必要としている。(7、9、10)
 - ・ 音楽活動を中心に行っていない（仕事や学業との二束のワラジ）者は、人に聞いてもらおう、知ってもらうための支援（発表・広報・宣伝などの“外向き”のもの）に対して、必要な支援がある。(1、2、6)
- ② 障がいによって音楽活動にニーズを感じる者のうち、音楽活動の比重が重い（音楽が、自己表現にとって重要な手段）か否かで、必要な支援・ニーズが異なる。
- ・ 音楽活動の比重が重い者は、音楽活動をするための支援（音楽制作、発表場所への移動手段に対する希望）を必要としている。(3、4)
 - ・ 音楽活動の比重が軽い（他の表現手段に代替しようと考えている）者は、音楽活動をするための支援（人的支援）を必要とするが、他の手段で代替の可能性がある。(8)

5. 考察および ICT を利用した支援についての考察

年齢、障がいなどの基本的属性によって、すでに持つ ICT に対する認識が異なり、

- ① 年齢に関わらず、視覚障がいを持つ者に、ICT のうち、インターネットに対する希望が聞かれなかった。(1、2、3、4)
- ・ ICT になじみがある者は、ICT を利用した仕様（音楽機材、音楽機材以外のハードウェア）に対して、支援を必要としている。(3、4)
 - ・ ICT になじみがない者は、ICT と音楽活動のつながりについてのイメージがないため、ICT について周知する必要がある。(1、2)
- ② 年齢に関わらず、視覚障がい以外の障がいを持つ者に、ICT のうち、インターネットに対する希望が聞かれた。
- ・ ICT としてインターネットがイメージされているため、音楽や映像の発表・配信、宣伝、ホームページ制作などに関する支援を必要としている。(6、7、8、9、10)
- ③ 居住地によって、すでに持つ ICT に対する認識に差異はなかった。
- ④ ライブや CD 発売枚数、その他の音楽活動の頻度などの客観的カテゴリによって、本人が必要とする支援に差異はなかった。
- ⑤ ICT を利用した支援に可能性がある者については、「人に知ってもらいたい、聞いてもらいたい」という本人の希望に沿うものとして、広報・宣伝の提案などが適当である。
- ネットワーク通信による情報・知識の共有という ICT の概念の要素である、

以上

事業2「作品のデータベース化・インターネット上での公開、一般との交流サイト設置」

2-1. 事業の概要

以下の計画をもって、事業を行った。

事業名	作品のデータベース化・インターネット上での公開、一般との交流サイト設置
事業テーマ	障がいを持つ音楽家への、ICTを利用した音楽活動支援
言葉の定義	1 音楽活動 音楽家が、聴衆に対して作品を発表すること。
	2 ICT Information and Communication Technology (情報通信技術)。ネットワーク通信による情報・知識の共有を念頭に置く。
	3 支援 ③ 音楽家の自主的な音楽活動に対すること。(活動の宣伝など) ④ 音楽活動に付随すること。(作曲・演奏に対する支援など)
	4 作品 ③ 音楽家が作曲または作詞、または両方を手がける楽曲。 ④ 音楽家以外が作り、音楽家が演奏する楽曲。
	5 音楽家 ゴールドコンサートに応募または出場した、障がいを持つ人物。
目的	この研究では、ゴールドコンサートにおいて音楽家および支援者および聴衆が、それぞれの立場においてどのような支援を必要としているかを考察することにより、作品が普及するために、または作品の評価が向上するために、どのような支援が有効かについて検討、選択するための基礎研究となることを目的とする。
背景	情報技術の分野で、操作性など、誰にとっても便利な道具になりつつある。
事業の概要	ゴールドコンサートの応募者のうち、インターネットによる音楽支援を希望する音楽家に対する支援の内容を、紹介する。 <ul style="list-style-type: none"> 音楽家に報告することによって、ICTを利用した音楽活動への前向きな姿勢を引き出すきっかけにする。 事業における専門委員による研究会のための資料を作成することによって、ICTを利用した音楽支援について検討する材料にする。
仮定	音楽家において、「障がいをもつ」ことを前提とすれば、ICTによる支援が、彼らの活動範囲の広がりという観点で、有効である。彼ら自身が必要とする支援の内容は、面接調査によって明らかにする。
参考	社会福祉および芸術支援に関する情報全般。

2-2. 作品のデータベース化・インターネット公開、交流サイト設置における取り組み

III 作品のインターネット公開

出典：

特定非営利活動法人日本バリアフリー協会 C-music <http://www.npojba.org/cmusic>

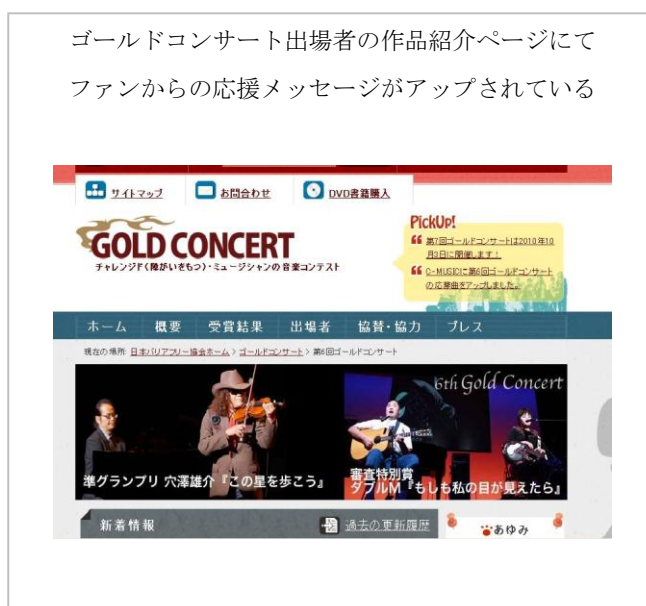
C-music とは、チャレンジド・ミュージシャンを支援する音楽ポータルサイト。ゴールドコンサートへの応募者のうち、作品の公開を希望する者のみ C-musician として登録。プロフィールおよび作品、イベント出演情報を公開している。

III 一般との交流サイト設置

出典：

特定非営利活動法人日本バリアフリー協会 ゴールドコンサート
<http://www.npojba.org/goldconcert>

C-music とは別に、ゴールドコンサート出場者の作品紹介ページを設置。ゴールドコンサートへ向けての一般のファンから、応援メッセージが寄せられる。



協会 HP 及び C-music へのアクセス数

	協会 HP	c-music
2009年4月	52,262	4,828
2009年5月	50,121	4,461
2009年6月	83,102	4,925
2009年7月	93,509	3,812
2009年8月	83,525	3,126
2009年9月	102,533	3,114
2009年10月	249,065	4,343
2009年11月	80,460	6,648
2009年12月	63,061	4,522
2010年1月	80,848	3,598
2010年2月	70,008	4,474
2010年3月1日～7日	15,884	785
計	1,024,378	48,636

※なお、インタビュー調査をしたゴールドコンサート出場者（家族も含む）15名のうち10名が利用し、利用者は音楽活動をする上で概ね有用なサイトとしている。この点においては調査不足なので、今後ポータルサイトの利用を促進させると同時にさらに調査を進めたい。

2-3. アクセシビリティにおける取り組み

山本 真也（第6回ゴールドコンサート実行委員）

Webを利用したチャレンジド・ミュージシャン支援のためのアクセシビリティ

はじめに

「Webのパワーはそのユニバーサル性にある。障がいに関係なく誰もがアクセスできることは、Webの根幹をなす要素の一つである。」というWeb創始者のティム・バーナーズ・リー氏の言葉のように、ユニバーサルなWebはチャレンジド（障がいを持つ）・ミュージシャンに活動できる場や機会を与える有効な手段の一つである。

一般社会において、チャレンジド・ミュージシャンが活動できる機会や場は、まだまだ少ない。ハード面ではバリアフリーのライブハウス等の活動できる場が少ない、ソフト面では真に音楽性を評価してもらえずお情けの感情を持たれてしまう、といった問題があげられる。

そうした状況の中、日本バリアフリー協会は、チャレンジド・ミュージシャンを支援するため、「e-music」と「ゴールドコンサート」の二つのサイトを提供している。この二つのサイトは、アクセシビリティとユーザビリティに積極的に対応している。その対応の概要や課題解決等について述べる。

オープンソースCMS「Plone」の採用

CMS(Content Management System)で管理するテンプレートさえアクセシブルにしておけば、専門的なスキルを持たない者がコンテンツを追加しても、アクセシビリティを維持できるという理由から、「e-music」と「ゴールドコンサート」の両サイトにCMSを導入した。

数あるCMSの中からオープンソースのPloneを選択した最大の理由は、ページのデザイン（レイアウトや色調など）に関する制約がなく、自由にカスタマイズできることである。

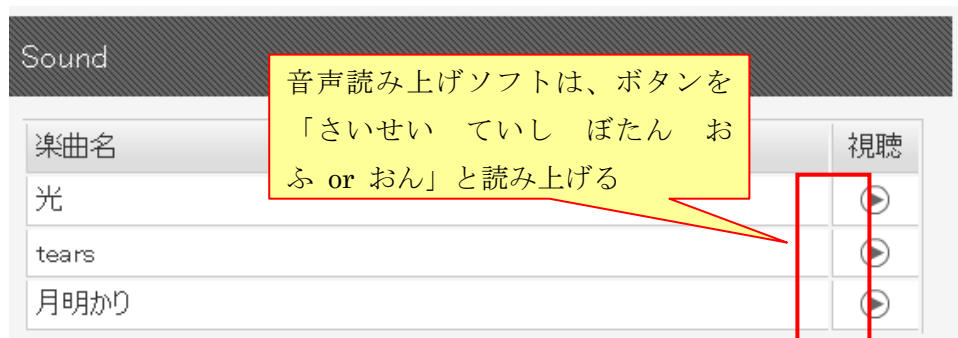
「c-music」サイトのアクセシビリティ

「アクセシビリティに対応させると格好悪いデザインになってしまう」のような固定観念を払拭させたいと、見栄えにもこだわり、シンプルかつ魅力的なデザイン[図1]を目指した。



[図1] c-music サイトのデザイン

最も苦勞したことは、音楽プレーヤのアクセシビリティ対応である。プレーヤのボタンをキーボードで操作できない、また音声読み上げソフトでボタンの位置や状態を確認できない課題があった。それらの課題に対処する為、オープンソースのプレーヤ「Plone4Artists」を採用し、そのソースコードに幾つかの修正を施した。その結果、音声読み上げソフトにプレーヤのボタンを「さいせい ていし ぼたん おふ or おん」と読み上げさせることが出来た。[図2]



[図2] プレーヤのボタンの音声読み上げ

「ゴールドコンサート」サイトのアクセシビリティ

ゴールドコンサート出演者への応援メッセージ書込み機能を実装させる際に、アクセシビリティを低下させる機種依存文字や日付表記の入力をどのようにして防ぐか、という課題があった。それらの課題に対処する為に、Plone にカスタマイズを施しアクセシビリティ・チェック機能を追加した。その追加した機能は、次の三点である。

- 日付表記チェック：スラッシュ区切りで日付が入力された際に警告メッセージを出力[図 3]
- 機種依存文字チェック：丸数字などの機種依存文字が入力された際に適正な文字に自動変換[図 4]
- 禁止ワードチェック：予め登録しておいたワードが入力された際に警告メッセージを出力



[図 3] 日付表記チェック



[図 4] 機種依存文字チェック

おわりに

「c-music」と「ゴールドコンサート」の両サイトは、Web アクセシビリティ JIS 規格 (JIS X 8341-3 2004) に従って構築した。しかし、両サイトのアクセシビリティの対応は、完了することなく、常に利用者の声に耳を傾けながら、スパイラルアップを繰り返している。そして、更なる利用者の拡大や利便性を向上させるため、平成 21 年度には、「c-music」と「ゴールドコンサート」の携帯サイトを構築し公開する。

事業3「コンテスト当日のインターネット生放送、一般の評価を分析」

3-1. 事業の概要

以下の計画をもって、事業を行った。

事業名	コンテスト当日のインターネット生放送、一般の評価を分析
事業テーマ	障がいを持つ音楽家への、ICTを利用した音楽活動支援
言葉の定義	<p>1 音楽活動 音楽家が、聴衆に対して作品を発表すること。</p> <p>2 ICT Information and Communication Technology (情報通信技術)。ネットワーク通信による情報・知識の共有を念頭に置く。</p> <p>3 支援 ⑤ 音楽家の自主的な音楽活動に対すること。(活動の宣伝など) ⑥ 音楽活動に付随すること。(作曲・演奏に対する支援など)</p> <p>4 作品 ⑤ 音楽家が作曲または作詞、または両方を手がける楽曲。 ⑥ 音楽家以外が作り、音楽家が演奏する楽曲。</p> <p>5 音楽家 ゴールドコンサートに応募または出場した、障がいを持つ人物。</p>
目的	この研究では、ゴールドコンサートにおいて音楽家および支援者および聴衆が、それぞれの立場においてどのような支援を必要としているかを考察することにより、作品が普及するために、または作品の評価が向上するために、どのような支援が有効かについて検討、選択するための基礎研究となることを目的とする。
背景	情報技術の分野で、操作性など、誰にとっても便利な道具になりつつある。
対象	第6回ゴールドコンサートを視聴した観客
事業の概要	<p>ゴールドコンサートの観客(来場者)に対して、音楽性、作品の完成度、音楽家の音楽家としての可能性について、アンケート調査を行い、回答を集計する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 音楽家に報告することによって、音楽活動への前向きな姿勢を引き出すきっかけにする。 事業における専門委員による研究会のための資料を作成することによって、音楽性、作品の完成度、音楽家の音楽家としての可能性について検討する材料にする。 <p>インターネット生放送の視聴者(非来場者)に対して、インターネット生放送のユーザビリティについて、インタビュー調査を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> 事業における専門委員、技術担当業者に報告することによって、音楽家支援の方法として、さらにユーザビリティを向上させるきっかけとする。
仮定	音楽家において、「障がいをもつ」ことを前提とすれば、ICTによる支援が、彼らの活動範囲の広がりという観点で、有効である。彼ら自身が必要とする支援の内容は、面接調査によって明らかにする。
参考	社会福祉および芸術支援に関する情報全般。

3-2. インターネット生放送における取り組み

III 生放送担当者の考察

出典：

『リブレ Vol.24 第6回ゴールドコンサート報告書』（2009.12、特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会）15頁、山本真也氏

コンサート開演 10 分もたたずに、舞台裏の生放送席は緊迫しました。いきなり、生放送の同時アクセス数が、今年の 2 倍（200 件）を超えたからです。その後もアクセス数は増え、閉演まで今年の 3 倍（300 件）の同時アクセスが続きました。

来場者 1000 人に加え、インターネットでも 300 人の方々にコンサートを生で楽しんでもらえたことをとても嬉しく思っています。

生放送の同時アクセス数は、2 年連続して 3 倍増となりました（一昨年 25 件、昨年 89 件、今年 310 件）。2 年連続 3 倍増の大きな要因は、昨年より Adobe Flash Media Server を採用したことです。

Adobe Flash Media Server の場合、Adobe Flash Player（インターネット利用者の 9 割以上がインストール済み）さえあれば、OS(Windows や Mac など)やブラウザ(Internet Explorer、Firefox、Safari など)に左右されることなく、生放送を観てもらうことができます。

一昨年までの生放送は、Windows OS に限定、かつ独自プレーヤをインストールしてもらう必要があり、またプレーヤがキーボードで操作できない等のアクセシビリティの問題も抱えていました。

今年の生放送では、多くの方々に快適に楽しく観てもらえるように幾つかの改善を行いました。

- ・映像のサイズを今年の 1.5 倍（横 640 X 縦 360）にし、その中に手話映像を追加
- ・Flash プレーヤのアクセシビリティ（キーボード操作など）向上
音声読み上げソフトや様々な支援技術からのアクセスが可能
- ・新たな試みとして投票機能を追加
生放送をご覧いただきながら、気に入った出場者への投票が可能
- ・ゴールドコンサートサイトのデザインをリニューアル
Web サイトでもコンサートの雰囲気を感じてもらえるデザイン

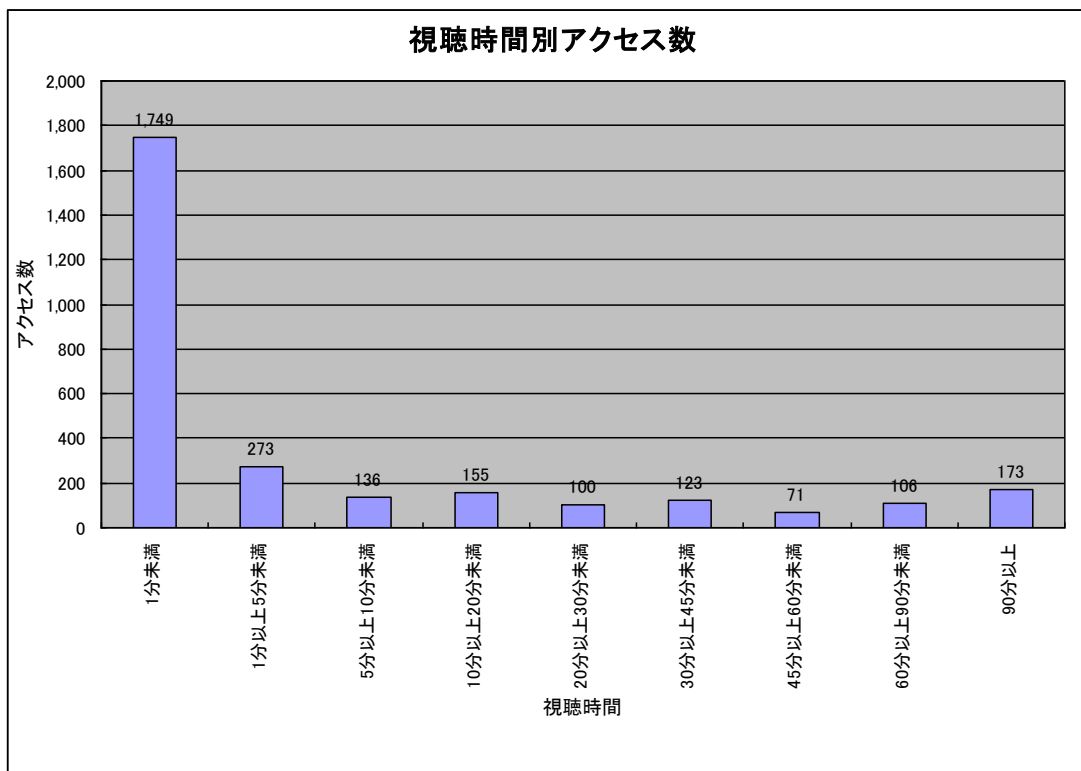
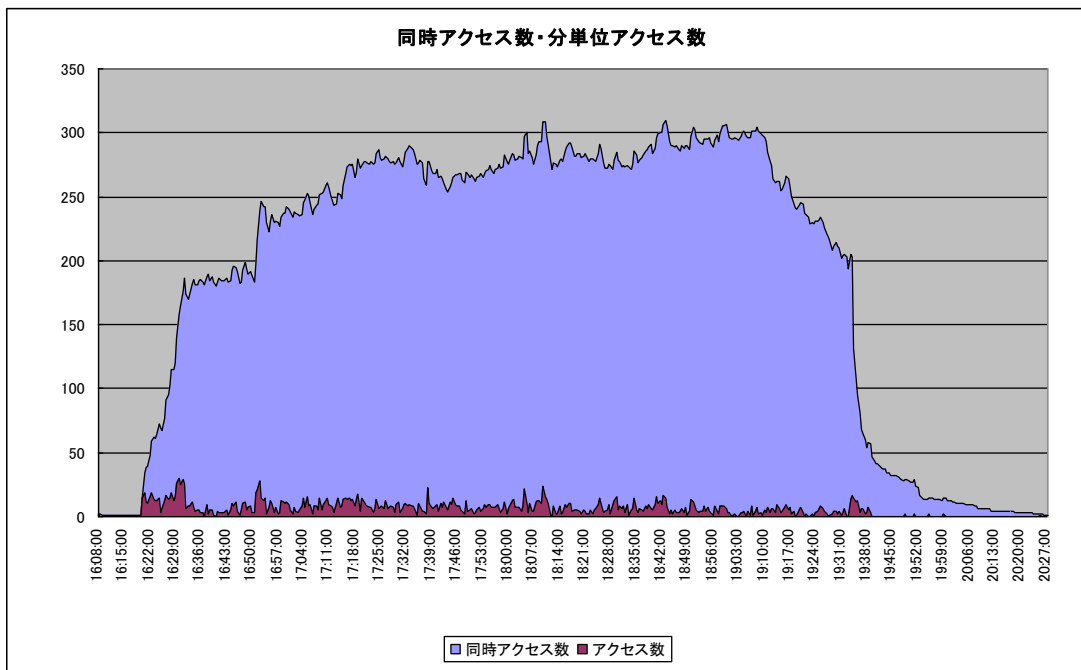
（後略）

3-3. インターネット生放送におけるアクセス分析

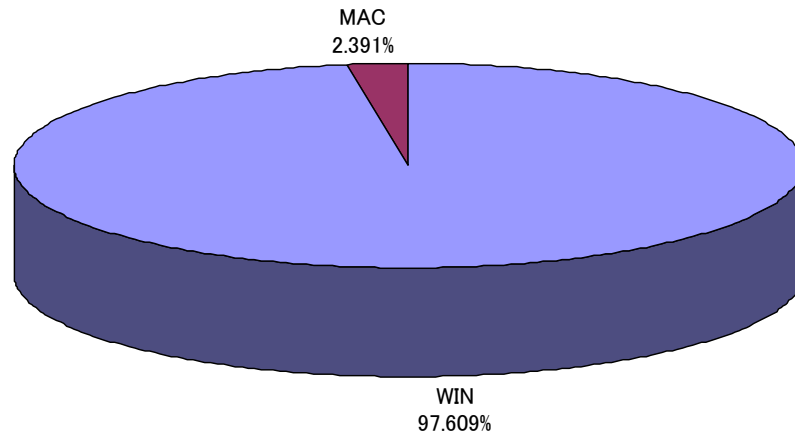
出典：

『第6回ゴールドコンサート 実行委員会議資料』

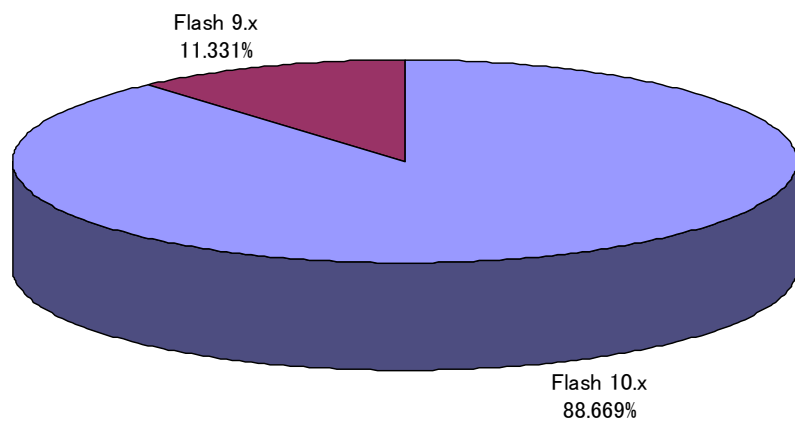
(2009.10、特定非営利活動法人日本バリアフリー協会)



OS別アクセス数



Player別アクセス数



3-4. コンテストの観客へのアンケート調査の方法

以下の計画をもって、調査を行った。

調査方法	調査対象者によるアンケート票記入（選択式、記述式含む） ただし、本人による記入が困難な場合は、家族などのノートテイカーによる代筆可
調査対象者	悉皆 第6回ゴールドコンサートへの観客全員 2000名。
有効回答数	544名
集計方法	選択式：質問事項ごとの単純集計 記述式：抜粋し、列挙
分析方法	選択式：質問事項ごとの有効回答数における、選択項目の割合（%表記） 記述式：発言内容の趣旨、または類似のキーワードによるカテゴライズ

3-4-1. アンケート調査票

III 原票

当てはまる項目の□に、vをつけてください。

1. 第6回ゴールドコンサートは、どこでお知りになりましたか？

- 当法人ホームページ
その他ホームページ（サイト名：_____）
ポスター・ちらし 会報誌「リブレ」 新聞・テレビ・ラジオ
出場者からの案内 その他知人の誘い
その他（_____）

2. ご来場くださったのは、何回目ですか？

- はじめて 2～4回目 5～6回目

3. 本日の出場者について、ご来場前に、知っていた人はいますか？

- 知っていた人がいる 知っていた人はいない

4. 知っていた人がいる方に、お伺いします。出場者のことは、どこでお知りになりましたか？

- 当法人ホームページ その他ホームページ（サイト名：_____）
会報誌「リブレ」 マスメディア 出場者ホームページ 知人を通して
その他（_____）

5. コンサートの内容に、ご満足いただけましたか？

- 満足した 満足しなかった どちらともいえない

6. コンサートをより良くしていくために、改善するべき点がありましたら、教えてください。

7. 出場者の中で、もっとよく知りたい音楽家は、いましたか？

- いた（グループ名：_____） いなかった

8. もっとよく知りたい音楽家がいた方にお伺いします。どのような方法で知りたいですか？

- パソコンサイト 携帯サイト 音楽CD 映像DVD 紙媒体
その他（_____）

9. あなたについてお聞かせください。

性別 / 男性 女性

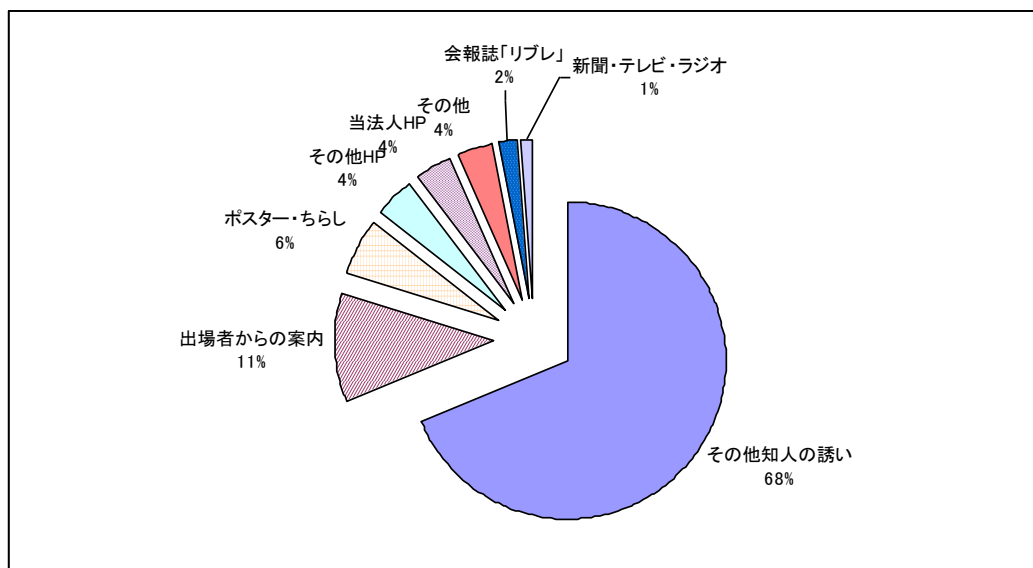
年齢 / 20歳以下 21～30歳 31～40歳 41～50歳 51～60歳 60歳以上

職業 / 社会人 無職 学生 その他（_____）

3-4-2. アンケート調査における聴取意見の分析結果

III 観客アンケート分析 (n=544)

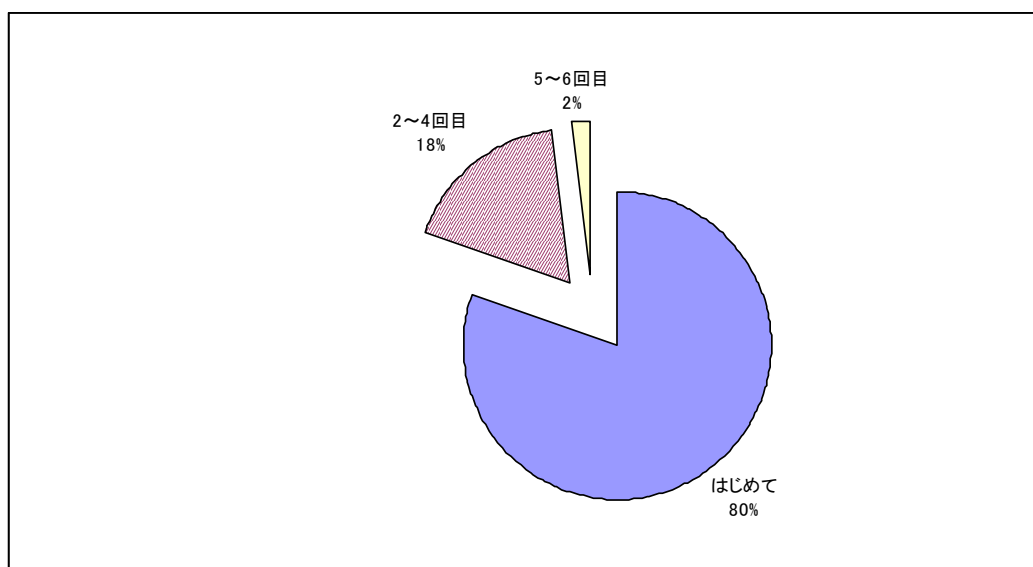
1. 第6回ゴールドコンサートは、どこでお知りになりましたか？ (n=528)



その他知人の誘いの内容として、学校のお知らせが大半を占めた。

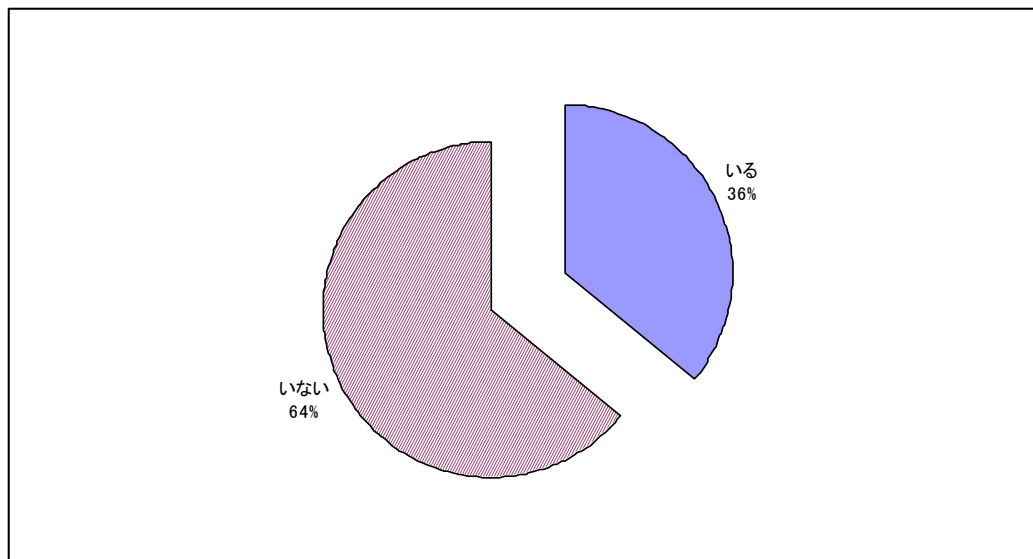
次質問への回答を考慮すれば、第6回ゴールドコンサートでは、特別支援学校、児童養護施設などの子どもたちの福祉施設に開催告知をしたことが理由ではないだろうか。

2. ご来場くださったのは、何回目ですか？ (n=539)



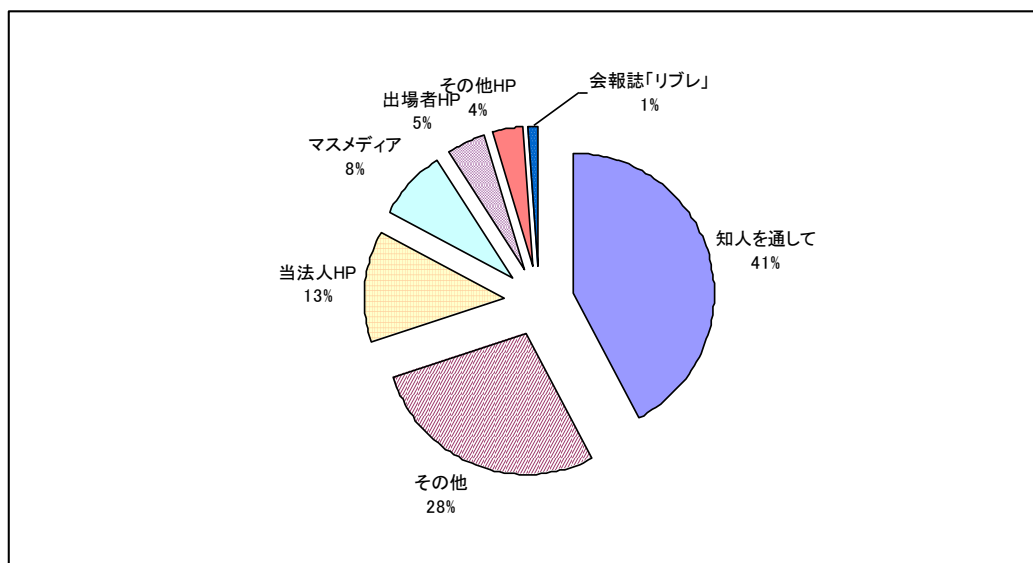
はじめての来場者が、80%だった。

3. 本日の出場者について、ご来場前に、知っていた人はいますか？ (n=529)



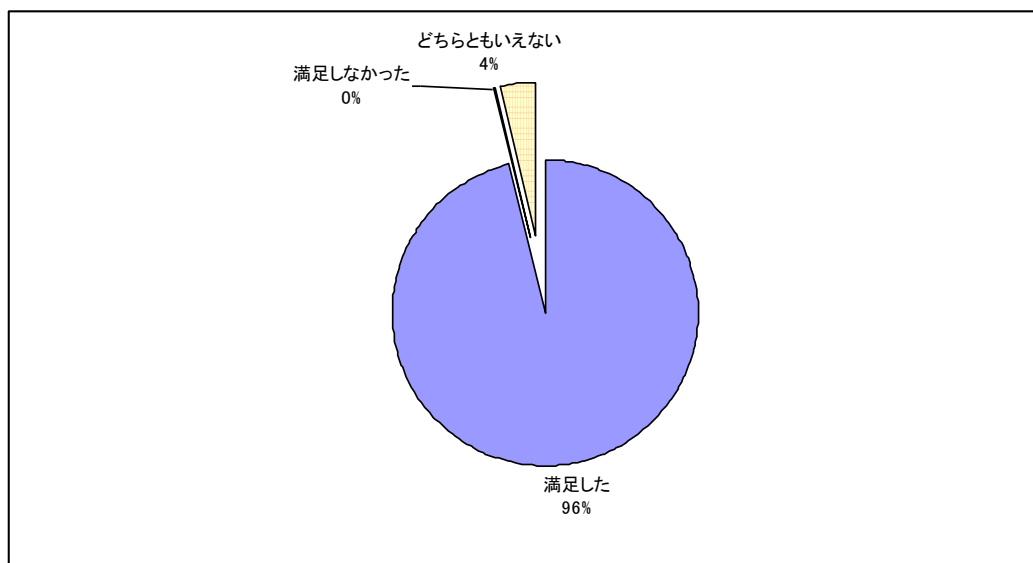
前質問への回答を考慮すれば、はじめての来場者以外は、運営者および出場者の知人・友人、家族であると推察できる。

4. 知っていた人がいる方に、お伺いします。出場者のことは、どこでお知りになりましたか？ (n=196)



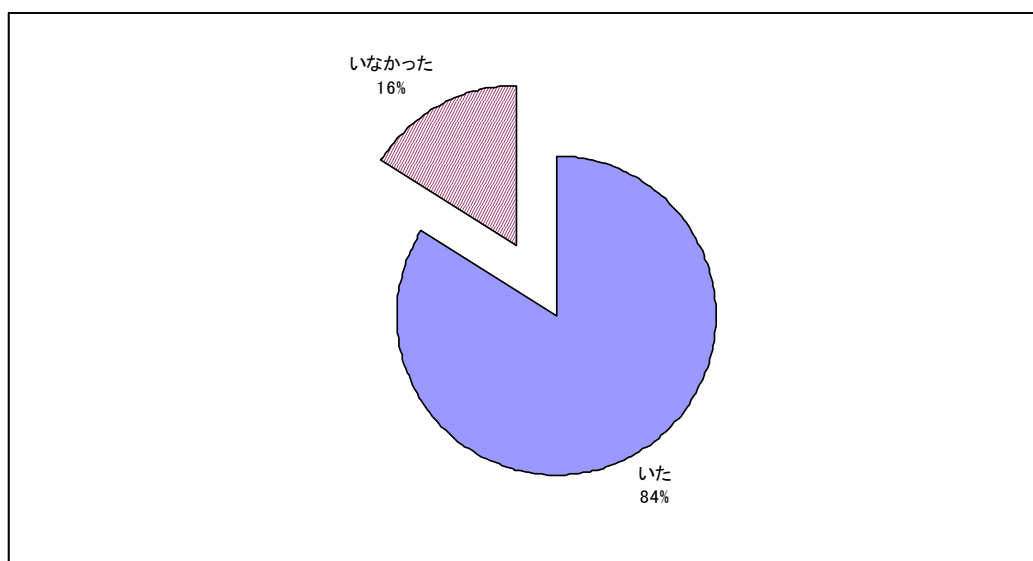
その他では、記入された内容のうち、ほぼ全てが昨年以前のゴールドコンサートだった。

5. コンサートの内容に、ご満足いただけましたか？ (n=503)



満足した者が、96%だった。約 2000 部の配布数のうち、27%の回答率であることから、アンケートを記入した者は、ゴールドコンサートに好意的な者であると推察できる。

6. 出場者の中で、もっとよく知りたい音楽家は、いましたか？ (n=406)



観客の皆さんに人気のあるグループランキング ※敬称略

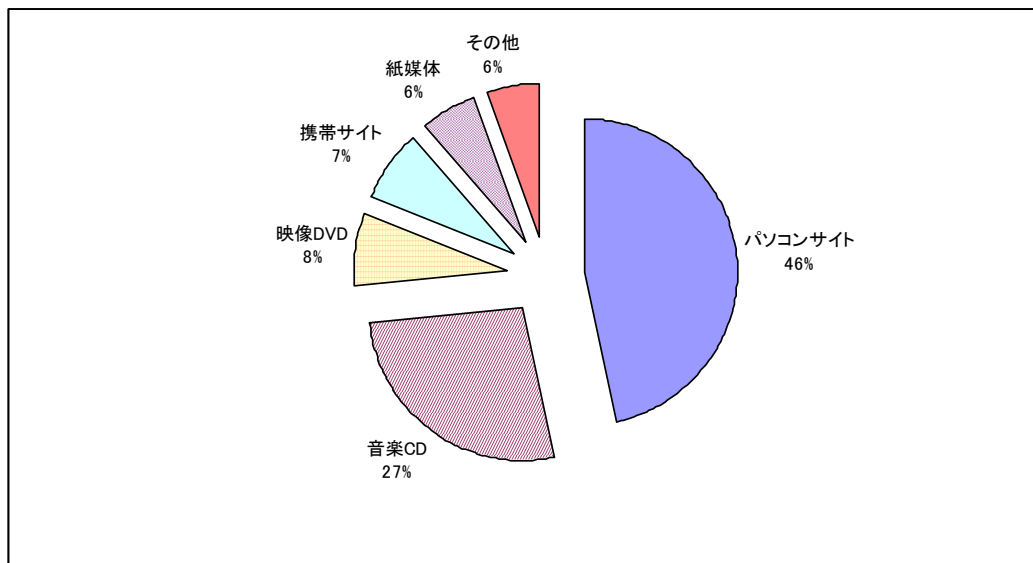
第1位：ダブル M (回答者数：38名)

第2位：出 (回答者数：36名)

第3位：真北聖子 (回答者数：33名)

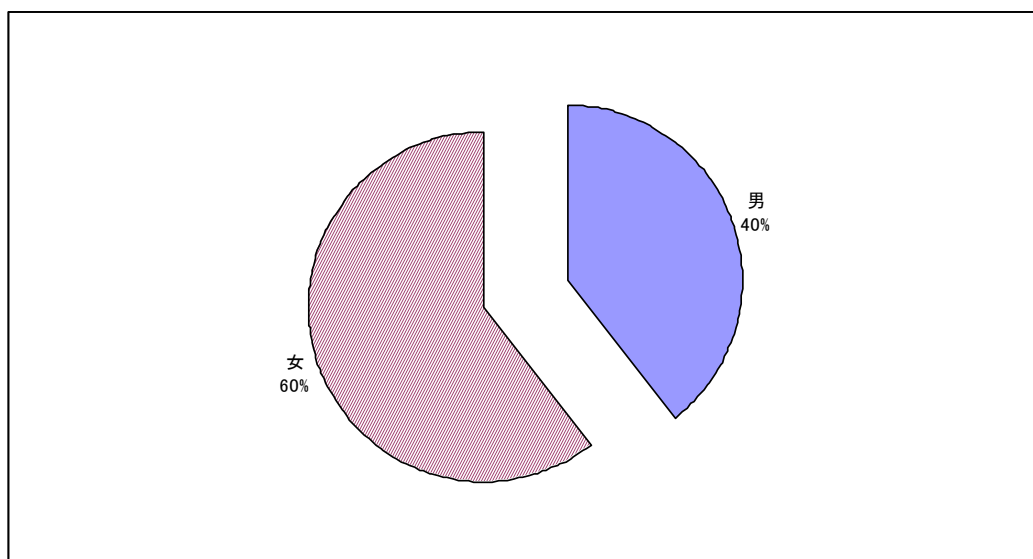
次質問への回答を考慮すれば、インターネットを利用して、積極的に音楽家を知りたいという意欲をもつ者が多いと推察できる。

7. もっとよく知りたい音楽家がいた方にお伺いします。どのような方法で知りたいですか？（複数可）（n=429）



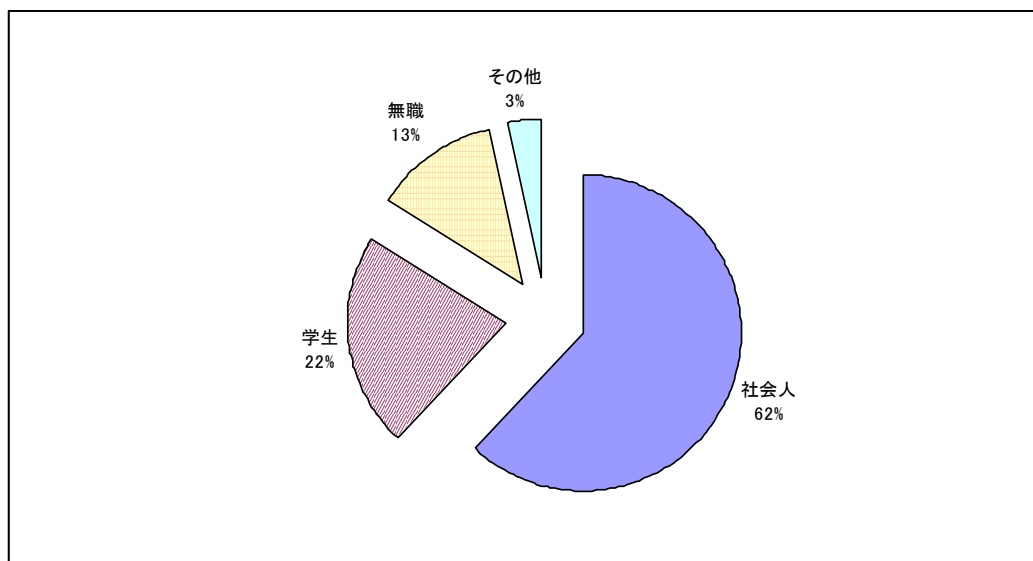
パソコンサイト、携帯サイトを合わせ、インターネット上にて知りたい者が、53%だった。音楽CD、映像DVDを合わせ、作品を鑑賞できるメディアにて知りたい者が、35%だった。同質問に対する支援者の集計結果と、ほぼ同じだった。

8. 回答者の性別（n=536）



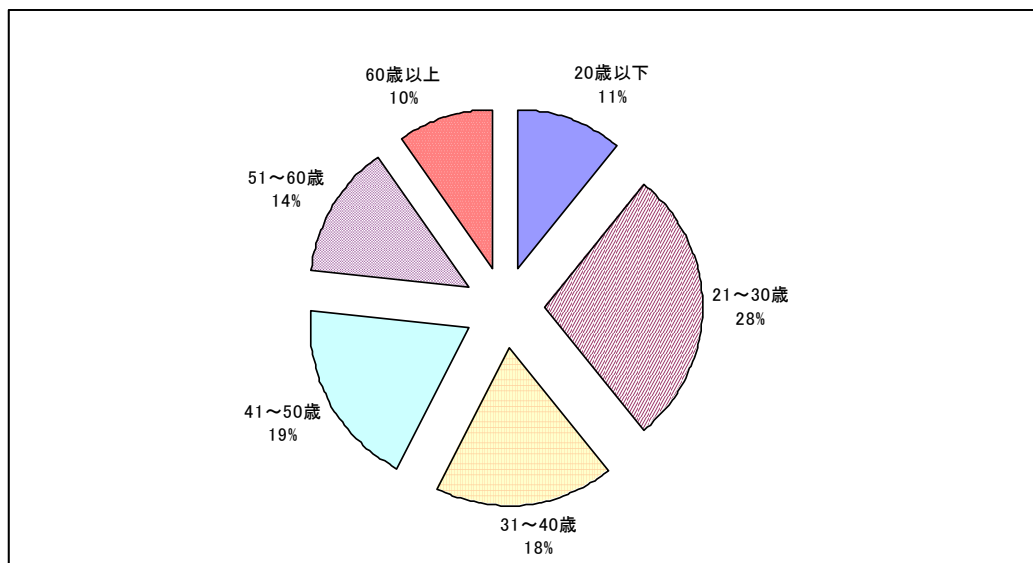
男性が40%、女性が60%だった。

9. 回答者の年齢層 (n=535)



社会人のうち、主婦と答えた者が 18 名だった。

10. 回答者の職業 (n=487)



21~30歳が、もっとも多かった。

マスメディアの年齢におけるカテゴライズを適用すれば、3層 (M、F 含む) が 43%だった。

11. 自由記述（抜粋）

1. ゴールドコンサート満足型

- ・ すごく良かったです。また来年も楽しみです。
- ・ 司会の女性の方が素敵でした。
- ・ インタビューの際は2人の通訳者が会話を表現できたらと思います。
- ・ 開催時間がもっと早い方が良い。帰宅が遅くなってしまうと翌日学校が大変というお子さんが多いので。子ども無料はありがたかったですが、地元で予選とかがあれば、ぜひ見に行きたいです。
- ・ 多くのボランティアスタッフが確保されていて、良かったと思います。
- ・ 音が大きくびっくりした。でも、それが生演奏ですごかった！！今井さんがすごく良かった。有名人（芸能人）が来たことが大きいと思った。口ずさむ人がいた。「今井さん」と言う人がいて、すごい人気だと思った。
- ・ 初めて拝見させていただきました。娘の友だちからのご招待を受け、感動いたしました。ありがとうございました。

2. ゴールドコンサート要望型

- ・ 字幕がもう少し大きかったら・・・と思いました。
- ・ 私は、言葉を聞き取るのが困難なので、歌詞を前日までに知りたいです。そうしないと、音楽と歌詞の両方を同時に楽しめないからです。歌と言葉を一緒に、感動したいです。
- ・ インタビューの際は2人の通訳者が会話を表現できたらと思います。
- ・ 開催時間がもっと早い方が良い。帰宅が遅くなってしまうと翌日学校が大変というお子さんが多いので。子ども無料はありがたかったですが、地元で予選とかがあれば、ぜひ見に行きたいです。
- ・ 2時間近く座りっぱなしはつらいので、途中で休憩を入れてほしい。
- ・ 積極的な告知がなされれば、より一層盛り上がるコンサートになると思います。

3. 障がい者サポート要望型

- ・ 支援学校の学生さんに、高校1～3年のうち1回はみんなに見に行ってもらうようにしたら、もっと勉強になると思いました。
- ・ 知的自閉症のお子様が自由に歩いて楽しめる、ゆとりの席があると良いと思います。

事業 4 「音楽家の支援についての教育・啓発用 DVD 制作」

4-1. 事業の概要

以下の計画をもって、事業を行った。

事業名	音楽家の支援についての教育・啓発用 DVD 制作
事業テーマ	障がいを持つ音楽家の支援についての教育・啓発
言葉の定義	1 音楽活動 音楽家が、聴衆に対して作品を発表すること。
	2 ICT Information and Communication Technology (情報通信技術)。ネットワーク通信による情報・知識の共有を念頭に置く。
	3 支援 ⑦ 音楽家の自主的な音楽活動に対すること。(活動の宣伝など) ⑧ 音楽活動に付随すること。(作曲・演奏に対する支援など)
	4 作品 ⑦ 音楽家が作曲または作詞、または両方を手がける楽曲。 ⑧ 音楽家以外が作り、音楽家が演奏する楽曲。
	5 音楽家 ゴールドコンサートに応募または出場した、障がいを持つ人物。
目的	この研究では、ゴールドコンサートにおいて音楽家および支援者および聴衆が、それぞれの立場においてどのような支援を必要としているかを考察することにより、作品が普及するために、または作品の評価が向上するために、どのような支援が有効かについて検討、選択するための基礎研究となることを目的とする。
背景	情報技術の分野で、操作性など、誰にとっても便利な道具になりつつある。
対象	第6回ゴールドコンサートにおいて音楽家支援をした、支援者(ボランティア)
事業の概要	ゴールドコンサートの支援者(ボランティア)に対して、音楽家支援への意欲についてアンケート調査を行い、回答を集計する。 ・ 音楽家、支援者に報告することによって、支援の需給をマッチングさせるきっかけにする。 ・ 事業における専門委員による研究会のための資料を作成することによって、障がいをもつ音楽家への支援について検討する材料にする。
仮定	音楽家において、「障がいをもつ」ことを前提とすれば、ICTによる支援が、彼らの活動範囲の広がりという観点で、有効である。彼ら自身が必要とする支援の内容は、面接調査によって明らかにする。
参考	社会福祉および芸術支援に関する情報全般。

4-2. 音楽家支援についての取り組み

専門委員のご意見1：ICT活用がひろげる障がいがある人の世界

畠山 卓朗（早稲田大学 人間科学学術院）

1. はじめに

近年、ICT（Information and Communication Technology、情報通信技術）の進歩には目覚ましいものがある。時間と空間を超えて、欲しい情報が地球の裏側からでも瞬時に入手することができる。このような大きな技術革命の流れの中、障がいがある人においてもICT活用に対して高い関心が集まっている。これまで寝たきり（実は寝かせきり）状態であった人が、ベッド上という限られた空間から世界の情報に触れたり、さらには情報発信すら可能になる。

ここでは、ICT活用が、障がいがある人にどのような可能性をもたらすのかについて述べてみたい。

2. ICT活用が重度障がいがある人の生活を変える

轟木敏秀さん（故人）は、鹿児島県にある病院に入院中の進行性筋ジストロフィー症の患者さんであった。10歳代では車いすや電動車いす上での座位姿勢が可能であったが、20歳代の半ば頃には一日の大半をベッド上で過ごすことを余儀なくされるようになった。

ある時、パソコン雑誌で紹介された入力装置を知ることとなった。当時、筆者らが開発していたスティックの先端でタブレットをポインティングすることで、パソコンのキーボードやマウスと同等の入力操作ができるようにするための特殊入力装置である。彼はこの入力装置を駆使し、パソコンをインターネットに接続することで、病院外にある様々な情報を入手し、今自分に必要な情報は何かを知るだけでなく、同じ病院に入院中の同僚患者さんに有用な情報を入手し伝える、つまり「病院一の情報通」とまで言われるようになった。

一方で、彼は生きた証として一冊の著作「光彩」を書き上げた。彼にとっての大きな楽しみの一つに当時流行はじめたデスクトップ・ミュージック（DTM、Desktop Music）があった。重い障がいがあるため、楽器を直接的に奏することは不可能であったが、パソコン画面上に表示された五線譜上にポインティングデバイスを駆使して音符を並べることはさほど難しいことではない。DTMが有する様々な機能を駆使し、楽器の音色を変えて楽しんだり、シンセサイザー風に編曲するなど、楽しみに大きな広がり生まれた。筆者が彼の病室を訪ねた折には、自慢げにその音楽を聴かせてくれたものであった。この瞬間、彼は障がいから解き放たれ、自由な空を飛ばたいっているようにさえ見えた。



特殊入力装置でパソコン操作する轟木さん

3. 関係性で決まる「障がい」

大学生をつかまえて障がいがある人をどう捉えているのか聞いてみることもある。障がいがある人は、自分で出来ることはごくわずかである、常にサポートを求めている、などのシンプルな答えが返ってくる。では、あなたの50年後はどうだろうかと質問してみる。視力も、聴力も、そして歩行能力も衰えが見られるだろう、人は誰しも年齢を重ねれば何らかの障がいが生じていて不思議ではないということに学生が自ら気づく。大切なことは、「障がい」は決して他人事ではなく、意外と身近なテーマであるということに自らが気づくことである。

確かに、障がいがあると出来ないことは数多くあるが、それを補う技術 (Assistive Technology) を利用すれば、その時点で「障がい」はやがて消え去っていく。大切なのは、障がいがあるかどうかではなく、障がい乗り越えて、その先に、何をしたいのか、何を表現したいのかである。

筆者は、重い障がいを持ちながら、創造的で輝いて生きる多くの人に出会った。そこには、「障がい者と健常者」の関係では決してなく、「ひとりの人と私」との関係性が常にあった。

ICT 活用は障がいがある人の活動の可能性を大きくひろげる可能性を有している。今必要なことは、障がいがある人を見守る周辺の人々の意識の変革ではないだろうか。

著者ホームページ : <http://homepage2.nifty.com/htakuro>

専門委員のご意見2：「ゴールドコンサートを通じて見た障害者ミュージシャン」

車イスの音楽ライター（ジャズ） 工藤 由美

2006年の第3回から連続4年、ゴールドコンサートの審査員を務めている。その中で一番感じるのは、レベルが毎年着実に向上しているということである。とりわけここ1, 2年、このコンテスト自体が、金を払っても見るに値する上質のエンタテインメントになっていることを強く感じる。

その成功の理由として、二つの要因が考えられる。一つは、言うまでもなく、出場者の音楽的レベルの高さだ。もう一つは、このコンテストが貴重な自己表現の場になっていることである。

当該コンテストには、「プロとして通用するレベルかどうか」という明確な基準があり、「重い障害があるにもかかわらず頑張っている」といったことは考慮されない。

この審査基準を厳守してきたことで、一つ発見があった。それは音楽をやる上において視覚障害は何らハンディにならず、場合によっては有利に働くと思えることだった。毎年、本選に進む視覚障害者の多さ、成績上位者に占める圧倒的な多さからもそのことは明らかである(視覚障害者への偏りが、コンテスト自体の運営をむずかしくしていることもあるのだが)。

先日、それを裏付けるような話を聞いた。ジャズの帝王、マイルス・デイヴィスが、あるジャズマンを「あいつは視覚障がい者みたいにすごいな」と言って絶賛したというのである。実際、ジャズ、クラシックを問わず、世界的に活躍する音楽家の中に視覚障害者は少なくない。バン・クライバーン国際コンクールで優勝した辻井君、スティーヴィー・ワンダー、レイ・チャールズ・・・リストはどこまでも続く。天才マイルスの慧眼は、音楽をやる上で、視覚障害は何らハンディにならないばかりか、それゆえに研ぎ澄まされる音楽的感性と集中力を見抜き、むしろ羨望のまなざしで見ていることを、先の発言が示している。

プロの音楽家になり、それで自立をはかることは、障害者であろうと健常者であろうと、大変困難であるが、その層の厚さとレベルの高さから、最初にゴールドコンサートを経て世に出る障害者ミュージシャンは、恐らく視覚障害者になるだろう。

一方で、「見に来てよかった」と大きな感動を与えてくれるのは、必ずしも音楽的なレベルの高いミュージシャンとは限らない。ベッドに寝たきりの筋ジストロフィーの青年が奏でる電子音楽だったり、自閉症の青年が奏でるピアノの即興演奏だったり、韓国からのエネルギッシュなパフォーマンスだったり、命の輝きや躍動感に圧倒されることがしばしばだ。そこには障害も何もなく、飾らない素直な自己表現があり、音楽の純粋な喜びがあった。そのことに心揺さぶられるのだ。また、障害者としての経験や思いを一つの個性へと昇華することで、新しい視点を提供する作品も、強い印象を残した。

多くの障害者が音楽と出合うことで、生きる喜びや希望を見出していることだろう。どこかの時点で聞き手から演奏者に転換することで、音楽は貴重な自己表現、生きる力になる。その意味で、音楽は自己実現に繋がり、自己表現の場に限られる障害者ミュージシャンには、ゴールドコンサートの存在自体がモチベーションになっていることだろう。

今後、障害者ミュージシャンに期待したいことは、何よりもその人の「声」である。音楽レベルは、人に聞いてもらう以上、高いにこしたことはないが、例えばその人の障害を個性のレベルまで昇華し、新しい視点を提供するような作品は、訴える力が強いであろう。その点、第6回から応募対象をオリジナル作品に限定したことが、コンテスト自体を一段と魅力あるものにしたと言える。

ゴールドコンサートからプロの障害者ミュージシャンが誕生すれば、一気に裾野が広がり、一般の認知も高まるだろう。方法論としてそれは極めて正しいが、このコンテストを通して、一人でも多くの障害者が音楽の喜び、さらには音楽を通して自己表現することの素晴らしさを伝えていくことが、何よりも大切だと考える。

専門委員のご意見 3

吉岡 正晴（音楽評論家）

継続。

日本バリアフリー協会が主催する「チャレンジド・ミュージシャン・コンテスト」はすでに 6 回を数えている。僕も 2007 年の第 4 回から審査員を仰せつかっているが、参加者のレベルが年々上がってきているような気がしている。やはり、こうしたコンテストは、最低でも 10 年くらいやってみて、その中から注目されるアーティストなり、楽曲、あるいは、何かの現象が生み出されるようになればいいと思う。継続していくことがもっとも重要だ。そして、毎年、このコンテストを目標にするチャレンジド・ミュージシャンたちがどんどん増えればいいと思う。

審査員は、毎年各参加アーティストに対して 10 点満点で評価をする。ものすごくよいものであれば、10 点、あまり評価に値しないものがあれば、どんどん減点していく。もっとも、この国際フォーラムの決勝ステージにあがってきているアーティストたちは、みな厳しい予選を勝ち抜いてきているので、かなりのレベルに達している人たちばかりなので、0 点などということはありません。

心がけ。

僕が審査員の一員と心がけているのは、その楽曲、パフォーマンス自体をありのままに評価するということだ。それが仮になんらかの障害を持っていない人がやっていたらどうか、障害のある、なしにかかわらず、その楽曲がいいか、歌詞が心を打つか、メロディーが覚えやすいか、そして、その生のパフォーマンスにしっかりと魂がこもっているか、そんなところを見て判断する。

もちろん、そうは言っても、なんらかのハンディがあることで、よくそれだけのハンディがあっても、これだけのパフォーマンスができますね、という感情的な加点はしてしまうのが、ちょっとした悩みだ。

では、ここで高得点を獲得したアーティストたちが、すぐにどこかのメジャー・レーベルからデビューに至るかどうかという、これはまた別問題だ。もちろん、ある程度のレベルを超えていれば、レコード会社も契約に乗り出すだろう。けっこういい線まできているかもしれないが、あとちょっとした一線を越えることができていないのかもしれない。

次世代。

今後この「ゴールドコンサート」にチャレンジする人たちは、日々たくさんいい音楽を浴びるように聴いて、それをできるだけたくさん自分の栄養として、自身の音楽的素養にし、それを自分のものにして生み出して欲しい。

これまでにアメリカで活躍しているチャレンジド・ミュージシャンとしては、スティーヴィー・ワンダー、レイ・チャールズ、ホセ・フェリシアーノ、ダイアン・シュアー、最近ではラウル・ミドンなどがいるが、そうしたアーティストたちは皆 1 日 24 時間音楽漬けになっているような生活をしている。実は成功するアーティストは、チャレンジド・アーティストだけでなく、一般のアーティストもそうなのだ。どれだけ音楽に漬かり、音楽を自分の血と肉にできるか、それに成否がかかっている。日本からも、次世代の木下航志くん、あるいは、スティーヴィー・ワンダーのような存在のアーティストの登場を願ってやまない。そして、そうしたアーティストが、この「ゴールドコンサート」から出てきたら、もっともっと素晴らしい。

[February 20, 2010 : Yoshioka Masaharu - The Soul Searcher: An Early Bird Note]

4-3. 支援者へのアンケート調査の方法

以下の計画をもって、研究を行った。

調査方法	調査対象者によるアンケート票記入（選択式、記述式含む） ただし、本人による記入が困難な場合は、家族などのノートテイカーによる代筆可
調査対象者	悉皆 第6回ゴールドコンサート運営にボランティアとして参加した者 250名。
有効回答数	69名
集計方法	選択式：質問事項ごとの単純集計 記述式：抜粋し、列挙
分析方法	選択式：質問事項ごとの有効回答数における、選択項目の割合（%表記） 記述式：発言内容の趣旨、または類似のキーワードによるカテゴライズ

4-3-1. アンケート調査票

III 原票

当てはまる項目の□に、v をつけてください。

1. ゴールドコンサートのボランティア募集は、どこでお知りになりましたか？

当法人ホームページ

その他ホームページ（サイト名： _____）

Yahoo ボランティア 東京ボランティア NHK ボランティアネット

ポスター・ちらし 会報誌「リブレ」 新聞・テレビ・ラジオ 出場者からの案内

その他知人の誘い

その他（ _____ ）

2. ゴールドコンサートのボランティアに参加したいと思ったきっかけは、何ですか？

ゴールドコンサートの趣旨に賛同した チャレンジド・ミュージシャンを支援したいと思った

音楽イベントの運営に興味があった ボランティア活動に興味があった 知人から誘われた

その他（ _____ ）

3. ご担当くださった役割分担（持ち場）は、何でしたか？

--

4. ボランティアに参加して、いかがでしたか？

大変満足した 満足した 普通 満足しなかった 全く満足しなかった

5. 役割分担（持ち場）を担当して、どのような感想を持ちましたか？

--

6. 来年以降も、ボランティアに参加したいと思いますか？

参加したい 参加したくない 予定次第で参加したい

7. ゴールドコンサート以外に、チャレンジド・ミュージシャンの音楽支援に関して、今後やってみたいボランティアは、ありますか？

ある ない どちらともいえない

8. やってみたいボランティアがある方に、お伺いします。何をやってみたいですか？

- 音楽紹介サイトの制作・運営 関連コンサートの運営 作詞・作曲・演奏のサポート
チャレンジド・ミュージシャンのライブおよびCD制作などの付き合い
その他 ()

9. 出場者の中で、もっとよく知りたい音楽家は、いましたか？

- いた (グループ名:) いなかった

10. もっとよく知りたい音楽家がいた方に、お伺いします。どのような方法で知りたいですか？

- パソコンサイト 携帯サイト 音楽CD 映像DVD 紙媒体
その他 ()

11. コンサートをより良くしていくために、改善するべき点がありましたら、教えてください。

12. あなたについてお聞かせください。

性別 / 男性 女性

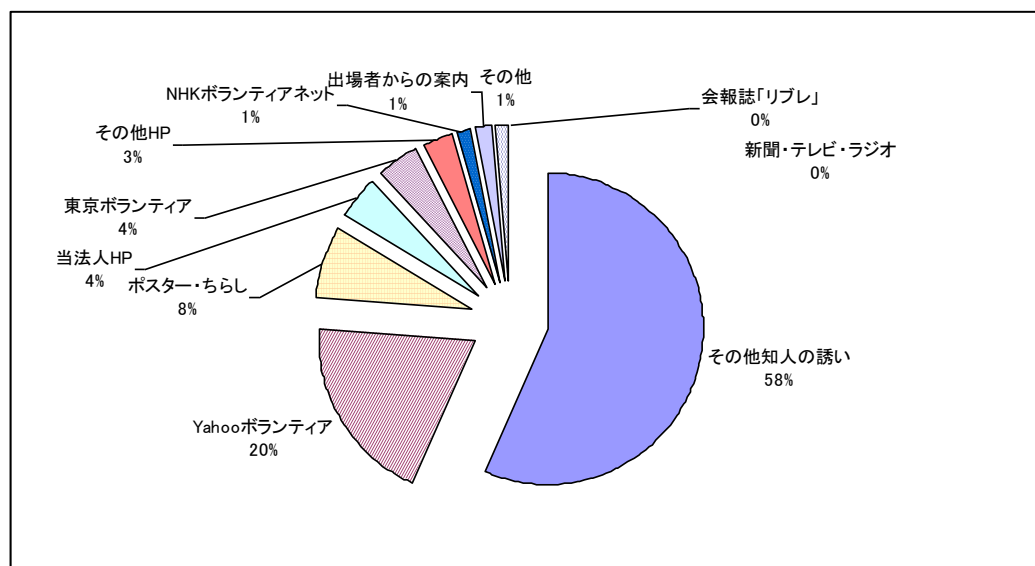
年齢 / 20歳以下 21～30歳 31～40歳 41～50歳 51～60歳 60歳以上

職業 / 社会人 無職 学生 その他 ()

4-3-2. アンケート調査における聴取意見の分析結果

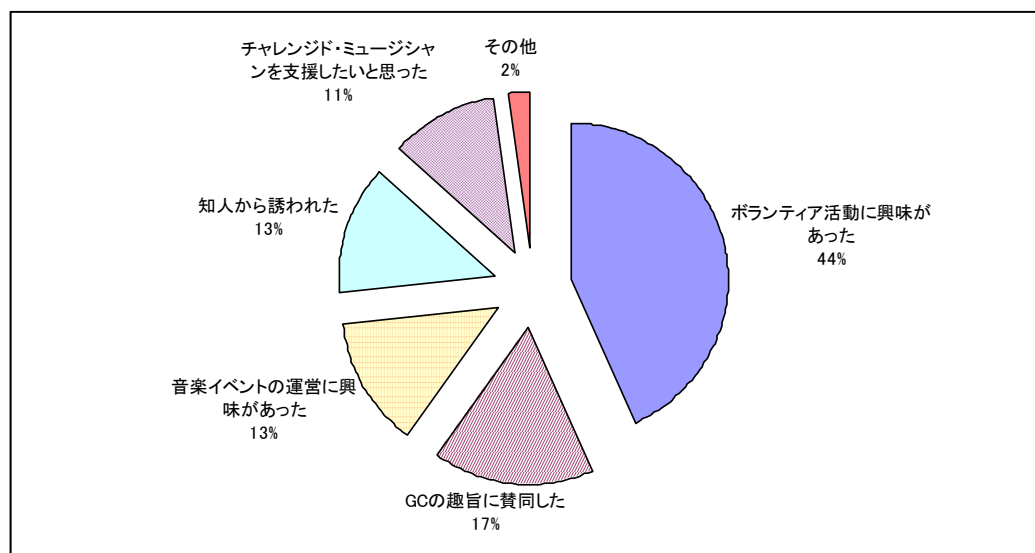
III ボランティアアンケート分析 (n=69)

1. ゴールドコンサートのボランティア募集は、どこでお知りになりましたか？ (n=67)



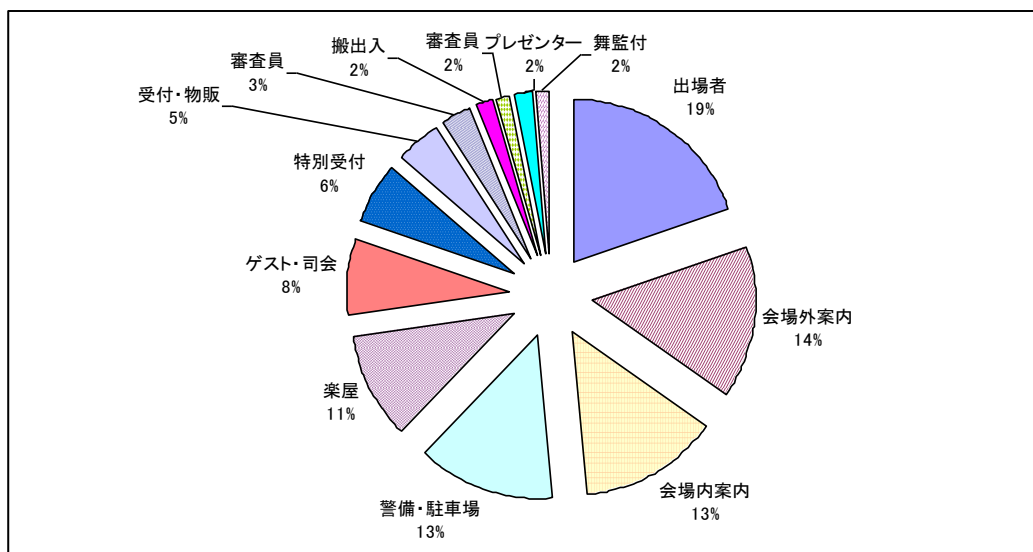
ボランティア全体で、企業の福祉活動による参加者が多かった。このため、「その他知人の誘い」と答えた者の内容が、会社の広報が大半を占めた。また、出場者の知人・友人が見られた。

2. ゴールドコンサートのボランティアに参加したいと思ったきっかけは、何ですか？ (n=90)



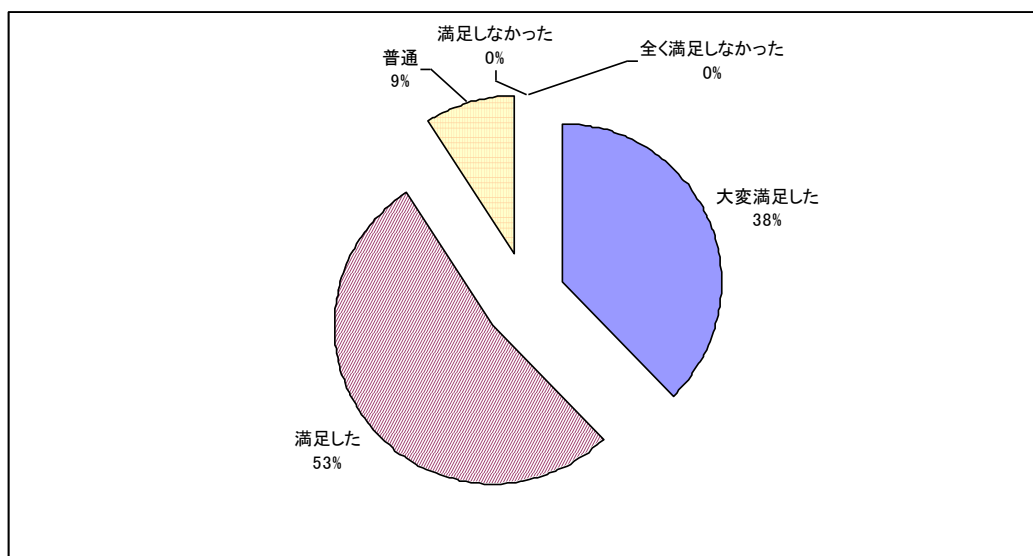
一般：「ボランティア活動に興味があった」「音楽イベントの運営に興味があった」、ゴールドコンサート関連：「GCの趣旨に賛同した」「チャレンジド・ミュージシャンを支援したいと思った」にカテゴライズすれば、一般：57%、ゴールドコンサート関連：28%だった。

3. ご担当くださった役割分担（持ち場）は、何でしたか？（n=66）



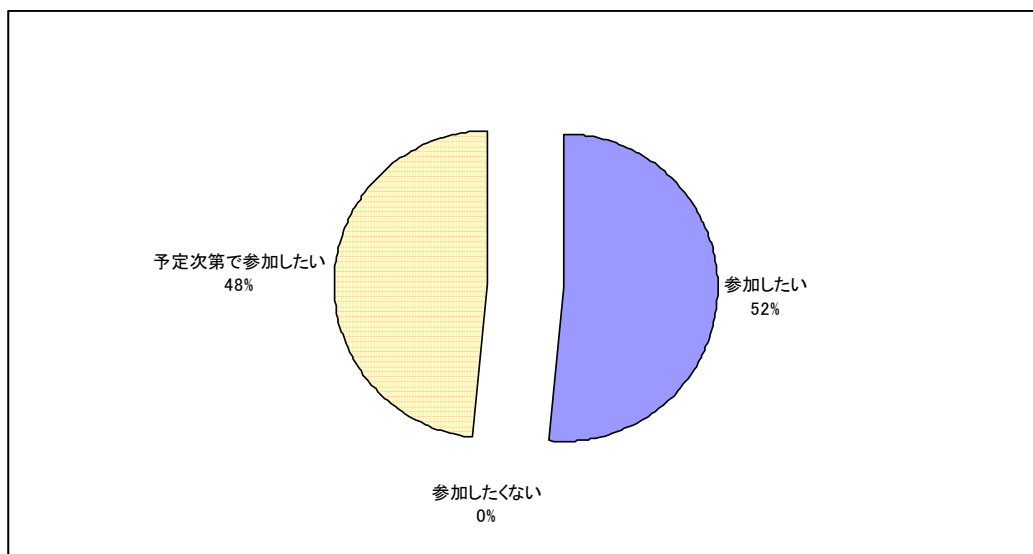
観客および出場者の、人に接する役割の者が、多かった。

4. ボランティアに参加して、いかがでしたか？（n=66）



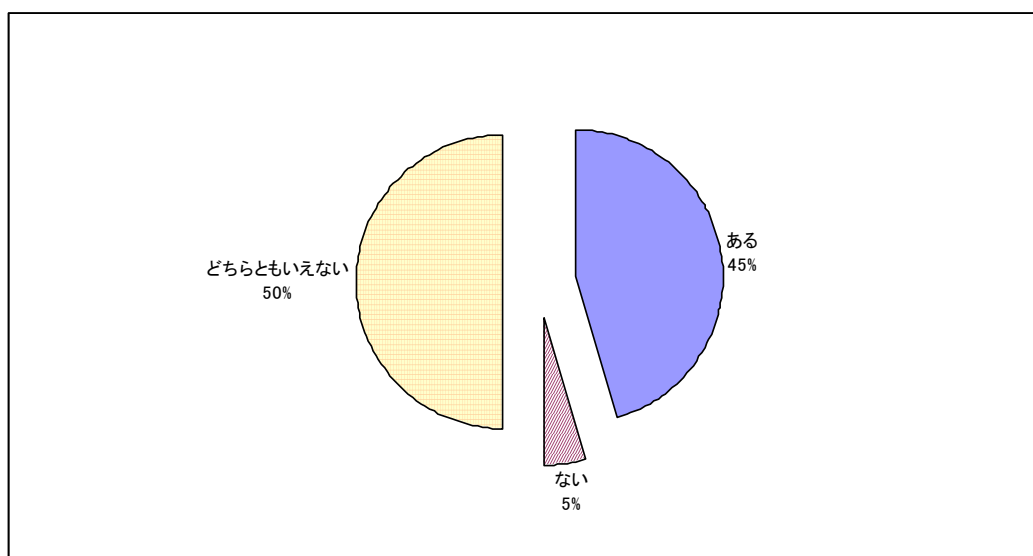
「大変満足した」「満足した」を合わせ、音楽家支援に満足している者が、91%だった。

5. 来年以降も、ボランティアに参加したいと思いますか？ (n=64)



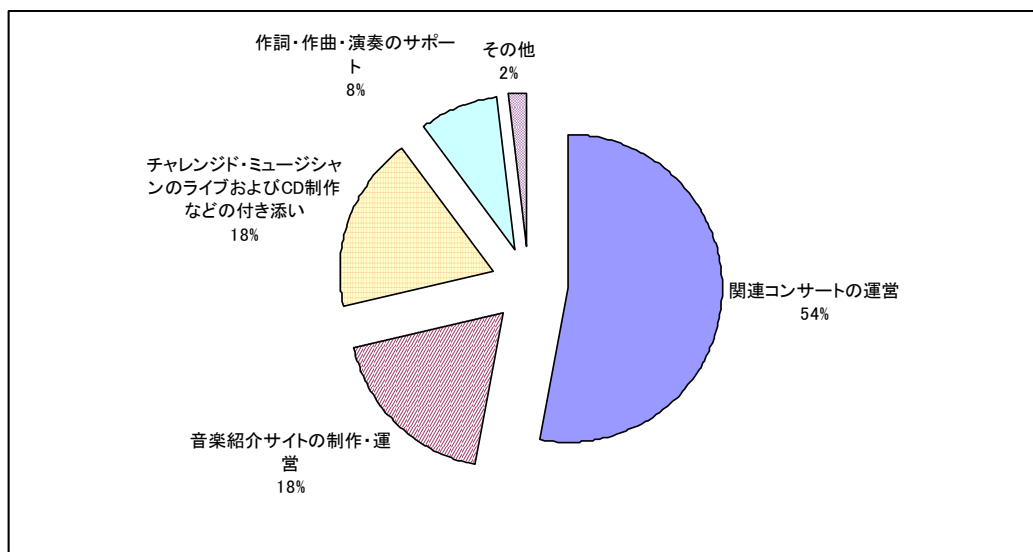
「参加したい」「予定次第で参加したい」を合わせ、参加への意欲をもつ者が、100%だった。

6. ゴールドコンサート以外に、チャレンジド・ミュージシャンの音楽支援に関して、今後やってみたいボランティアは、ありますか？ (n=66)



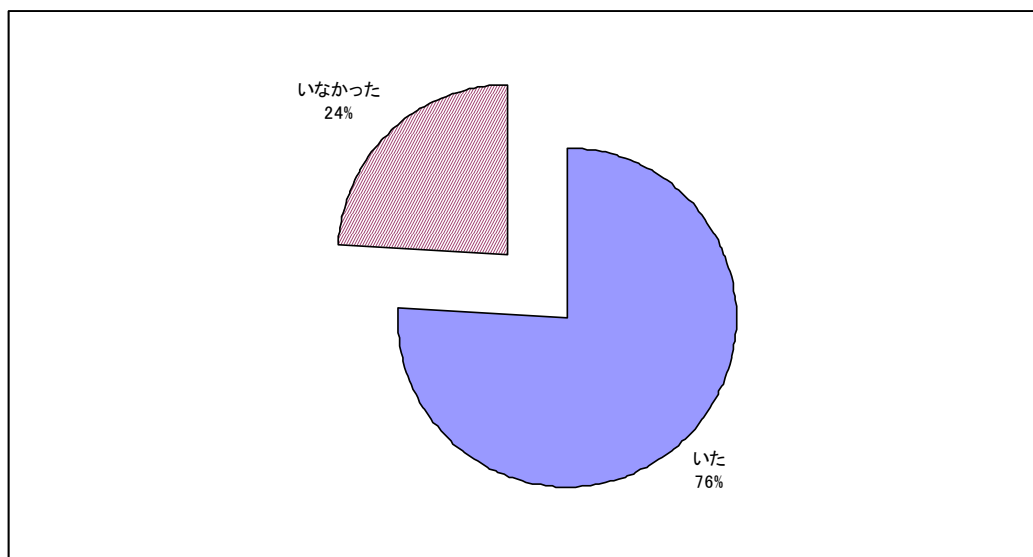
項目「どちらともいえない」の追記として、自分にはどんなことができるのか？という疑問が見られた。これを、「なんとなく、ある」と解釈すれば、音楽支援に意欲をもつ者は、45%よりも増えるのではないだろうか。

7. やってみたいボランティアがある方に、お伺いします。何をやってみたいですか？ (n=49)



音楽家への間接支援：「関連コンサートの運営」「音楽紹介サイトの制作・運営」、音楽家への直接支援：「ライブおよび CD 制作などの付き添い」「作詞・作曲・演奏のサポート」とカテゴリーライズすれば、間接支援：72%、直接支援：26%だった。

8. 出場者の中で、もっとよく知りたい音楽家は、いましたか？ (n=54)



観客の皆さんに人気のあるグループランキング ※敬称略

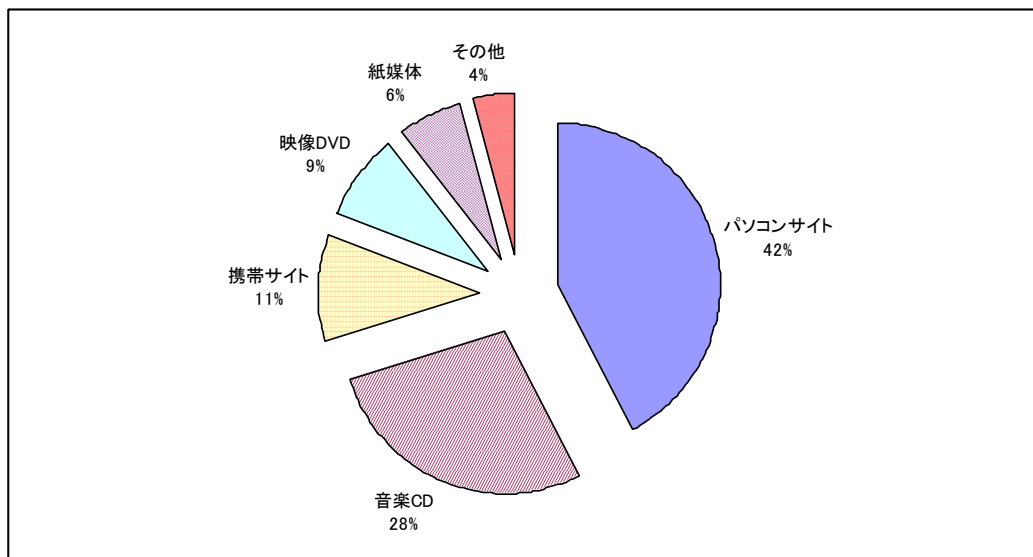
第1位：出（回答者数：9名）

第2位：スケッチブック（回答者数：6名）

第3位：ダブルM（回答者数：4名）

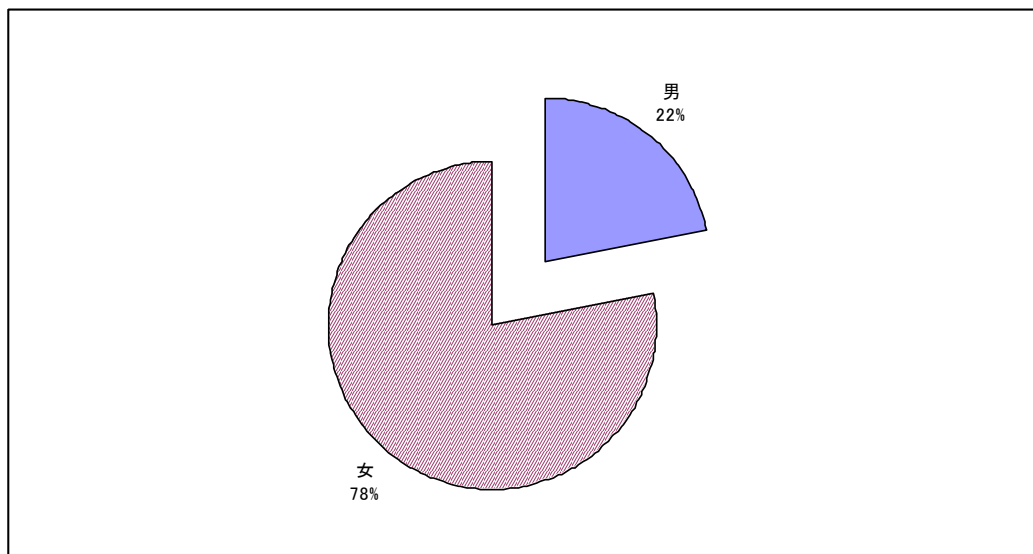
次質問の回答を考慮すれば、インターネットを利用して、積極的に音楽家を知りたいという意欲をもつ者が多いと推察できる。

9. もっとよく知りたい音楽家がいた方に、お伺いします。どのような方法で知りたいですか？
(n=47)



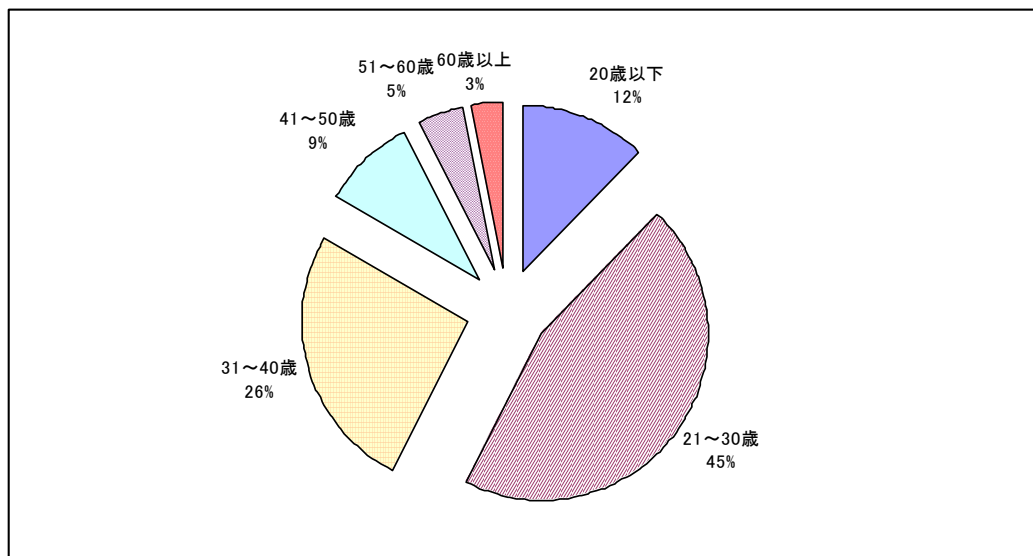
パソコンサイト、携帯サイトを合わせ、インターネット上にて知りたい者が、53%だった。音楽CD、映像DVDを合わせ、作品を鑑賞できるメディアにて知りたい者が、37%だった。同質問に対する観客の集計結果と、ほぼ同じだった。

10. 回答者の性別 (n=68)



音楽家、観客では男性の割合が多いのに対し、支援者は女性が78%を占めた。

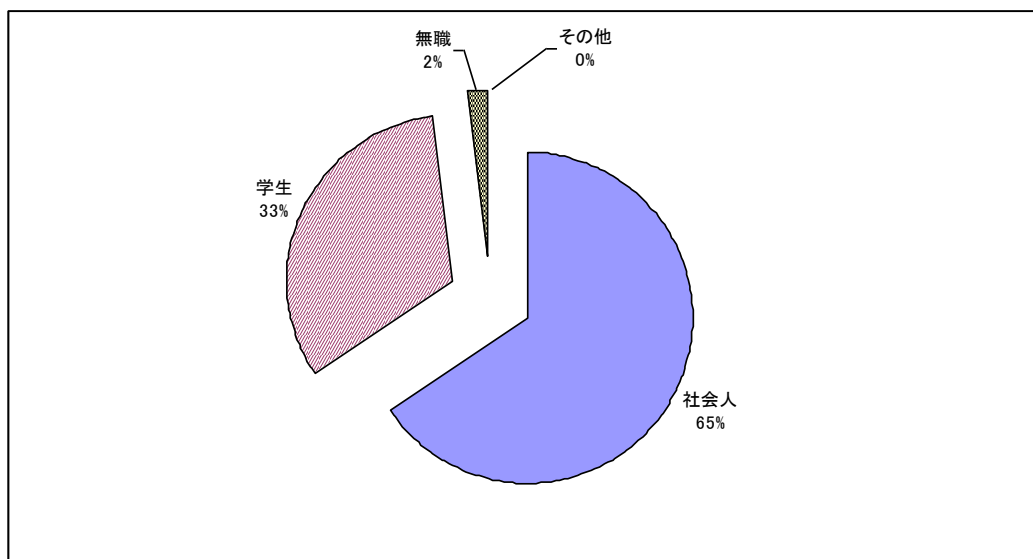
11. 回答者の年齢層 (n=66)



21～30歳が、もっとも多かった。

マスメディアの年齢におけるカテゴリズを適用すれば、1・2層（M、F含む）が73%だった。

12. 回答者の職業 (n=55)



ボランティア全体に占める割合として、企業の福祉活動による参加者が多いことから、社会人の内容として、会社員が多いと推察する。

また、学生が33%を占めた。

13. 自由記述（抜粋）

1. ボランティア満足型

- ・ お客さまの誘導など、お役に立てたことを実感でき、とても嬉しく思います。仕事（会社）では得られない喜びを感じ、かえってありがたく思います。
- ・ 道や建物を聞かれることも多くて、少しとまどいました。でも、少しでもお役に立ててよかったです。
- ・ 持ち場以外にもやることがあるので、自分で仕事を見つけました。いろいろな会社の方とお話もでき、良かったです。

2. ボランティア反省型

- ・ スタッフ同士の連絡が大事だということと、時間を守らないと他の方に迷惑がかかるということを実感しました。
- ・ ボランティア活動そのものが今回、初めてでした。初めての私ですが、出場される皆さんは、私を頼りにしていらっしゃるので、しっかり役目を果たさなければと思いました。はじめの一步でしたが、次のボランティア活動の良い機会となりました。
- ・ 大勢の方々の努力と協力によって成り立っていると思いました。

3. 問題提起型

- ・ 自由席は混乱するため、全て指定にした方が良い。2階に来られた方が、2階に席がなく、3階へ移動していただいた方が多くいた。
- ・ チーフが分かりやすく指示をして、自信をもってやってくれれば、ボランティアも安心して役目を果たせると思う。

研 究 結 果 の 活 用

問題解決への取り組み

特定非営利活動法人日本バリアフリー協会

代表理事 貝谷嘉洋

(本事業主任研究者)

概要

本事業において、障がいをもつ音楽家の可能性を広げ、その作品の評価向上に向けての礎を築くことができた。また、音楽という媒体を利用することによりノーマライゼーション社会の実現に大きく貢献できる可能性を見出した。

なお、ICT (Information and Communication Technology 情報通信技術) を利用した音楽家支援についての有効性についてだが、彼らの音楽活動のスタイルによって大きなばらつきがあったので、今後さらなる研究が必要だ。

最も大きな成果は、障がいをもつ音楽家の面接調査を行うことにより、音楽活動の内容やプロ志向が強いかによってばらつきはあるが、彼らが音楽活動を行う上で多くの支援が必要であり、音楽活動そのものが彼らの自立・社会進出に非常にポジティブな影響を与えていることを導きだせたことである。

このことは、音楽活動という経済活動としては不安定で、それによる社会的な価値が不確定なものにおいても、行政をはじめ地域社会の支援は重要であり、障がい者の自立・社会進出の促進に大きく寄与していることを示唆している。

次に大きな成果は、障がいをもつ音楽家の演奏は、視聴する一般の人々の障がいに対する見方を変えるのに非常に有効であることが確認されたことである。

具体的には、障がいがあっても現存機能を使って音楽性が高い演奏をすることが可能であることが、明確にわかること。また、演奏家の障がいということで興味をもち、親しみやすく感じるようになることである。

これは、障がい者コミュニティ全体に対して好影響を与えると同時に、社会全体にとっても障がい者への偏見が少なくなり、社会正義の面からも、また自立を促すという意味で経済的な面からも意義深いことである。ただ、このような効果は、法改正や予算措置と比べると即効果がでるものではなく、長期的にとらえる必要はある。

なお、発掘や支援がきっかけとなって著名な障がいをもつ音楽家が輩出されれば、一般の人々の障がい者に対する見方は変わることになる。記憶に新しいのは、ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールで優勝した辻井伸行さんである。辻井さんの活躍は、障がい者であっても個性や、才能を活かせば社会に貢献する事ができることを、多くの人に伝えている。

最後に、音楽を聴く立場の障がい者の支援についても一定の方向性を示すことができた。

車いす席の大量確保、パソコン文字通訳、手話通訳、点字プログラムなどは障がいをもつ視聴

者にとって、ノーマライゼーション社会を前提としたときに必要不可欠である。また、移動が困難な人に提供するインターネット生放送も大きなニーズがあった。

これらの配慮はコストのかかるもので、誰がそれを負担すべきかが課題である。「国連障害者権利条約」³においては合理的配慮について規定があり、障がい者本人ではなく行政、教育機関や企業団体等サービスを提供する側が原則として負担すべきだとしている。

合理的配慮の欠如のため能力があるにも関わらず、一般の就学・就職の機会を奪われている障がい者の存在は社会的資源の著しい損害である。今後、障がい者の権利と経済効率の両面から真剣に議論すべきである。

障がいをもつ音楽家の発掘・支援

本事業における主な研究対象は障がいをもつ音楽家である。よって彼らの発掘・支援については主たるテーマとなる。

そこでまず発掘について分析し、次に 386 組の音楽家データベース、95 名から回答を得たアンケート調査（1-2-1 参照）、13 組 15 ケースの障がいをもつ音楽家への面接調査（1-2-2 参照）、またポータルサイトを制作する中から判明した、各障がいのもつ音楽活動の特性や、それに伴ったニーズや支援策についての分析を障がい別に行う。

それを通して、本事業の成果および今後の問題解決への取り組みとしたい。

発掘

音楽家の発掘は、新たな才能を一般に紹介することである。音楽家は基本的に視聴者がいて成り立つものなので、発掘自体が視聴者を増やすことになり、音楽活動が広がることになるので一つの支援といえる。

発掘の方法は、障がい者の音楽コンテスト「ゴールドコンサート」の出場希望者として作品の音源（CD やテープ）を応募してもらうことによる。前述のように本年度も過年度と同じように新聞やテレビといったマスメディアやホームページで広報を行った。当初、マスメディアの注目度が高く多く取り上げられたが、回を重ねるごとに取り上げられる回数が減った。逆に知名度が上がり当法人のホームページを通して知っての応募が増えつつある。

本年度より前のゴールドコンサート（第 1 から 5 回）で約 338 曲の応募があった。今年度の第 6 回は約 52 曲の応募があり、合計 386 曲の応募があった。これらをデータ化した。このうち、約 100 曲については同じ音楽家、またはグループによるものなので、音楽家としては約 300 組を発掘した。

これらの音楽家、作品の音源は、本人の希望に応じて当法人のホームページに掲載している。

発掘の方法は、基本的に効率的かつ有効である。ゴールドコンサートは、会場としては最高峰の東京国際フォーラムで行い、また障がい者の音楽イベントとしては最も評価が高いものの 1 つなので、音楽を志す多くの障がい者にとってはそれへの出場が大きな目標になる。マスメ

³ 2006 年 12 月 13 日、第 61 回国連総会採択

ディアの取り上げは低調であっても知名度が徐々に高まりつつあるので、彼らおよび関係者に知られる可能性は高い。また、応募資格は、「障がいをもつミュージシャンの方。グループの場合、メンバーのうち障がい者が主な役割を占めていること」で特に障害者手帳等による基準はないので、障がいを受容している者のみとなっている。

なお、本年度および前年度（5,6回）のゴールドコンサートにおいては、オリジナル作品のみの募集であったが、今後はコピーやカバーを含め募集しすそ野を広げ、発掘を続けていく。

支援のあり方

当初、支援のあり方として特に ICT に注目した。とはいえ、障がいをもつ音楽家 95 組のアンケート調査、およびその後の面接調査を進める中で、ICT を使った支援のニーズは、全体としてはそれほど大きなものではなく、音楽活動のスタイルによって大きなばらつきがあることが判明した。また、デジタル・デバイトといわれているように、障がい者の ICT 利用が一般の人々と比べて少ないため、ニーズが潜在化している可能性が高い。実際、音楽活動をする上で必要な支援についての音楽家に対するアンケート調査では、「インターネットのサイトにて紹介」を選択したのは、当法人のサイトについては 8% の人がその必要性を回答しているが、他のサイトにおいては全く必要性には挙げられていなかった。

よって本事業においては、ICT のみに特に注目するのは時期尚早とみて他のニーズの一部として分析を行った。

以下、障がいの種類別の支援のあり方について考察を行った。

1. 視覚障がい

本事業でデータベース化した 386 組⁴のうち最も多い 28% にあたる 108 組が視覚障がい者であった。最新の統計⁵によると、我が国の 724 万人の障がい者のうち約 4.5% にあたる 33 万人が視覚障がい者であった。

これらより、障がい者の音楽家で他の障がいに較べて視覚障がい者が圧倒的に多いことがわかる。仮にデータベース化した 108 組が障がい者の音楽家の人口の割合を代表しているとすると、他の障がいに較べて 6 倍以上多く音楽家になる可能性が高いことにある。

本事業においては、視覚障がい者についてより深く分析するために、6 組 8 ケースと面接調査対象者を最も多くした。

特性

視覚障がいの音楽家の特性は、音楽性・完成度の面で他の障がいに較べて圧倒的に高いことである。ゴールドコンサートの一次審査を通過した本戦出場者の 46% が視覚障がいであることにも強く表れている。

これは、歌唱・演奏する際に直接使う肢体には障がいがなく、知覚・認知の手段として

⁴ 過去 6 回のゴールドコンサートの述べ応募者数。よって、複数年にわたって応募している者は重複してカウントされている。

⁵ 内閣府編『障害者白書 平成 21 年度版』（日経印刷、2009.7）等

聴力で代替する可能性が高いことに影響している。

音楽性・完成度が高いのでプロ志向が強く、8 ケース中何らかの CD を発売しているのは 6 ケース、音楽のみで生計を立てるという意味でのプロはすでに 2 ケースあり最終的にはメジャーデビューを目指している。

音楽活動を通して障がいの理解や社会啓発をするという意図は、全くないわけではないが副次的であり、まずは音楽家として正当に評価してほしいという部分が非常に強い。

ニーズおよび必要な支援

まず、衣食住など最低限の生活基盤についての要望は面接調査では全くなかった。音楽活動する人の自立が進んでいるのか、調査対象者が音楽家として偶然そうなのか、本事業では定かにしていないので、視覚障がい者について必ずしも生活基盤にニーズが少ないとはいえない。ただ、今回の調査や他の調査などから、例えば後述の重度の肢体不自由者に較べると、必要な支援の質・量ともに著しく少ないといえる。ここでは生活基盤については特に考察しない。

さて、彼らにとって一番のニーズは移動をする際の支援である。群馬出身のケース 3 の方は、「(演奏の) 会場まで、となると送迎をお願いすることが多い。交通機関が隅から隅まで、網の目のように行ってもらいたい。電車やバスなど公共交通機関が少ない。車社会にばかりなられると困る」と、そのことを如実に語っている。

音楽家の付き添いは移動の部分だけではなく、演奏する際のセッティング等も必要となってくるので、ケース 12 では次のような指摘もあった。「自分にもサポートしてくれる人が増えてきている。ただ、見えたら誰でもいいかというところではない。特に専門用語とかそれなりの音楽の知識がないと対応は出来ない。普通のガイドヘルパーではムリ」

一方ケース 11 の場合は、現在配偶者である個人的なパートナーが音楽活動の際はいつも付き添い運転して移動を助けていたので、特にニーズがなかった。

移動については、「ガイドヘルパー」を使っているケースはほとんどなく、家族やパートナーのほかにバンドのメンバーなど障がいをもつ音楽家の側で無償の支援者を見つけ何とかしているというのが現状である。音楽家本人の環境及び、人となりによって状況は変わってくる。このことは、音楽の才能があっても、うまく支援者を見つけなければ、音楽活動をする上で著しく不利になる。安定して移動の支援者を供給できるような制度は、行政のほうに求めるべきである。

音楽活動に限らず、視覚障がい者は移動した先でも支援が必要なことが多いが、現在のガイドヘルパーの制度がそれに応えられていない可能性が高い。

ここで、パーソナル・アシスタントについて定義づける。

——介助を必要とする障がい者に個々に専属し、衣食住における最低限の支援のみではなく、社会参加においても必要な支援を行う介助者。行政サービスの一制度でパーソナル・アシスタンス・サービスの中に位置づけられる

ノーマライゼーションを実現するためには、視覚障がいにおいてもパーソナル・アシスタントという概念を取り入れ、本人にとって最も効果的なサービスを提供する必要がある。さらに、本人を理解する家族が「目となること」もニーズとしてかなり高いので、パーソナル・アシスタントして部分的に認めてもよいと考える。

次に強かったニーズは情報の取得であった。

まず ICT が普及してきているため、情報の取得に対する不利が減ったことは確かのことである。ケース 12 の「今はネットの閲覧も音声で可能だし、やる気さえあればやれるとは思う」とある。とはいえ、ケース 12 の「ネットでもなかなか検索はしづらい。どこをどうアクセスしたらいいのかは難しい」いうように、不利は確かに存在する。

情報の取得手段で有効である ICT のインターネットについて面接調査で顕著だったのは、「ほとんど利用しない」タイプと、「かなり自分で使いこなしている」タイプと両極端に分かれたこと。

インターネットを知ったり触れたりする機会がないのは、視覚に障がいがあることと相関があるために「ほとんど利用しない」とすれば、そのような機会を教員機関等が促進すべきである。また、例えばケース 1 で[ゴールドコンサートについては（晴眼者である）妻が新聞で見つけてきた]（面接調査メモ）とあるように、利用すれば社会参加が飛躍的に広がる可能性があるのに、利用する機会が無いのでインターネットに対するニーズが潜在化している可能性もある。

「かなり自分で使いこなしている」タイプはメールやブログや SNS、ホームページの更新を読み上げソフトや点字ディスプレイ等を使って自分でおこなっている。これは、ウェブアクセシビリティについてはわが国でもそれなりに進んでいることは伺える。

しかし、ポータルサイトを作成する上で、音楽や映像を再生する際のプレーヤについては、ウェブアクセシビリティに対応している既存のものがなく、独自で開発をした。ノーマライゼーションを前提とすれば、音楽家特有のニーズであるプレーヤについてもウェブアクセシビリティに対応すべきであり、この点も含めてウェブアクセシビリティについての基準の向上や法制化についても議論が必要である。

その他、楽器や音響機材のアクセシビリティについても 5 ケースの指摘があり要望が強かった。同じような議論が必要だ。

なお、読み上げソフトについては、ケース 12 「(ある特定のソフトに対して)・・・欲しいけど、手に入れられていない。日々技術も更新されているのでいちごっこの部分があるような気がする。バージョンアップしていかなければいけないし、そのたびにお金もかかるし結構厳しいところ」という意見は印象的だった。

「日常生活用具」で認められているが、制度上補助は 1 回のみなので、一度購入してしまうと、より高性能なものには金銭的になかなか手が届かないということである。この点

についてより柔軟な制度に改正すべきである。

さらに、ケース 12「ただたとえば音楽雑誌や新聞が見られる人とのハンディはあるとは思う」とある。紙媒体についても、音声化、点字化、データ化等の配慮について議論する必要がある。

ここで視覚障がい者のニーズに対する「合理的配慮」について考えてみたい。その定義は、国連の障害者権利条約⁶によると、
——合理的配慮とは、配慮特定の場合において必要とされる、障害のある人が他の者と平等な立場ですべての人権及び基本的自由を享有し又は行使することを確保するための、必要かつ適切な変更及び調整であって、不均衡または過度な負担を課さないものをいう。

視覚障がい者がインターネットを利用する際には、ウェブアクセシビリティの標準化と遵守および読み上げソフトが必要である。このようなインターネットの利用の際の配慮は、同程度の情報量の紙媒体における配慮よりも安価であり、合理的配慮の観点からすればより合致しているといえる。

今後、限られた資源の中で何が合理的配慮であるのか、様々な立場や観点から議論を深めていく必要がある。

2. 肢体不自由

本事業でデータベース化した 386 組のうち 2 番目にも多い 26%にあたる 100 組が肢体不自由者であった。最新の統計⁷によると、我が国の 724 万人の障がい者のうち 25.5%が肢体不自由者であり、ほぼ一致した。

よって、仮にデータベース化した障がい者の音楽家の人口の割合を代表しているとする、肢体不自由のうち音楽家になる人は、他の障がいをもつ音楽家になる人と同程度といえる。

本事業においては、肢体不自由者についてより深く分析するために、3 組 3 ケースのインタビュー調査を実施した。

特性

肢体不自由の場合、障がいの重さによって音楽表現スタイルに違いが大きいようである。ここでいう音楽表現スタイルとは、バンド、ピアノ弾き語り、アカペラ、パソコンへの打ち込み、作詞、作曲、編曲、プロデュースといったもので、本人が何を担当し他のメンバーが何を担当するかも含まれる。

肺活量や演奏するのに必要な身体機能が健常者と同程度の場合は、音楽表現スタイルに直接的な影響は少ない。一方で演奏するのに必要な身体機能がない場合は、それが直接的に必要なパソコンへの打ち込み、作詞、作曲、編曲、プロデュースに偏らざるを得な

⁶ 2006 年 12 月 13 日、第 61 回国連総会採択

⁷ 内閣府編『障害者白書 平成 21 年度版』（日経印刷、2009.7）等

い。

視覚障がい者と同じく、音楽活動を通して障がいの理解や社会啓発をするという意図は副次的であり、まずは音楽家として正当に評価してほしいという部分が非常に強い。

ニーズおよび必要な支援

最初に、重度の肢体不自由者は衣食住の生活基盤を始め社会参加においても大きなニーズがあり、広範囲にわたって支援の必要性があるので、重度の筋委縮症のケース 6 に沿って考察する。

現在、居住施設で生活をしている。日常生活動作には大きな制約があり、食事、入浴、着替え、排泄にわたり介助が必要である。パソコンの入力はキーボード・マウスでは不可能なので、トラックボールと呼ばれる機器のみで行っている。

ケース 6 で「施設に住んでいると、時間などの制約があり音楽活動に不利なので、一人暮らしをしたいと思い、準備をしている。」ということである。施設のある同県の地域で自立生活の準備中であるとのこと。それを実現する介護制度はある程度整っているが、彼の日常生活のニーズを考えると同県のサービスでは十分ではない。この点大都市に移転すれば、自立支援法の介護支給量が多いので十分なサービスが受けられるのが現状である。

住居および衣食を支援する介助といった生活基盤が安定しなければ、音楽活動をはじめとする社会参加、また就労は望めないで、今後、地域格差是正を含め制度のあり方について早急に議論が必要である。

次に移動についてである。ケース 6 の場合、電動車いすのまま乗り込めるリフト・タクシーが必要である。「移動手段にかかる金銭的問題が、音楽活動をするのに不利だと思う。安い福祉タクシーがほしい」ということである。

この点において、本事業の主任研究者であり重度の筋ジストロフィーをもつ私自身の調査から、先進国と比べて我が国において最も遅れている分野であることが判明している。このことは、他の肢体不自由 2 ケースのように自身で運転して移動できる場合と比べ、移動に大きな制約がある。移動の制約は、視覚障がい者の部分でも述べたが、音楽活動をはじめとして社会参加や就労の大きな妨げになっているので、対応を行政に強く求めたい。

その他ケース 6 では、自分の作詞・作曲を演奏・歌唱できるバンドメンバーを求め、録音・入力時のボランティアを求めている。このような人的支援はインターネットを通じて募集しているが、あまりうまくいっていないようだ。行政としては、パーソナル・アシスタントの制度でニーズが満たせる可能性が高いので、他の制度も含めて議論が必要である。

このように、重度の肢体不自由の場合、住居、介護、移動等の生活基盤から実際に音楽活動をするためのメンバー、支援者まであらゆる段階で、また行政や民間団体、地域社会等様々なソースからの支援が必要である。

このケース 6 も含めて肢体不自由の 3 ケースにおいて顕著であったのが、音楽活動のマネージャーを強く望んでいることである。音楽家として実績がありある程度認められてい

ることもその理由の1つある。また、移動が不利であることと関連がある可能性が大きい。営業や管理といったマネージャーのやる仕事は、移動が多く、体力が必要なので肢体不自由者自身で行うには限界がある。

マネージャーの配置については一般的に営利目的となり行政のサービスには馴染まない。音楽活動による収益が十分にあるケースは、今回の調査対象者386組の中にはなく、また職業人としてのマネージャーがいるのは大手レコード会社からデビューをした視覚障がい者1名のみしか確認できていない。

ここで、視覚障がい者の部分でも述べたが、移動した先に明らかに障がいがあるために生まれるニーズがある。ライブハウスなど発表の場は地下にあったり段差があったりするので、ケース8のように車いすごと運んでもらうことがある。もちろん、受け入れる側の責任でそのような支援があることが理想的であり、ケース8でもそうしている。

とはいえ、行政においてもパーソナル・アシスタント・サービスを提供することにより、支援することはできる。マネージャーまではいかなくても、手となり足となってくれるサービスがあれば、肢体不自由者としての不利は補完することができる。現在の自立支援法においては、介助者ができる仕事の内容に制限が多いため、支給量が多い都市部においても必要な介助サービスが存在するとは言い難い。

マネジメントの一部として、2 ケースにおいてホームページの運営を他の誰かにやってほしいということがあった。まず、ケース6においては、普通よりも入力にかなり時間がかかるので、このようなニーズが強い。

もう1つのケース8は介助が必要なくかなり軽度ではあるが、あまりパソコン自体を使いこなせていないようなので、他人にお願いしたいと推測される。なお、残りのケース7においては自身でホームページの運営をしている。

肢体不自由者においてはパソコンやインターネットの利用は、自由に動けないことを代替する意味で教育や啓発はかなり進んでいるし、実際に自身で利用するかまたは他人に依頼して利用するかは本人の嗜好やリテラシーの程度に依存している部分も強い。

もちろん入力には不利があるので、重度の人についてはそのための支援機器を提供するのは、社会的に求められるところである。この点については前述の視覚障がい者の「日常生活用具」の議論と同じである。

また、不利を緩和するアクセシビリティだけではなく、使いやすさの面でのユーザビリティ、情報リテラシーを向上させるための支援についても考える必要がある。

3. 知的障がい

本事業でデータベース化した386組のうち13%にあたる50組が知的障がい者であった。最新の統計によると、我が国の724万人の障がい者のうち7.6%が知的障がい者であった。

この差は、ゴールドコンサートは音楽性・完成度の高さを競うものなので、知的障がいの音楽家の応募が少なくなる傾向にあると推測する。

本事業においては、知的障がいについてより深く分析するために、3組3ケースのインタビュー調査を実施した。

特性

知的障がいについて。親族が最大の支援者であり一体となって活動していることである。この点、面接調査をした 2 ケースでも共通している。また、複数組の知的障がい者とその親がバンドを組んでいるケースも多々見られる。

ケース 14 においては音楽一家に生まれ、両親や兄弟は共演者でありマネージャーの役割を自然にしている。ケース 15 においては親子 2 人が一体となり活動している。

今回の 2 ケースにおいては、比較的重度であるため本人の意思を確認する事は難しいので、調査の回答者の回答内容をもとに分析する。

これら知的障がいのケースの特徴は、音楽性のみを追求するのではなく、知的障がい者に対する理解や、同じ障がいをもつ人々の励みになること、さらに純粹さという障がいの特性を国際協調や平和の活動に繋げていくようなメッセージ性の部分が強いことである。

ニーズおよび必要な支援

メッセージ性の部分が強いので、最大のニーズとしては、多くの人々に知ってもらえるメディア、特にマスメディアに取り上げられるような環境である。よって ICT の領域であるインターネットも単にメディアの 1 つとしてとらえる。

この点についての支援は全く行政には馴染まない。逆に家族が最大の支援者となる。支援する家族の力量、すなわち金銭的なもの、人的ネットワーク、プロデュース力が本人の活動を大きく左右すると考えられる。

とはいえ、本人が家族の力量を超える才能をもっているすれば、マネジメントやプロデュースはプロである他人がするほうが効果的である。

ケース 14 では、回答者の一流の音楽家である兄がそのような方向で、本人を大きく羽ばたかせようとしている。成功すれば我が国ではあまり例が無いので、その社会的な意義は大きい。

4. 精神障がい

本事業でデータベース化した 386 組のうち 22%にあたる 85 組が精神障がい者であった。最新の統計によると、我が国の 724 万人の障がい者のうち約 41.9%にあたる 303 万人が精神障がい者であった。

これらより、障がい者の音楽家で他の障がいに較べて精神障がいが少ないことがわかる。

特性

精神障がいをもつ音楽家の音楽活動と障がいについての啓発の一体化の傾向は、非常に強い。これは、ケース 9 の「自分の音楽や音楽活動を広く知ってもらうこと、精神障がい者に関する知識・認識の普及・啓蒙に良いツールではないかと思う」に表れている。

また、精神障がい者の作品を 85 曲聴く中で、歌詞の中で障がい特有の苦しみやある段階を乗り越えたときの心境を歌っているものが多いところにも表れている。

さらに、ゴールドコンサートへの精神障がい者の応募は 22%であるのに対し、一次審査

を通過したのは4%であることやにも表れている。

このような傾向は、見た目ではわかりにくい障がいであることが影響している可能性が高い。

ニーズおよび必要な支援

最初に、生活基盤について一般就労されているケース9で切実なご意見があったので、少々長くなるが紹介したい。

「障がい年金は低すぎると思うんですよ。精神の場合は、国民年金でいうと、2級と1級だけなんですよね。2級だと5万ちょっと、6万に満たないくらいですけど。それに比べて、なかなか仕事に就けない人たちが作業所に来てくれるんですけど、障がい者年金って、親と一緒にいて、誰かが食べさせてくれてるうちはいいですよ。おこづかいみたいな感じで。だけど、その人がひとりで暮らしていくとなると、できないです。生活保護を受けてやっている方のほうが、基本的にうらやましいっていうか、もっと上なんですよね。」

精神障がいを持ちながら就労の辛さとともに語られた。障がいの特性や環境によって支援のあり方を考える必要がある。

特性のところでも述べたように音楽活動と障がいについての啓発の一体化の傾向は、知的障がいの場合と同じで、メディアへの紹介が重要となる。ただ、精神障がいの場合、メディアへのアプローチの仕方は本人にかかっている。

インターネットやマスメディアなど様々なメディアへの紹介は、当法人および関連団体が得意とするところなので、支援の強化をしていきたい。

4. 内部障がい

本事業でデータベース化した386組のうち4%にあたる15組が内部障がい者であった。最新の統計によると、我が国の724万人の障がい者のうち約15.5%にあたる112万人が内部障がい者であった。

障がい者の音楽家で他の障がいに較べて内部障がいの応募が著しく少ないことがわかる。

特性

応募が著しく少ないことは、内部障がい者の障がいの受容、見た目ではわかりにくい障がいであることと深いかわりがあると推測する。一言で述べると、障がい者であることが応募資格であるゴールドコンサートに応募し、障がいを公表したり「障がい者として」活動したりすることを差し控える傾向にある。

逆に、障がいを受容し公表するゴールドコンサートに応募するような音楽家、例えば今回の2ケースの場合は、見た目ではわかりにくい障がいだからこそ障がい理解の促進や啓発を音楽活動とともに行っているようである。

とはいえ、面接調査をした2ケースについては音楽活動が主で、障がいの啓発は副というかんじが強く、彼らが制作する音楽の中では例えば歌詞の中から啓発の要素を直接感じ取ることはなかった。音楽活動と障がいについての啓発の一体化の傾向は見られない。

ニーズおよび必要な支援

よって知的障がい、精神障がいの場合と同じで、メディアへの紹介が重要となる。ただ、メディアへのアプローチの仕方および音楽表現スタイルは本人にかかっている。

例えば、内部障がいのケース 7 ではインターネットを有効に活用している。また、障がいをもつ音楽家同志のコラボレーションをプロデュースすること等、マスメディアへの取り上げを促進するような活動をしている。

インターネットやマスメディアなど様々なメディアへの紹介は、当法人および関連団体が得意とするところなので、支援の強化をしていきたい。

なお、内部障がい特有の例えばインシュリン注射のように医学的側面が強いニーズについては考察を控える。

5. その他の障がい

本事業でデータベース化した 386 組のうち 2%にあたる 7 組が聴覚障がい者であった。最新の統計によると、我が国の 724 万人の障がい者のうち約 5.0%にあたる約 36 万人が聴覚障がい者であった。

聴覚障がい者の舞台芸術については一つの文化論として語られる部分が多いので、深く分析するのは避けるが、聴覚障がい者であっても音楽表現することはできるのは確かである。現存聴力を活かした打楽器演奏、著しい訓練によるボーカル、手話コーラスなどである。

ニーズや支援については、今回の調査であまり明らかにすることはできなかった。今後、さらなる調査、研究が必要である。

発達障がいについては、知的障がいや精神障がいと重なる部分もあると推測できるが、本事業の中で十分な障がいについて統計や知識をえることができなかったので、考察を控える。

今後の方向性

これまで障がいをもつ音楽家の発掘・支援を行ってきた。音楽家にとって最も必要なことは、発表する機会であることを認識した。障がい者の音楽コンテストであるゴールドコンサートは、その意味で、いい機会を提供してきた。それがきっかけで、徐々にではあるが、メジャーデビューをして多くのライブを開催したり、地域や企業においてさらなる発表の場が広がったりする人が増えてきた。

また、障がい者の移動の不利を緩和する目的で、音源等を紹介できるポータルサイトも設置した。この点においても、利用が増え障がいをもつ音楽家からも好評を得ている。

とはいえ、プロとしてやっていくには、多くの場合 CD 等音源を流通させて収益をあげなければならない。その部分は我々非営利活動の支援では対応することはできない。

今後はゴールドコンサートの継続的な開催を通して、できるだけ多くの方々に参加し理解を深めてもらい、特に年齢層の低い音楽家を発掘し、障がい者の自立・社会進出を促進していきたい。

また、ポータルサイトの活用を含めた ICT については、障がいをもつ音楽家にとって活動を広げていくためには有効な手段であるので、規制や支援のあり方についてさらなる研究が必要である。

主任研究者

貝谷 嘉洋（かいや よしひろ） 略歴

1970年生。岐阜市出身。筋ジストロフィーのため14歳で歩行不能。現在、日常生活の全般にわたって介助が必要、リクライニング式電動車椅子を使用。

主な略歴

1993年 単身で渡米し自立生活開始。

1997年 野田聖子郵政大臣政策秘書を務める。

2000年 手先だけで運転できるジョイスティック車を自身で運転し、アメリカ一周。

2001年 ジョイスティック車では日本ではじめて運転免許新規取得。NPO 法人日本バリアフリー協会設立。

2003年 第1回ゴールドコンサート主催。

2005年 第2回ゴールドコンサート主催。以後、2009年（第6回）まで毎年。

学歴

関西学院大学商学部卒業

カリフォルニア大学バークレイ校ゴールドマン政策大学院修了

上智大学文学研究科社会学専攻（社会福祉コース）博士後期課程修了

著書

「魚になれた日ー筋ジストロフィー青年のバークレイ留学記」講談社

「ジョイスティック車で大陸を駆ける」日本評論社

「介護漫才」小学館

主な現職

NPO 法人日本バリアフリー協会 代表理事

NHK 厚生文化事業団障害福祉賞の専門委員

月刊誌ニューメディア 特別リポーター

受賞等

1995年第3回読売福祉文化賞 大賞

共同研究者

宮腰恵理子

参考文献

1. 内閣府編『障害者白書 平成 13 年度版 障害のある人と IT』（財務省印刷局、2001.12）
2. 内閣府編『障害者白書 平成 21 年度版』（日経印刷、2009.7）
3. 障害者福祉研究会編『障害者自立支援用語辞典』（中央法規出版、2008.4）
4. 東京都福祉局編『東京都社会福祉基礎調査報告書 平成 20 年度』（東京都福祉保健局総務部総務課、2009.10）
5. 伊藤智佳子、長瀬修、平野華織『支援・援助者をめざす人たちの基本姿勢』（一橋出版、2002.10）
6. 中島隆信『障害者の経済学』（東洋経済新報社、2006.2）
7. 岡典子『視覚障害者の自立と音楽 アメリカ盲学校音楽教育成立史』（風間書房、2004.3）
8. 花田春兆監修『目でみる「心」のバリアフリー百科』（日本図書センター、2002.2）

特定非営利活動法人日本バリアフリー協会

〒102-0093 東京都千代田区平河町 1-7-16-801

URL <http://www.npojba.org>

E-mail info@npjba.org